

中田遺跡

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告56

I 中田遺跡（第15次調査）

II 中田遺跡（第14・25次調査）

1997年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



中田遺跡

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告56

I 中田遺跡（第15次調査）

II 中田遺跡（第14・25次調査）

1997年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心にあたります。古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しております。

近年、急激な都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

この度、中田遺跡第14次・第15次・第25次調査の遺物整理が完了し、報告する運びとなりました。中田遺跡は八尾市の中心部にあたり、玉串川と長瀬川に挟まれた沖積地に位置する弥生時代から近世に至る複合遺跡であります。第14次調査では古墳時代前期に作られた精巧な削抜きの井戸が検出され、当時の高度な加工技術を垣間見る資料であります。また土坑から多量の遺物が出土され、当時の生活用具を知る上で大変貴重な調査であります。また第25次調査では平安時代後期の集落遺構が検出されています。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が関係諸機関及び地元の皆様の多大なるご理解とご協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層のご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成9年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 木山 丈司

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が実施した発掘調査の成果報告書を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成9年3月をもって終了した。

1. 本書に収録した報告は次のとおりである。

1. 本書に収録した各調査報告の文責は、Iが西村公助、IIが岡田清一で全体の構成・編集は高萩千秋が行った。

1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の2,500分の1地形図（昭和61年8月）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成8年10月1日改正）をもとに作成した。

1. 本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海面（T.P.+）である。

1. 本書で用いた方位は磁北及び国土座標の真北である。

1. 遺構は下記の略号で表した。

豊穴住居—S I 挖立柱建物—S B 井戸—S E 土坑（土壙）—S K 溝—S D

小穴・柱穴—S P 落ち込み—S O 土器集積—S W 自然河川—N R 不明遺構—S X

1. 遺物実測図は断面の表示によって下記のように分類した。

弥生土器・土師器・瓦器・埴輪—白 須恵器・陶磁器—黒 石製品・木製品—斜線

1. 各調査に際しては、写真・実測図のほかにカラースライドも多数作成しており、市民の方々に広く利用されることを希望する。

目 次

はしがき

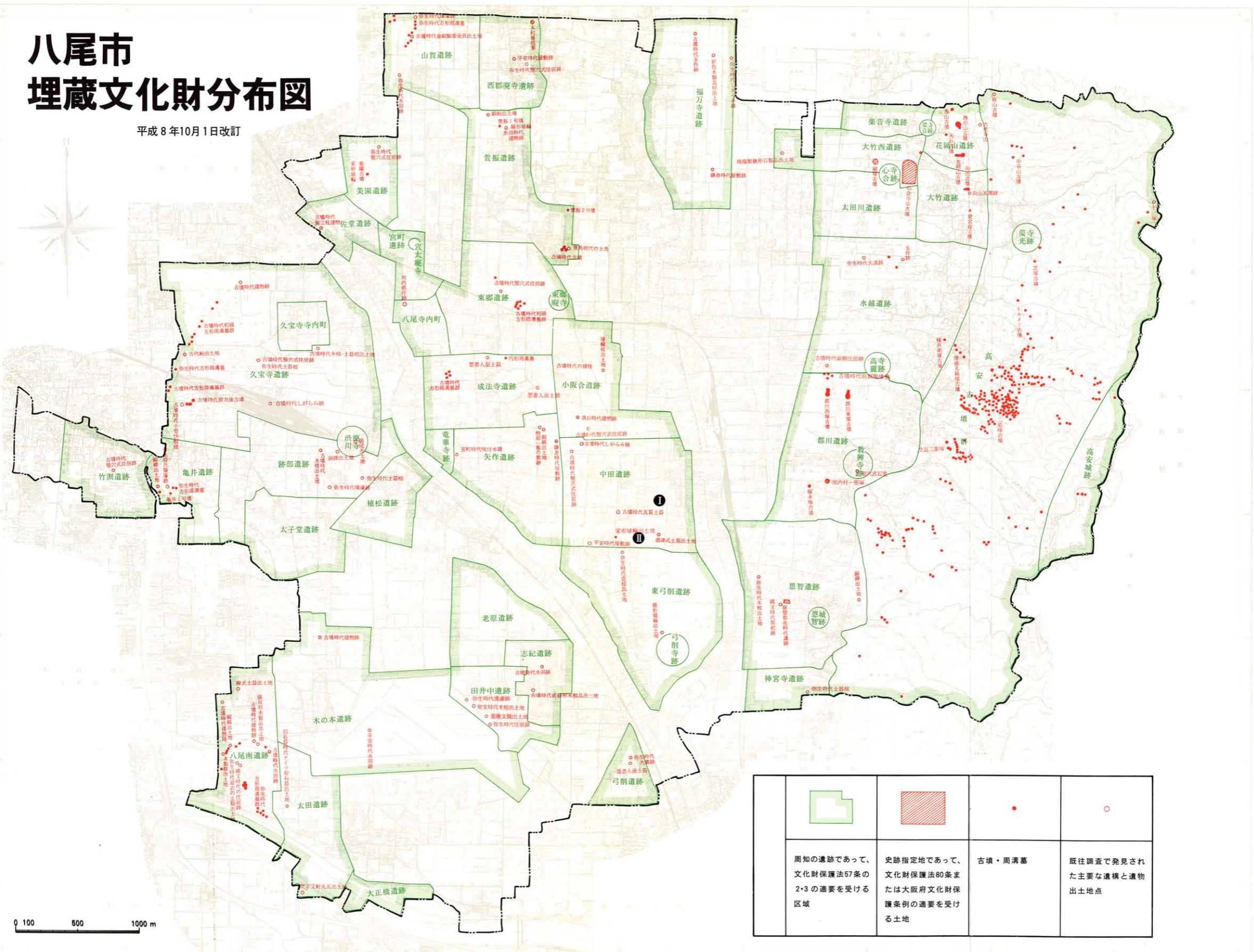
序

八尾市埋蔵文化財分布図

I 中田遺跡 第15次調査 (NT92-15)	1
II 中田遺跡 第14次・25次調査 (NT92-14・NT94-25)	13

八尾市 埋蔵文化財分布図

平成8年10月1日改訂



I 中田遺跡第15次調査 (NT92-15)

例　　言

1. 本書は、八尾市刑部2丁目地内で実施した公共下水道工事（平成4年度第24工区）に伴う発掘調査報告である。
1. 本書で報告する中田遺跡第15次調査（NT92-15）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第137号 平成4年11月19日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成5年3月8日から4月15日（実働15日間）にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約35m²を測る。なお、調査においては能勢尚樹、瀬尾泰大が参加した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物復元・実測－中西明美、西村和子、図面レイアウト・トレース－中西、西村（和）、西村（公）が行った。
1. 本書の執筆、編集は西村（公）が行った。

本　文　目　次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 調査概要.....	3
第1節 調査方法と経過.....	3
第2節 検出遺構と出土遺物.....	3
1) 1区.....	3
2) 2区.....	9
第3章 出土遺物観察表.....	10
第4章 まとめ.....	12

挿　図　目　次

第1図 調査地周辺図.....	1
第2図 1区 基本層序図.....	3
第3図 SK-101(1～3)出土遺物実測図.....	4
第4図 SK-102(4)出土遺物実測図.....	4

第5図	S P - 102 (5) 出土遺物実測図	5
第6図	S D - 101 (6・7) 出土遺物実測図	5
第7図	S D - 101 (8~18) 出土遺物実測図	6
第8図	S D - 101 (19~22) S D - 102 (23~26) 出土遺物実測図	7
第9図	S D - 201 (27) 出土遺物実測図	7
第10図	1区 検出遺構平面図	8
第11図	第2層 (28) 第3層 (29~31) 出土遺物実測図	9
第12図	2区 基本層序図	9
第13図	第3層 (32) 出土遺物実測図	9

表 目 次

第1表	財団法人八尾市文化財調査研究会 中田遺跡調査一覧表	2
-----	---------------------------	---

写 真 目 次

写真1	調査地周辺 (南から)	1
-----	-------------	---

図 版 目 次

図版一	1区 全景 (北から) 1区 S K - 101 遺物出土状況 (南から) 1区 S D - 101 遺物出土状況 (南から) 1区 下層掘削状況 (西から) 2区 掘削状況 (南から) 2区 北壁面 (南から)
図版二	S K - 101 (1~3) S K - 102 (4) S P - 102 (5) 出土遺物
図版三	S D - 101 (6~9・11・12) 出土遺物
図版四	S D - 101 (16・17・19~21) 第3層 (29) 出土遺物

第1章 調査に至る経過

中田遺跡は八尾市のほぼ中央に位置する遺跡で、中田1～6丁目、八尾木北1～6丁目、刑部1～4丁目付近にあたる。地理的には河内平野のほぼ中央部を流れる長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地にあたる。当遺跡の西には矢作遺跡が、南には東弓削遺跡が、北には小阪合遺跡がある。

当遺跡内では、当調査研究会が平成7年度までに31件の調査を行っている他、大阪府教育委員会文化財保護課、八尾市教育委員会文化財課により調査が実施されており、弥生時代～近世に至る遺跡であることが確認されている。

今回の調査地の近辺では数多くの発掘調査が行われている。特に当調査研究会の第17次調査地（第1図の⑥）では、弥生時代末から古墳時代初頭の土器集積内から特殊器台が出土しており、また第11次調査地（第1図の③）でも、弥生時代末から古墳時代初頭の包含層を確認している（第1図・第1表参照）。上記の通り近接している調査地では遺構や遺物が多く確認されていることから、今回の工事予定地にも遺構の検出および遺物の出土が予想された。この為八尾市教育委員会文化財課は、工事により埋蔵文化財が破壊される部分について発掘調査を実施することが必要であると判断し、その旨を事業者に通知した。この事により発掘調査を実施するに至ったもので、事業者、八尾市教育委員会文化財課、財団法人八尾市文化財調査研究会との間で取りかわした三者協定に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて実施した発掘調査である。



第1図 調査地周辺図



写真1 調査地周辺（南から）

第1表 財団法人八尾市文化財調査研究会 中田遺跡調査一覧表

調査位置	略号	次	調査地	年度	調査原因	調査面積	調査期間	文 献
	NT87-01	1	中田2丁目29・39	S62	共同住宅	100	S630222～0311	1988「八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告16
	NT89-02	2	中田3～4丁目	H01	公共下水道	70	H011013～1127	1990「八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告28
	NT89-03	3	八尾木北4～5丁目	H01	公共下水道	132	H011202～H020331	1992「平成4年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅰ)」成法寺 中田 竹瀬 (財)八尾市文化財調査研究会報告35
	NT89-04	4	八尾木北5丁目	H01	公共下水道	95	H011212～H020118	1992「平成4年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)」成法寺 中田 竹瀬 (財)八尾市文化財調査研究会報告35
	NT90-05	5	八尾木北1丁目37番地2	H02	関西電力鉄塔	80	H021126～1204	1995 中田遺跡「財団法人 八尾市文化財調査研究会報告49」(財)八尾市文化財調査研究会報告49
①	NT90-06	6	八尾木北3丁目～刑部2丁目地内	H02	公共下水道	180	H030116～0228	1995 中田遺跡「財団法人 八尾市文化財調査研究会報告49」(財)八尾市文化財調査研究会報告49
②	NT91-07	7	八尾木北3丁目340・341番地	H03	共同住宅	90	H030517～0527	1992「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」久宝寺 恩智 中田 水越 萱振 大竹西 東郷 竜華寺跡 踏部 木の本 (財)八尾市文化財調査研究会報告34
	NT91-08	8	八尾木北5丁目98～105	H03	温泉旅館新築	500	H031105～1201	1995 中田遺跡「財団法人 八尾市文化財調査研究会報告49」(財)八尾市文化財調査研究会報告49
	NT91-09	9	中田1丁目3	H03	共同住宅	294	H031205～1218	1992「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」久宝寺 恩智 中田 水越 萱振 大竹西 東郷 竜華寺跡 踏部 木の本 (財)八尾市文化財調査研究会報告34
	NT92-10	10	八尾木北3丁目地内	H04	河川改修	450	H041106～H050122	
③	NT92-11	11	刑部3丁目地内	H04	公共下水道	81	H041106～H050323	1993「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」跡部 小阪合 中田 美園 東郷 久宝寺 成法寺 竹瀬 植松 太子堂 東弓削 田井中 (財)八尾市文化財調査研究会報告39
	NT92-12	12	中田2丁目405番地	H04	共同住宅	120	H050119～0130	1993「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」跡部 小阪合 中田 美園 東郷 久宝寺 成法寺 竹瀬 植松 太子堂 東弓削 田井中 (財)八尾市文化財調査研究会報告39
	NT92-13	13	八尾木北5丁目	H04	関西電力	123	H050128～0303	1993「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」跡部 小阪合 中田 美園 東郷 久宝寺 成法寺 竹瀬 植松 太子堂 東弓削 田井中 (財)八尾市文化財調査研究会報告39
④	NT92-14	14	八尾木北6丁目地内	H04	公共下水道	170	H050130～0304	
⑤	NT92-15	15	刑部2丁目地内	H04	公共下水道 24工区	35	H050308～0415	
	NT93-16	16	八尾木1丁目33・34	H05	共同住宅	170	H050517～0527	1994「財団法人 八尾市文化財調査研究会報告43」中田 八尾南 山賀 (財)八尾市文化財調査研究会報告43
⑥	NT93-17	17	刑部3丁目82-2	H05	共同住宅	150	H050728～0811	1994「財団法人 八尾市文化財調査研究会報告43」中田 八尾南 山賀 (財)八尾市文化財調査研究会報告43
⑦	NT93-18	18	刑部3丁目地内	H05	関西電力	10	H051004～1009	1994「財団法人 八尾市文化財調査研究会報告43」中田 八尾南 山賀 (財)八尾市文化財調査研究会報告43
	NT93-19	19	八尾木北6丁目1～31-2番地先	H05	河川改修	390	H051012～1201	
⑧	NT93-20	20	八尾木北6丁目地内	H05	公共下水道 36工区	28	H051012～1015	1994「財団法人 八尾市文化財調査研究会報告43」中田 八尾南 山賀 (財)八尾市文化財調査研究会報告43
⑨	NT93-21	21	刑部3丁目地内	H05	公共下水道 63工区	28	H051020～1022	1994「財団法人 八尾市文化財調査研究会報告43」中田 八尾南 山賀 (財)八尾市文化財調査研究会報告43
⑩	NT93-22	22	刑部3丁目～八尾木北6丁目	H05	関西電力	22.5	H060118～0214	1994「財団法人 八尾市文化財調査研究会報告43」中田 八尾南 山賀 (財)八尾市文化財調査研究会報告43
	NT93-23	23	中田4丁目118	H05	防水工事	64	H060301～0304	1994「財団法人 八尾市文化財調査研究会報告43」中田 八尾南 山賀 (財)八尾市文化財調査研究会報告43
⑪	NT94-24	24	刑部4丁目210-1	H06	共同住宅建設	184	H060413～0426	1995 中田遺跡「財団法人 八尾市文化財調査研究会報告49」(財)八尾市文化財調査研究会報告49
⑫	NT94-25	25	八尾木北6丁目地内	H06	公共下水道 第68工区	90	H060530～0622	
	NT94-26	26	中田1丁目20,21-1,22-2,33	H06	共同住宅建設	270	H060704～0715	
	NT94-27	27	八尾木北6丁目19	H06	共同住宅建設	160	H061107～1122	
⑬	NT94-28	28	刑部2丁目地内	H06	公共下水道 6-5工区	20.96	H061118～1205	1995 中田遺跡「財団法人 八尾市文化財調査研究会報告49」(財)八尾市文化財調査研究会報告49
	NT95-29	29	中田3丁目50番地先	H07	公共下水道	44	H070817～0831	
⑭	NT95-30	30	刑部2丁目地内	H07	公共下水道	56	H070920～1013	
	NT95-31	31	刑部1丁目183,184	H07	共同住宅	120	H071106～1115	

第2章 調査概要

第1節 調査方法と経過

工事による掘削場所は2箇所（発進立坑1箇所・発進、到達立坑1箇所）あり、南の発進立坑を1区、(東西4m×南北6.8m) 北の発進、到達立坑を2区(東西2.7m×南北2.7m)とした。

調査に際しては、周辺の調査成果をもとに、現地表下1.0mまでに存在する盛土を機械で掘削し、以下約0.5mは人力掘削を行い調査を実施した。また、人力掘削終了後、発進立坑部分は掘削最終深度の現地表下約4.1m、到達立坑部分は現地表下約4.4mまでの下層確認調査を実施した。

第2節 検出遺構と出土遺物

1) 1区

東西4m×南北6.8mの発進立坑掘削工事の調査区である。

①基本層序

東壁

第0層 盛土。層厚1.0m。 0' 水道管埋設時の盛土。

第1層 灰色(N5/) シルト混粘土。層厚0.1m。

第2層 褐灰色(7.5Y4/1) 粗砂混粘土。層厚0.2m。

第3層 褐色(7.5Y4/4) 細砂混粘土。層厚0.2m。

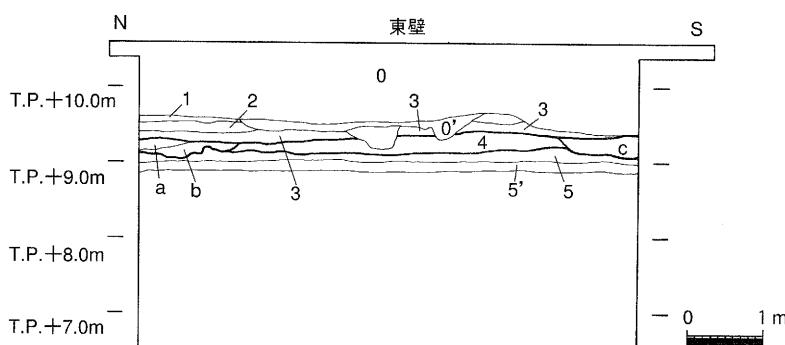
第4層 黄褐色(10YR5/6) 粗砂混粘土。層厚0.3m。上面は第1面である。

第5層 黄褐色(2.5Y5/4) シルト質粘土。層厚0.2m。上面は第2面である。 5' 細砂。

第6層 灰色(7.5Y4/1) 細砂～粗砂。層厚2.4m以上。

a 暗褐色(10YR3/3) シルト混粘土 b 褐灰色(7.5YR4/1) 粘土(SD-102埋土)

c 褐色(10YR4/4) 細砂混粘土 (SD-101埋土)



第2図 1区 基本層序図

②検出遺構と出土遺物

第1面

現地表下1.3m (T.P.+9.3m) に存在する第4層上面で、弥生時代後期前半の土坑2基 (SK-101・SK-102)、小穴3個 (SP-101~SP-103)、溝2条 (SD-101・SD-102) を検出した。

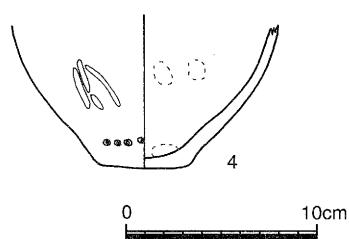
土坑 (SK)

SK-101

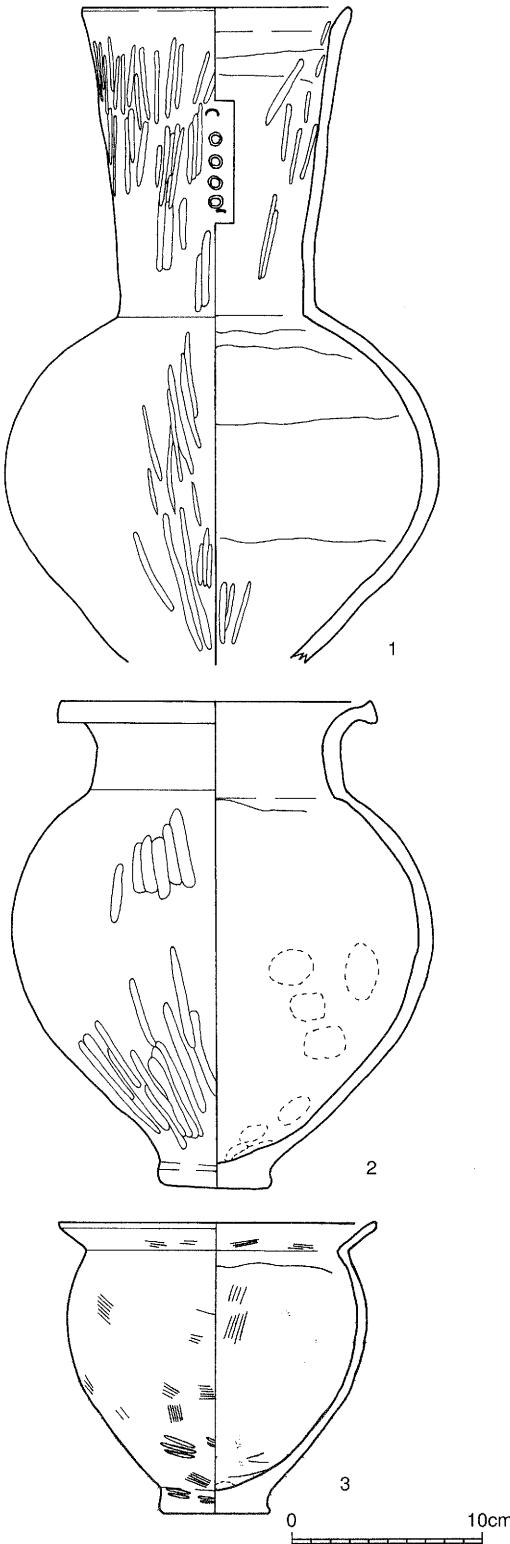
平面の形状は南北方向に長い楕円形を呈する。東西幅1.05m、南北幅1.25m、深さ0.15mを測る。内部の堆積土は上から黒褐色(2.5Y3/2)粘土〔下に炭含む〕・暗緑灰色(7.5GY4/1)粘質シルトである。黒褐色(2.5Y3/2)粘土層からは弥生時代後期初頭の長頸壺(1)、広口壺(2)、小形甕(3)が出土している。

SK-102

平面の形状は東西方向に長い楕円形を呈する。径1.1m、深さ0.2mを測る。内部の堆積土は上からオリーブ色(5Y6/6)シルト混粘土・オリーブ灰色(10Y4/2)細砂混シルトである。内部からは弥生時代後期初頭の壺(4)が出土した。



第4図 SK-102 (4) 出土遺物実測図



第3図 SK-101 (1~3) 出土遺物実測図

小穴 (S P)

S P-101～S P-103

調査地のほぼ中央で検出した。径0.25～0.3m、深さ0.1mを測る。埋土はS P-101とS P-103が上から灰色(10Y4/1)粘土・緑灰色(10GY5/1)シルト、S P-102が灰オリーブ色(7.5Y5/2)シルト混粘土である。S P-102内からは小形壺(5)が出土した。

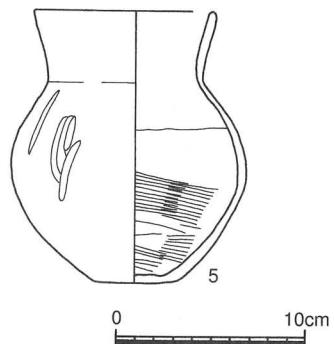
溝 (S D)

SD-101

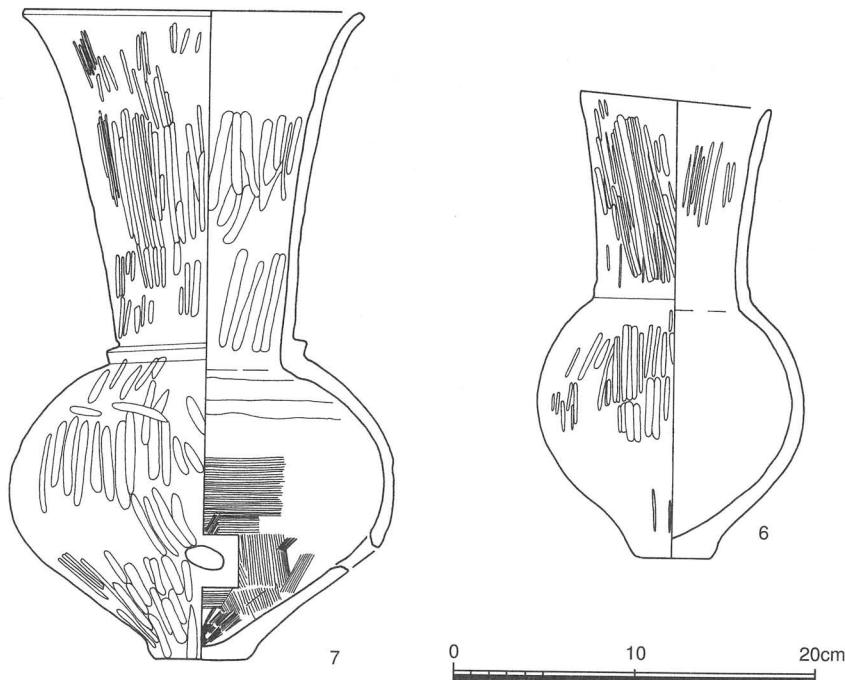
調査地の南側で検出した。東西方向に伸びる。幅1.2m以上、深さ0.3m以上を測る。内部の堆積土は褐色(10YR4/4)細砂混粘土である。内部からは弥生時代後期初頭の長頸壺(6～8)、広口壺(9)、壺(10)、小形壺(11)、楕円高壺(12・15)、高壺(13・14)、器台(16～18)、甕(19)、小形甕(20～22)が出土した。

SD-102

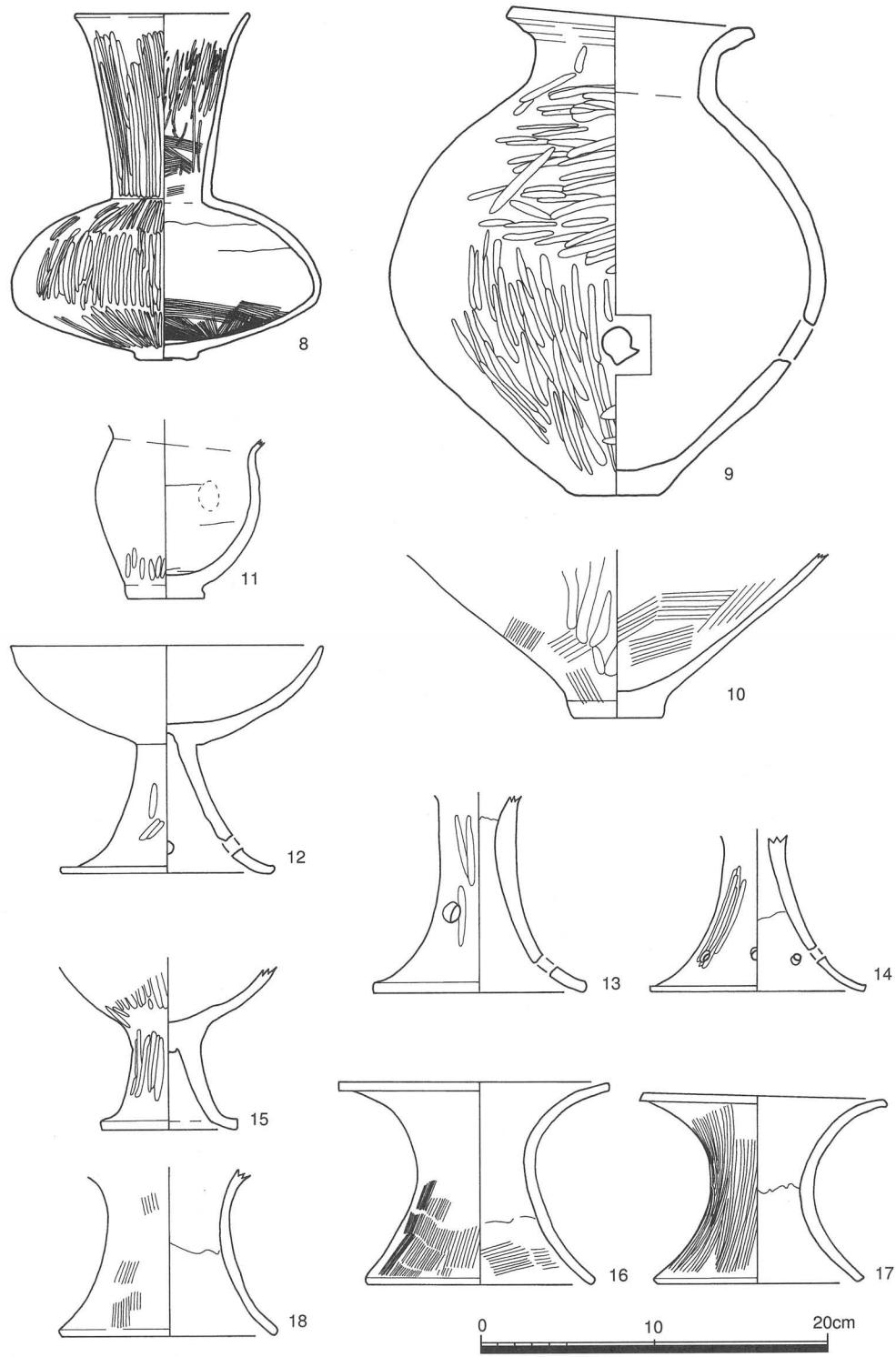
調査地の北側で検出した。東西方向に伸びる。幅1.0m以上、深さ0.25m以上を測る。内部の堆積土は上から暗褐色(10YR3/3)シルト混粘土・褐灰色(7.5YR4/1)粘土である。内部からは弥生時代後期初頭の広口壺(23)、小形壺(24)、高壺(25)、甕(26)が出土した。



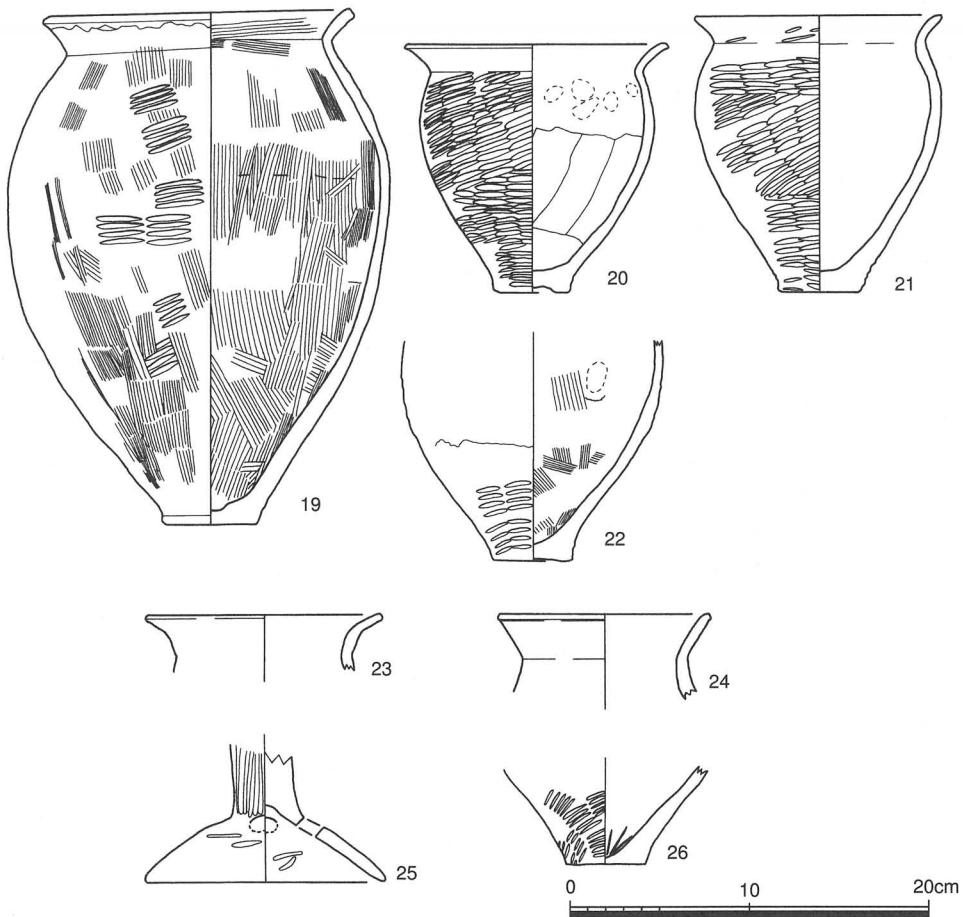
第5図 S P-102 (5) 出土遺物実測図



第6図 SD-101 (6・7) 出土遺物実測図



第7図 SD-101(8~18)出土遺物実測図



第8図 SD-101 (19~22) SD-102 (23~26) 出土遺物実測図

第2面

第1面から0.2m下層 (T.P.+9.1m) に存在する第5層上面で、弥生時代後期前半の溝1条 (SD-201) を検出した。

溝 (SD)

SD-201

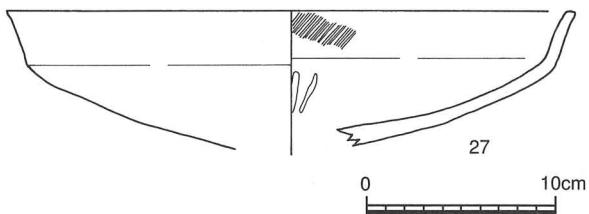
調査地の南東から北西方向に流路を持つ。幅0.3m、深さ0.1mを測る。

内部の堆積土は灰色 (N5/) 粘土で

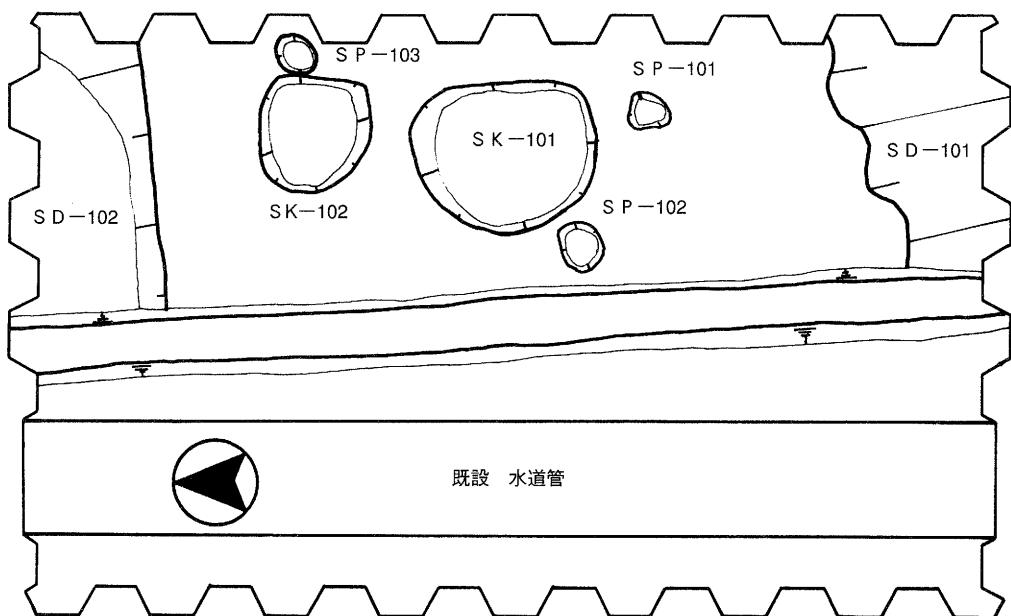
ある。内部からは弥生時代後期初頭の高坏 (27) が出土した。

包含層内出土遺物

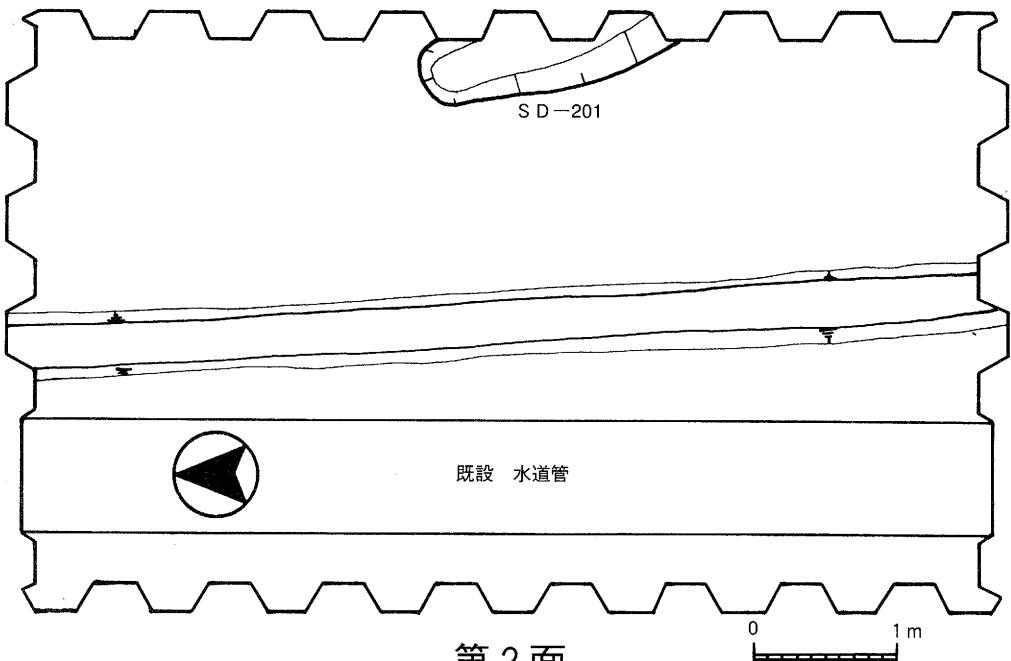
第2層からは、瓦器の椀 (28) が、第3層内からは、土師器の小形壺 (29)、小形鉢 (30)、



第9図 SD-201 (27) 出土遺物実測図



第1面



第2面

第10図 1区 検出遺構平面図

弥生時代後期の小形甕（31）が出土した。なお、第2面の調査終了後、工事掘削最終深度（現地表下約4.1m）までの堆積土層の確認を行った。確認の結果、現地表下1.5m～4.1mまでは砂層（第6層）が堆積していた。層内からは時期不明の土器の破片が1点出土した。

2) 2区

東西2.7m×南北2.7mの到達立坑掘削工事の調査区である。

①基本層序

北壁

第0層 盛土。層厚1.0m。

第1層 灰白色（2.5Y7/1）粘土。

層厚0.2m。

第2層 灰色（5Y5/1）粘土。

層厚0.1m。

第3層 暗灰色（N3/）シルト混粘土。

層厚0.3m。弥生時代後期の遺物含む。

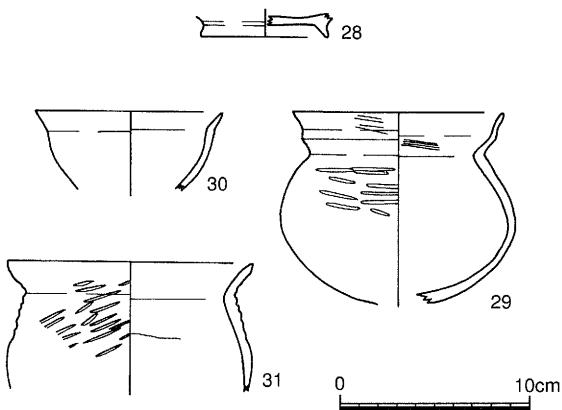
第4層 灰色（N5/）シルト・細砂。

層厚2.8m以上。

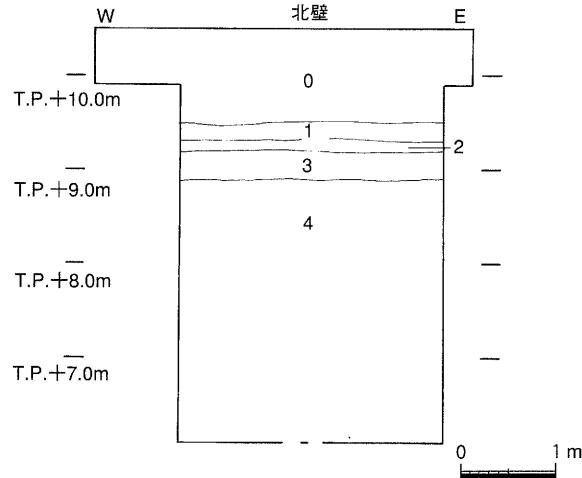
②検出遺構・出土遺物

既設の水道管およびガス管が、現地表下1.5mまで存在しており、管を入れる時の工事掘削により1.5mまでの堆積土層のほとんどが壊されている状況であった。この様な状況の中、堆積状況が確認できた部分は、北側の一部のみであった。この部分について調査を行った。遺構の検出はなかったが、第3層内からは弥生時代後期の甕（32）が出土した。

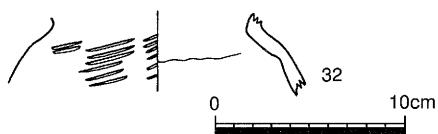
なお、現地表下1.5mまでの調査を行った後、工事掘削最終深度（現地表下約4.4m）までの堆積土層の確認を行った。確認の結果、現地表下1.5m～4.4mまでは砂層（第4層）が堆積していた。層内からの遺物の出土はなかった。



第11図 第2層（28）第3層（29～31）出土遺物実測図



第12図 2区 基本層序図



第13図 第3層（32）出土遺物実測図

第3章 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	出土構構	種類 器種	口径 縦径 器高 底径 高台高	形態・調査	色調	胎土	焼成	備考
1 二	SK-101	弥生土器 長頸壺	13.8	口縁部外面ヨコナデ。頸部外面ヘラミガキ。体部内面上位ナデ、下位ヘラミガキのちナデ。上部に粘土接合痕あり。外面ヘラミガキ。頸部に円形の竹管文6箇施す。体部外面に黒斑あり。	褐色 (10YR4/4)	3mm程度の砂粒含む	良好	
2 二	SK-101	弥生土器 広口壺	16 25.7 6	口縁部および頸部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。指頭圧痕あり。上部に粘土接合痕あり。外面ヘラミガキ。	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	1mmから3mm程度の砂粒含む	良好	
3 二	SK-101	弥生土器 小形壺	16.6 15.5 5.4	口縁部内外面ハケのちヨコナデ。体部外側タキのちハケ、内面ハケ。	褐色 (7.5YR6/6)	1mmから3mm程度の砂粒含む	良好	
4 二	SK-102	弥生土器 壺	4.6	体部内面ナデ。指頭圧痕あり。外面ヘラミガキ。外面下位に円形の竹管文4箇あり。	褐色 (7.5YR6/8)	1mmから3mm程度の砂粒含む	良好	
5 二	SP-102	弥生土器 小形壺	9.2 14.5 4.5	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ハケ、上部に粘土接合痕あり。外面ヘラミガキ。	明褐色 (7.5YR5/8)	1mmから3mm程度の砂粒含む	良好	
6 三	SD-101	弥生土器 長頸壺	10.5 26.0 3.7	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面ヘラミガキ。体部内面ナデ、外側ヘラミガキ。体部外面に縱方向の2条のヘラによる線刻あり。	褐色 (10YR4/4)	1mmから3mm程度の砂粒含む	良好	
7 三	SD-101	弥生土器 長頸壺	18.9 36.2 5.0	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面ヘラミガキ。体部内面ハケ、上部に粘土接合痕あり、外側ヘラミガキ。凸筋を頸部と体部の境に1条施す。体部下半に1箇所穿孔あり。	褐色 (10YR4/4)	1mmから3mm程度の砂粒含む	良好	
8 三	SD-101	弥生土器 長頸壺	9.7 20.1 3.6	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面ヘラミガキ。体部内面ハケ、上部に粘土接合痕あり。外面ヘラミガキ。	灰黄褐色 (10YR4/2)	1mmから3mm程度の砂粒含む	良好	
9 三	SD-101	弥生土器 広口壺	14.2 28.4 4.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、外側ヘラミガキ。体部下半に1箇所穿孔あり。	黄褐色 (10YR5/6)	1mmから3mm程度の砂粒含む	良好	
10	SD-101	弥生土器 壺	5.0	体部内面ハケ、外側ヘラミガキのちハケ。	褐色 (10YR4/4)	1mmから3mm程度の砂粒含む	良好	
11 三	SD-101	弥生土器 小形壺	4.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。指頭圧痕あり。中央部に粘土の接合痕あり。外側ヘラミガキ。	灰黄褐色 (10YR4/2)	1mmから3mm程度の砂粒含む	良好	
12 三	SD-101	弥生土器 楕形高壺	17.8 12.0 13.2	壺部内外面ナデ。脚部内面ナデ、外側ヘラミガキ。裾部内外面ヨコナデ。スカシ孔を4方向に施す。	褐色 (10YR4/4)	1mmから3mm程度の砂粒含む	良好	
13	SD-101	弥生土器 高壺	12.2	脚部内面ナデ、外側ヘラミガキ。裾部内外面ヨコナデ。スカシ孔を下に4方向と上に2方向施す。	褐色 (10YR4/4)	1mmから3mm程度の砂粒含む	良好	
14	SD-101	弥生土器 高壺	12.2	脚部内面ナデ、粘土接合痕あり。外側ヘラミガキ。裾部内外面ヨコナデ。スカシ孔を7方向に施す。	灰黄褐色 (10YR6/2)	1mmから3mm程度の砂粒含む	良好	
15	SD-101	弥生土器 楕形高壺	7.6	壺部内面ナデ、外側ヘラミガキ。脚部内面ナデ、外側ヘラミガキ。裾部内外面ヨコナデ。	褐色 (10YR4/4)	1mmから3mm程度の砂粒含む	良好	
16 四	SD-101	弥生土器 器台	15.7 13.0 11.7	受部内外面ヨコナデ、脚部内面ナデ。粘土接合痕あり。外側ハケ。裾部内外面ハケ。	褐色 (10YR4/4)	1mmから3mm程度の砂粒含む	良好	
17 四	SD-101	弥生土器 器台	13.9 11.5 11.1	受部内外面ヨコナデ。外側ハケ。脚部内面ナデ。粘土接合痕あり。外側ハケ。裾部内外面ヨコナデ。	灰黄褐色 (10YR4/2)	1mmから3mm程度の砂粒含む	良好	

遺物番号 図版番号	出土遺構	種類 器種	口径 極径 器高 高台径 底径 高台高	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
18	SD-101	弥生土器 器台	12.1	胴部内面ナデ。粘土接合痕あり。外面ハケ。裾部内外面ヨコナデ。	褐色 (10YR4/4)	1mmから3mm 程度の砂粒含む	良好	
19 四	SD-101	弥生土器 甕	17.4 28.5 5.0	口縁部内面ハケ。外面ヨコナデ。粘土接合痕あり。体部内面ハケ。外面下部から中央部にかけてタタキを施したのちハケナデによりタタキを消している。	灰黄褐色 (10YR5/2)	1mmから3mm 程度の砂粒含む	良好	
20 四	SD-101	弥生土器 小形甕	14.6 13.8 4.2	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラナデ。粘土接合痕および指頭圧痕あり。外面タタキ。	灰黄褐色 (10YR5/2)	1mmから3mm 程度の砂粒含む	良好	
21 四	SD-101	弥生土器 小形甕	13.5 12.4 4.2	口縁部内面ヨコナデ。外面タタキのちヨコナデ。体部内面ナデ、外面タタキ。	明赤褐色 (5YR5/6)	1mmから3mm 程度の砂粒含む	良好	
22	SD-101	弥生土器 小形甕	4.4	体部内面ハケ。指頭圧痕あり。外面タタキを施したのちナデ。粘土接合痕あり。	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	1mmから3mm 程度の砂粒含む	良好	
23	SD-102	弥生土器 広口壺	12.8	口縁部内外面ヨコナデ。	黄褐色 (10YR5/6)	1mmから3mm 程度の砂粒含む	良好	
24	SD-102	弥生土器 小形長颈壺	11.6	口縁部内外面ヨコナデ。	黄褐色 (10YR5/6)	1mmから3mm 程度の砂粒含む	良好	
25	SD-102	弥生土器 高坏	13.2	脚部ヘラミガキ。裾部内外面ヘラミガキのちナデ。4方向にスカシ孔あり。	褐色 (7.5YR7/6)	1mmから3mm 程度の砂粒含む	良好	
26	SD-102	弥生土器 甕	4.4	体部内面ナデ。ヘラによる押さえあり。外面タタキ。	黑褐色 (10YR3/1)	1mmから3mm 程度の砂粒含む	良好	
27	SD-201	弥生土器 高坏	30.0	口縁部内面ハケのちヨコナデ。外面ヨコナデ。杯部内面ヘラミガキ、外面ナデ。	灰黄褐色 (10YR5/2)	1mmから3mm 程度の砂粒含む	良好	
28	第2層	瓦器 椀	6.6 0.8	体部内面ヘラミガキ、外面ナデ。見込みに格子の暗文を施す。	褐灰色 (10YR6/1)	1mmから3mm 程度の砂粒含む	良好	
29 四	第3層	土師器 小形壺	11.0 10.1	口縁部内外面ハケのちヨコナデ。体部内面ナデ、外面上半ヘラミガキ、下半ナデ。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1mmから3mm 程度の砂粒含む	良好	
30	第3層	土師器 小形鉢	9.8	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	褐色 (5YR6/6)	1mm程度の砂粒含む	良好	
31	第3層	弥生土器 小形甕	12.8	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、外面タタキを施す。タタキは口縁にも施されている。	灰黄褐色 (10YR5/2)	1mmから3mm 程度の砂粒含む	良好	
32	第3層	弥生土器 甕		体部内面ナデ。外面タタキ。	褐色 (7.5YR4/6)	1mmから3mm 程度の砂粒含む	良好	

第4章 まとめ

今回の発掘調査は、公共下水道工事の立坑部分2ヵ所を実施し、その結果、弥生時代後期前半～古墳時代前期初頭の遺構・遺物を検出することができた。以下、各調査ごとに記す。

1区

当調査研究会第11次調査（第1図③）や第17次調査（第1図⑥）では、弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけての遺構の検出や遺物の出土があることから、今回の調査地から南側に同時期の集落が存在していることが明らかになった。（第1図および第1表参照）

調査面積が狭く、検出した遺構の全容は不明である。しかし、SK-101やSD-101・SD-102の遺構の配置や遺物の出土状況から推測すれば、おそらく上記の検出遺構は方形周溝墓の可能性が考えられる。仮に方形周溝墓であるとするならば、SD-101・SD-102は周溝と推測され、SD-101の底の部分からは、体部を打ち欠いた壺が埋められている状況が見られることから、周溝内に供献した土器であると推定できる。また、SK-101内からの出土遺物は、おそらく何らかの埋葬の施設に埋められた土器と推定できる。

マウンドとされる盛土の存在は古墳時代前期以降に削り取られ、基本層序の第4層が盛土と推定できるのみである。本来の埋葬施設はマウンド内に存在していたと推定できるが、上記の通り後世に削り取られていることから検出することはできなかった。

なおSK-101やSD-101内からの出土遺物の時期は、弥生時代後期の河内V-1様式_{註1}のものと推定される。

また第5層上面でも弥生時代後期前半の遺構（SK-201）を検出している。遺物は河内V-0様式_{註1}のものと推定される。

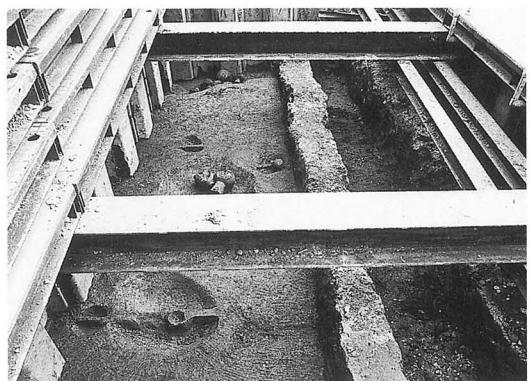
2区

この調査区では、遺構の検出はなかったが、第3層内から弥生時代後期の甕の破片が出土していることから、1区で検出した集落が北へ広がっている可能性も考えられる。

註

註1 寺沢薰・森岡秀人編著『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』 木耳社

図 版



1区 全景（北から）



1区 SK-101遺物出土状況（南から）



1区 SD-101遺物出土状況（南から）



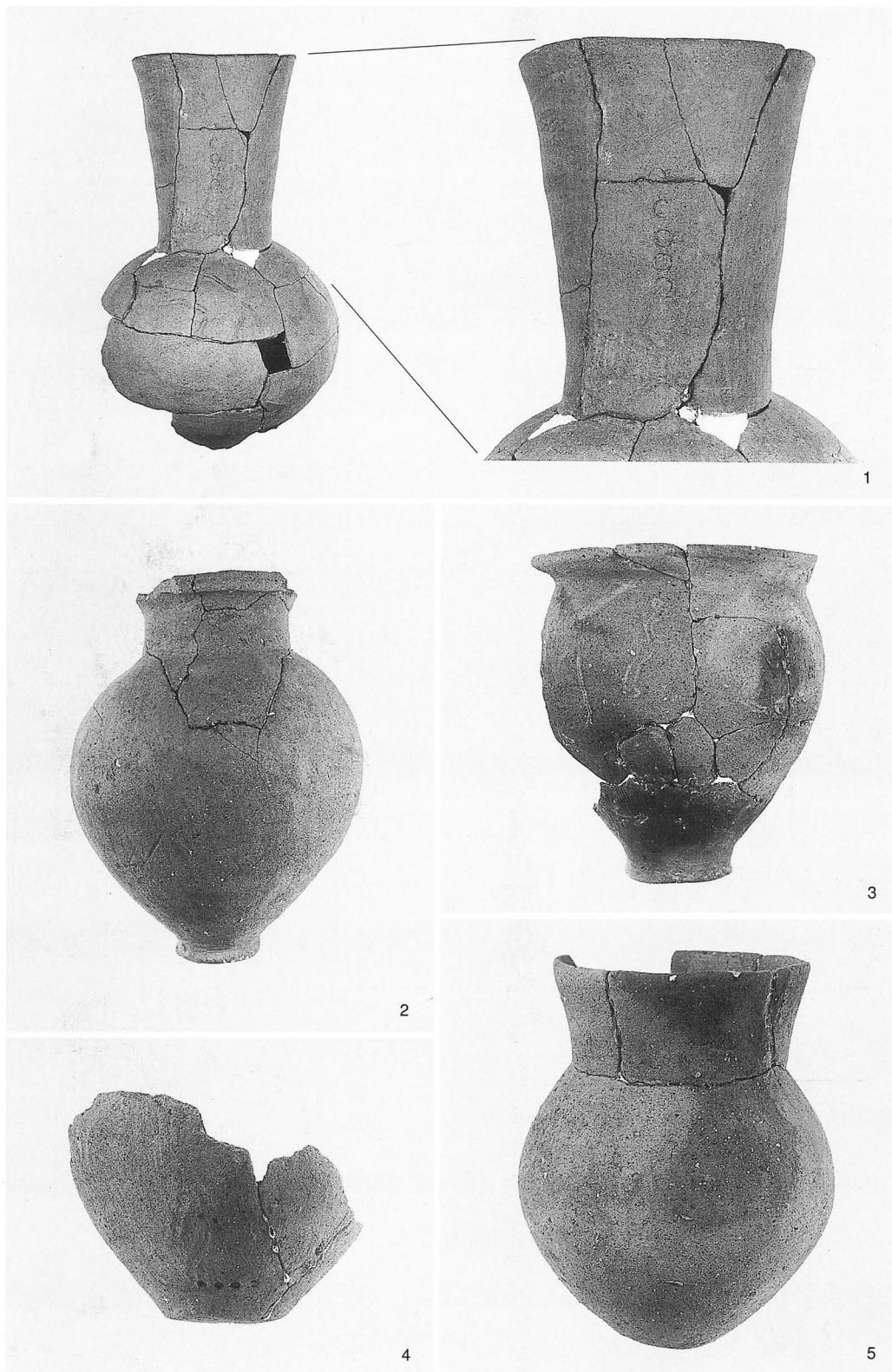
1区 下層掘削状況（西から）



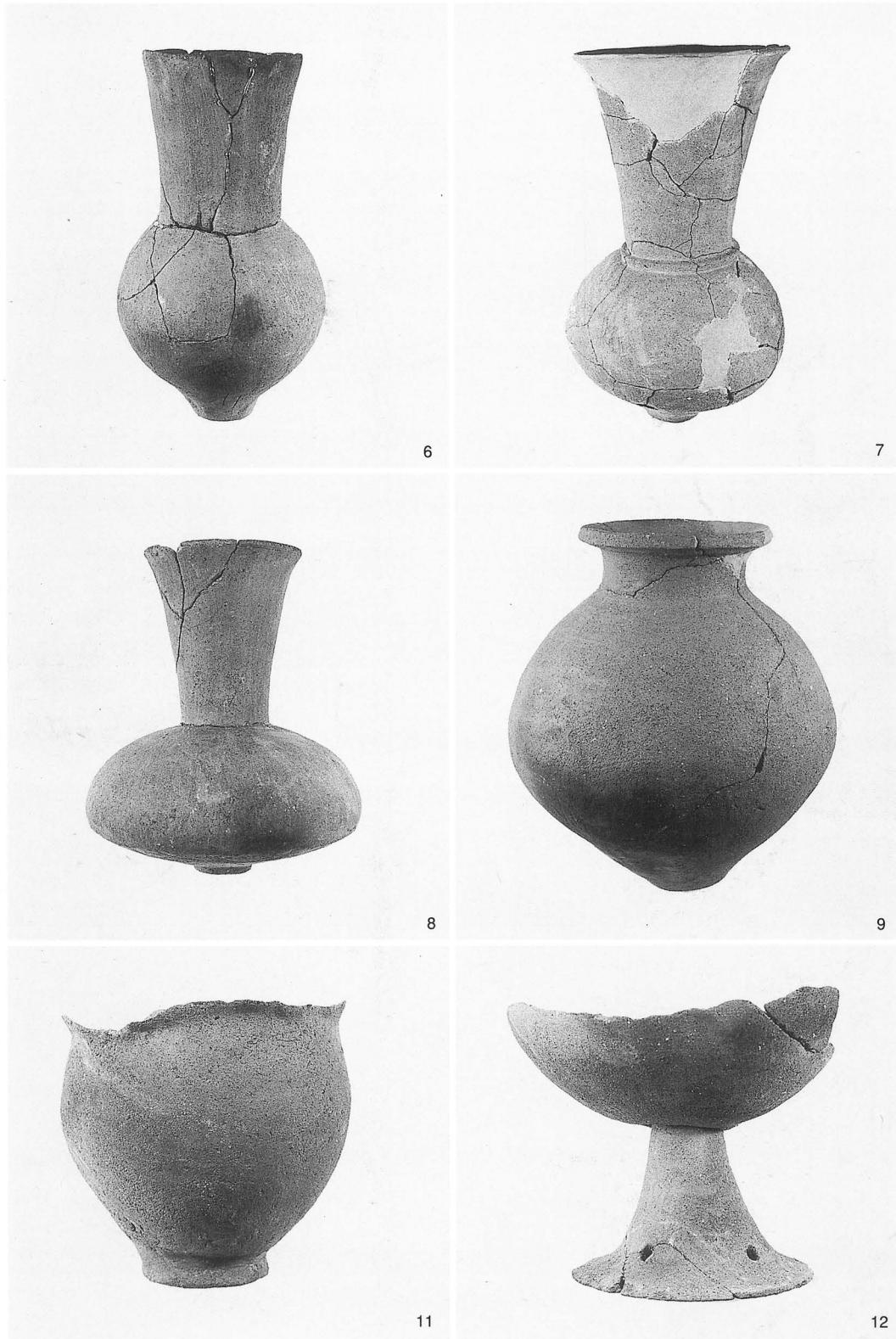
2区 掘削状況（南から）



2区 北壁面（南から）



SK-101 (1~3) SK-102 (4) SP-102 (5) 出土遺物



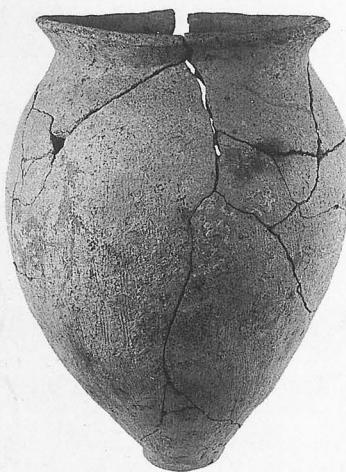
SD-101 (6~9・11・12) 出土遺物



16



17



19



20



21



29

SD-101 (16・17・19~21) 第3層 (29) 出土遺物

II 中田遺跡第14・25次調査 (NT92-14・NT94-25)

例　　言

1. 本書は、中田遺跡内で実施した公共下水道工事に伴う第14次（NT92-14）および第25次（NT94-25）発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する発掘調査の業務は、下記の八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
 - ・第14次調査（NT92-14）→八教社文第埋156号 平成5年1月20日
 - ・第25次調査（NT94-25）→八教社文第埋92号 平成5年11月5日
1. 現地調査期間および面積は下記に示す通りである。
 - ・第14次調査（NT92-14）→平成5年1月30日～3月4日 約170m²
 - ・第25次調査（NT94-25）→平成6年5月30日～6月22日 約90m²
1. 調査は、岡田清一を担当者として実施した。現地調査において第14次調査では瀬尾泰大・千賀幸二・能勢尚樹、第25次調査では辻野優子・吉田由美恵の協力を得た。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－市森千恵子・内山千栄子・沢村妙子・辻野・富永勝也・西岡千恵子、遺物トレース－北原清子、写真・本文の執筆・編集－岡田が担当した。
1. 第25次調査出土の石材については、八尾市立曙川小学校教諭 奥田 尚氏にお願いして鑑定並びに御教示を賜った。

目 次

第1章 位置と環境	13
第2章 調査の概要	18
第3章 第14次調査の成果	19
第1節 基本層序	19
第2節 検出遺構と出土遺物	20
第3節 出土遺物観察表	47
第4節 小結	55
第4章 第25次調査の成果	56
第1節 基本層序	56
第2節 検出遺構と出土遺物	57
第3節 出土遺物観察表	75
第4節 小結	81
第5章 まとめ	82

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図	13
第2図 調査地地区割り図	18
◆第14次調査	
第3図 基本層序模式図	19
第4図 NR-101出土遺物実測図	20
第5図 検出遺構平面図	21-22
第6図 SE-201平・断面図	24
第7図 SE-201井戸側横板および井戸側付設部材実測図	25
第8図 SE-201丸太刳抜き井戸側実測図	26
第9図 SE-201出土遺物実測図Ⅰ	27
第10図 SE-201出土遺物実測図Ⅱ	28
第11図 SE-202平・断面図	30
第12図 SE-202出土遺物実測図Ⅰ	31
第13図 SE-202出土遺物実測図Ⅱ	32

第14図 SE－202出土遺物実測図Ⅲ	33
第15図 SE－202出土遺物実測図Ⅳ	33
第16図 SK－201平・断面図	34
第17図 SK－201出土遺物実測図	35
第18図 SK－201出土「布巻具」実測図	36
第19図 SK－203～SK－205出土遺物実測図	37
第20図 SP－207・SP－210・SP－220出土遺物実測図	38
第21図 SD－201出土遺物実測図	38
第22図 SO－201出土遺物実測図	39
第23図 SW－301平面図	40
第24図 SW－301出土遺物実測図	41
第25図 第3層出土遺物実測図	42
第26図 第4層出土遺物実測図	43
第27図 第5層出土遺物実測図Ⅰ	44
第28図 第5層出土遺物実測図Ⅱ	45
◆第14次調査	
第29図 基本層序模式図	56
第30図 SE－001出土遺物実測図	57
第31図 第1遺構検出地点および遺構平・断面図	58
第32図 SD－201出土遺物実測図	58
第33図 第2遺構検出地点および遺構平・断面図	59
第34図 SP－201出土遺物実測図	59
第35図 第3遺構検出地点および遺構平・断面図Ⅰ	60
第36図 第3遺構検出地点および遺構平・断面図Ⅱ	61
第37図 SO－301出土遺物実測図Ⅰ	62
第38図 SO－301出土遺物実測図Ⅱ	63
第39図 SO－301出土遺物実測図Ⅲ	64
第40図 SO－301出土遺物実測図Ⅳ	65
第41図 SO－301出土遺物実測図Ⅴ	66
第42図 SO－301出土遺物実測図Ⅵ	67

第43図 SO-301出土遺物実測図Ⅶ	68
第44図 SO-301出土遺物実測図Ⅷ	69
第45図 第4層出土遺物実測図Ⅰ	72
第46図 第4層出土遺物実測図Ⅱ	73

表 目 次

第1表—I 周辺における既往の調査一覧表「中田遺跡」	14
第1表—II 周辺における既往の調査一覧表「中田遺跡」	15
第2表 周辺における既往の調査一覧表「東弓削遺跡」	15
◆第14次調査	
第3表 第1遺構面 溝 (S D) 法量一覧表	23
第4表 第2遺構面 小穴 (S P) 法量一覧表	37
第5表 第3遺構面 小穴 (S P) 法量一覧表	40
◆第25次調査	
第6表 第3遺構面 小穴 (S P) 法量一覧表	60

写 真 目 次

写真1 第10次調査出土「陶質土器」	16
写真2 第19次調査出土「形象埴輪」(左) および周溝内出土状況(右)	16
写真3 第24次調査 平安時代末—掘立柱建物(左) および曲物井戸(右)	17
◆第14次調査	
写真4 調査地近景(南西から)	46
◆第25次調査	
写真5 調査地近景(北から)	74

図版目次

◆第14次調査

- 図版一 第1遺構面 N R - 101 (北から)、I区 (北から)、L区 (西から)、M区 (東から)、S D - 116 (南から)、N区 (北から)
第2遺構面 E区 (南から)、F区 (北から)
- 図版二 第2遺構面 H区北部 (北から)、I区 (南から)、K区 (南から)、M区・N区 (北から)、N区 (南から)、O区 (西から)、
第3遺構面 I区 (北から)、J区 (北から)
- 図版三 S E - 201井戸側上部 (北東から)、S E - 201井戸側下部 (北東から)
- 図版四 S E - 201井戸側内遺物出土状況 (東から)、S E - 202上層I (東から)
- 図版五 S E - 202上層II (東から)、S E - 202下層 (東から)
- 図版六 S K - 201 (東から)、H区～J区東壁面 (北西から)

◆第25次調査

- 図版七 第1遺構面 水田畦畔 (北から)、第2遺構面 (北から)、S D - 201 (南から)、S D - 202 (南から)、第3遺構面 小穴・土坑 (北から)、S O - 301 (北から)、S O - 301西壁面 (南東から)
- 図版八 S O - 301<北部・南部>遺物出土状況 (西から)
- 図版九 S E - 001井戸側<上部・下部>検出状況 (東から)、S P - 302および遺物出土状況 (南東から)、S P - 302掘方断面 (東から)、S O - 301遺物検出状況 (北から)

[出土遺物]

◆第14次調査

- 図版一〇 S E - 201出土遺物
- 図版一一 S E - 201、S E - 202出土遺物
- 図版一二 S E - 202出土遺物
- 図版一三 S E - 202出土遺物
- 図版一四 S E - 202、S K - 201出土遺物
- 図版一五 S K - 201、S K - 204、S W - 301出土遺物
- 図版一六 S W - 301、第3層、第4層出土遺物
- 図版一七 第4層、第5層出土遺物
- 図版一八 S E - 202、第3層、第5層出土遺物

図版一九 S E - 201、S K - 201出土遺物

◆第25次調査

図版二〇 S E - 001、S D - 201、S O - 301出土遺物

図版二一 S O - 301出土遺物

図版二二～図版二七 S O - 301出土遺物

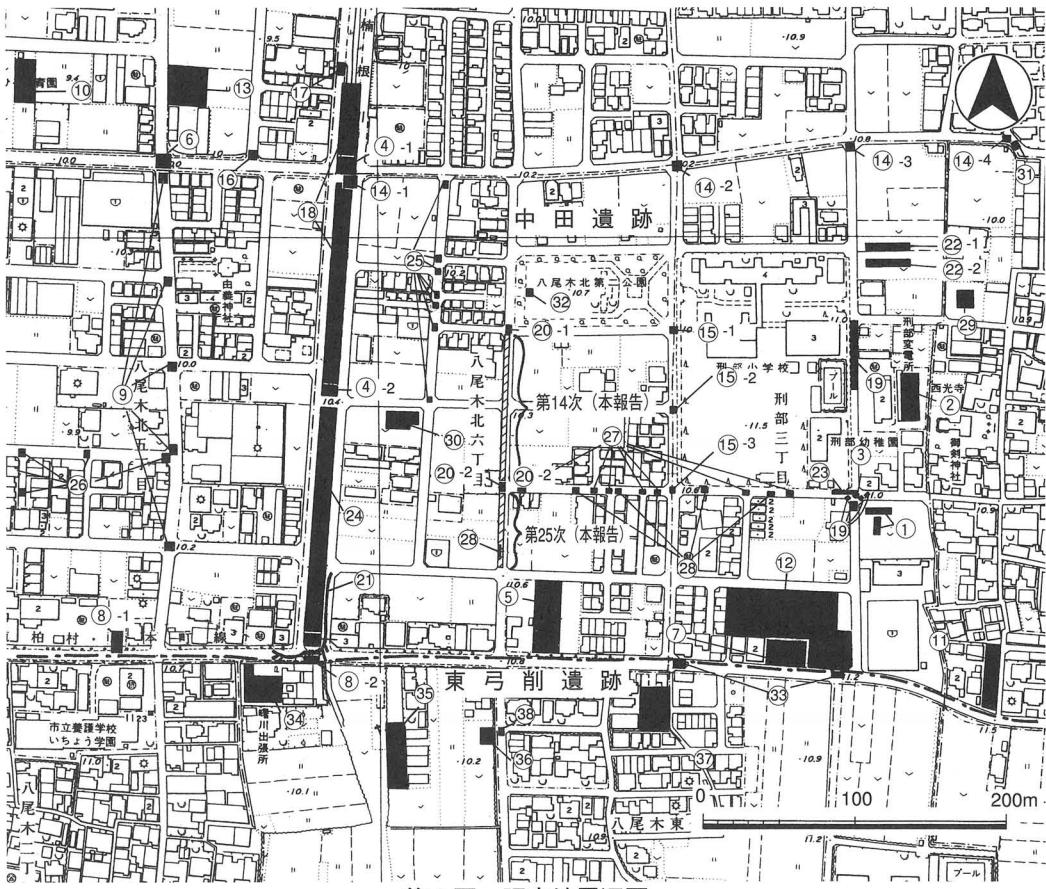
図版二八・二九 S O - 301、第4層出土遺物

図版三〇 第4層出土遺物

第1章 位置と環境

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁目付近に拡がる複合遺跡である。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地に位置する。当遺跡周辺には西に矢作遺跡、北に小阪合遺跡、南に東弓削遺跡が隣接する。当遺跡は、1970(昭和45)年以降の八尾都市計画曙川北土地区画整理事業に伴う調査に端を発し、現在までに当調査研究会が32件の調査を実施しているほかに、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・中田遺跡調査会(昭和47～48年)・中田遺跡調査センター(昭和49年)により数次にわたって発掘調査が実施されている。それらの調査の結果、当遺跡は弥生時代前期から中世に至る複合遺跡であることが判明している。

今までの調査から当遺跡内を時代別に概観すると、弥生時代前期では北東部で河川〔八尾市教育委員会1975〕、南西部(⑥)・西部(⑨-1)で土坑が検出されているが遺跡内全体か



第1図 調査地周辺図

第1表一 周辺における既往の調査一覧表「中田遺跡」(平成8年3月31日現在)

地点	調査機関	調査地	面積(m ²)	調査原因	調査期間	主な検出遺構	文献
①	市教委	刑部3 (D地点)	160	遺跡範囲確認	740726~740903	古墳時代前期-塚	中田遺跡調査報告II 1975.3
②	市教委	刑部3	112	変電所建設	7609~7610	鎌倉時代-曲物井戸	八尾市文化財調査報告4 1979.3
③	市教委	刑部3	75	電気管路埋設	7804	弥生時代後期-古墳時代前期初頭-溝	八尾市文化財調査報告7 1981.3
④	府教委	中田1・八尾木北5	181	公共下水道	85年度	・4-2→弥生時代中期-古墳時代前期-自然流路 ・4-3→弥生時代中期後半-土坑、古墳時代前期初頭-水溜め場?	中田遺跡発掘調査概要 1986.3
⑤	市教委(86-532)	八尾木北6	68	共同住宅	870819~0905	古墳時代前期(庄内式新-布留式古)-溝	八尾市文化財調査報告17 1988.3
⑥	市教委	八尾木北5他		公共下水道	871214~880311	弥生時代前期-土坑	八尾市文化財調査報告18 1988.3
⑦	市教委(89-331)	刑部3	4	事務所・住宅	890921	古墳時代-遺物包含層	八尾市文化財調査報告20(※国庫補助事業)1990.3
⑧	研究会(NT89-03)	八尾木北4~5	132	公共下水道	891202~900331	・8-1→弥生時代中期後半-土坑、古墳時代前期初頭(庄内式)-土坑 ・8-2→古墳時代前期初頭(庄内式)-土坑・ピット	八尾市文化財調査研究会事業報告35 1992.10
⑨	研究会(NT89-04)	八尾木北5	95	公共下水道	891212~900118	・9-1→弥生時代前期中段階-土坑 ・9-4→平安時代後期-土坑	同上
⑩	市教委(89-484)	八尾木北2	8	倉庫・事務所	900112	弥生時代後期前半-河川	八尾市文化財調査報告20(※国庫補助事業)1990.3
⑪	市教委(90-260)	刑部4	12	社屋・住宅	900921	奈良時代末~平安時代初頭-遺物包含層	八尾市文化財調査報告22 1991.3
⑫	市教委(90-330)	刑部3	11.25	倉庫	901023	古墳時代~奈良時代-遺物包含層	同上
⑬	市教委(90-412)	八尾木北2	9	共同住宅	901211	鎌倉時代-土坑	同上
⑭	研究会(NT90-06)	八尾木北3・刑部2	180	公共下水道	910108~0216	・14-1→近世-近代-溝、古墳時代前期初頭-遺物包含層 ・14-2→近世-井戸 ・14-3→奈良時代-溝 ・14-4→古墳時代前期(布留式古)、奈良時代-小穴	八尾市文化財調査研究会報告49 1995.11
⑮	市教委(91-141)	八尾木北6	12	公共下水道	910909~1116	・15-1→古墳時代-遺物包含層 ・15-2→古墳時代後期、奈良時代-平安時代-遺物包含層	八尾市文化財調査報告26 1992.3
⑯	市教委(91-353)	八尾木北2	8	公共下水道	911210	鎌倉-室町時代-溝	八尾市文化財調査報告28 1993.3
⑰	市教委(91-354)	八尾木北2		公共下水道	911213	古墳時代後期-ピット	同上
⑱	研究会(NT92-10)	八尾木北3	450	河川改修	921026~930122	・古墳時代前期初頭(庄内式古)-溝 ・古墳時代前期(布留式古)-土坑、溝、小穴 ・古墳時代中期-後期-土坑、溝、小穴 ・室町時代-溝、河川 ・近世-井戸	平成4年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告 1993.3
⑲	研究会(NT92-11)	刑部3	81	公共下水道	921106~930322	17-1→中世以降-土坑	八尾市文化財調査研究会報告39 1993.12
⑳	市教委(92-314)	八尾木北6	8	公共下水道	921215~1216	・20-1→中世-遺物包含層 ・20-2→古墳時代前期、中期-遺物包含層	八尾市文化財調査報告28 1993.3
㉑	研究会(NT92-13)	八尾木北5	123	電気管路埋設	930128~0303	中世以降-土坑	八尾市文化財調査研究会報告39 1993.12
㉒	研究会(NT93-17)	刑部4	150	共同住宅	930728~930811	・22-1→弥生時代後期-土器集積、古墳時代前期(布留式新)~後期-溝、古墳時代後期-奈良時代-小穴 ・22-2→古墳時代前期(布留式古)-土坑	八尾市文化財調査研究会報告43 1994.10
㉓	研究会(NT93-18)	刑部3	10	電気管路埋設	931004~931009	古墳時代前期-遺物包含層	八尾市文化財調査研究会報告43 1994.10

第1表一Ⅱ 周辺における既往の調査一覧表「中田遺跡」（平成8年3月31日現在）

地点	調査機関	調査地	面積(m ²)	調査原因	調査期間	主な検出遺構	文献
㉔	研究会(NT93-19)	八尾木北6	390	河川改修	931012～1201	・古墳時代前期-土坑、溝・古墳時代前期後半-古墳	平成5年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告1994.5
㉕	研究会(NT93-20)	八尾木北6	28	公共下水道	931012～1015	・古墳時代後期-土坑 ・中世-溝、水田	八尾市文化財調査研究会報告43 1994.10
㉖	市教委(NT93-289)	八尾木北5		公共下水道	931013～1122	古墳時代前期初頭-不明遺構	同上
㉗	研究会(NT93-21)	刑部3	28	公共下水道	931020～1022	中世-柱穴、水田面、河川	同上
㉘	研究会(NT93-22)	刑部3・八尾木北6	22.5	電気管路埋設	940118～0214	遺構・遺物ナシ	同上
㉙	研究会(NT94-24)	刑部4	184	共同住宅	940413～0426	平安時代末-掘立柱建物、井戸、土坑、溝、小穴	八尾市文化財調査研究会報告49 1995.11
㉚	研究会(NT94-27)	八尾木北6	160	共同住宅	941107～1122	古墳時代前期-布留式古)-土坑、溝、ピット	平成6年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告 1995.5
㉛	研究会(NT94-28)	刑部2	20.96	公共下水道	941118～1205	鎌倉時代-小穴、溝	同上
㉜	研究会(NT95-32)	八尾木北6	32.5	防火水槽	951218～1221	・弥生時代後期-河川 ・古墳時代前期-遺物包含層 ・鎌倉時代-水田、溝	平成7年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告 1996.5

第2表 周辺における既往の調査一覧表「東弓削遺跡」（平成8年3月31日現在）

地点	調査機関	調査地	面積(m ²)	調査原因	調査期間	主な検出遺構	文献
㉞	市教委	八尾木北5・6		送水管敷設	751208～760331	弥生時代中期、古墳時代（前期・中期）-遺物包含層	八尾市文化財調査報告3 1976.4
㉟	研究会	八尾木北4	220	施設建設	840202～0219	弥生時代（中期・後期）、古墳時代（前期-遺物包含層	八尾市文化財調査研究会報告5 1984.4
㉞	市教委	八尾木4	184	共同住宅	850924～0930	・弥生時代中期-埴棺 ・古墳時代前期-遺物包含層	八尾市文化財調査報告15 1987.3
㉞	研究会(HY89-4)	八尾木東1	72	公共下水道	890106～890123	・弥生時代中期-土坑 ・古墳時代前期初頭（庄内式古）-溝	八尾市文化財調査研究会報告37 1993.3
㉞	研究会(HY90-5)	八尾木東1	50	共同住宅	901119～1206	・古墳時代前期-土坑、溝 ・古墳時代中期-土坑	八尾市文化財調査研究会報告32 1991.12
㉞	市教委(91-373)	八尾東1	8	公共下水道	920304～0319	古墳時代前期-土坑状遺構	八尾市文化財調査報告28 1993.3

らみると当該期については遺構・遺物とも希薄であり、未知なるところが多い。中期では南西部（④-3）・（⑧-1）で土坑、後期では北西部（⑩）で河川、東部（㉙-1）で土器集積、中央部（㉜）で河川が検出されており、遺跡の南半部に目立つ。

古墳時代にはいって、特に前期では一大画期を迎えることとなる。昭和47～49年にかけて実施された区画整理事業に伴う調査によって掘立柱建物・土壙・井戸・溝といった集落の存在を明示する遺構・遺物が数多く検出された（㉞・㉞）。以後、今までの調査で当該期の遺構および遺物の検出割合が、当遺跡内では他の時代に比べてはるかに上回る数値を占めることがわかっている。遺物には吉備・山陰・東海をはじめとする他地域からの搬入品が混在する。これらの土器は、該期の生活様相を知ることはもちろんのこと、他地域との交流を突明する上で重要な資料と言える。集落の在り方について現在までの「線的」あるいは「点的」な小規模な調査結果も含めて面的に繋いでいくと、かなりの広範囲に形成されているのがわかる。それは周辺の調査結果から北部の小阪合遺跡、南部の東弓削遺跡に有機的につながる可能性も考えられることから、大集落にみられる集中型の拠点的性格よりはむしろ分村的な形成をみせる集落



写真1 第10次調査出土「陶質土器」

であったと解釈したい。ここで当調査地周辺に限ってみると、南西約100m地点の楠根川改修工事に伴う調査（⑯）において、古墳時代前期（布留式古相）の土坑から極めて類例の少ない陶質土器が出土した。この陶質土器については、在地産である事が判明しているが、いわゆる古式土師器から須恵器出現における土器組成の在り方を究明する上において貴重な発見といえよう。さらにその南方の同河川改修工事に伴う調査（㉔）では、古墳時代前期後半に比定される古墳および多数の埴輪（家形・船形・朝顔形・円筒）が検出された。古墳が検出されたのは、当遺跡内においては初めてである。また、船形埴輪については、全国の出土例では最も小型のものであることがわかっている。中期では北部において前述の区画整理事業に伴う調査で集落遺構が検出されており、位置的には北に隣接する小阪合遺跡を中心とする村落に含まれるものと思われる。後期については遺跡内中央部の下水道工事に伴う調査〔八尾市教育委員会1990〕で土坑1基を検出しているが、遺跡全体からみると当該期の遺構・遺物は希薄である。



写真2 第19次調査出土「形象埴輪」（左）および周溝内出土状況（右）

奈良時代についても古墳時代後期同様に顯著な遺構は検出されないが、北西部の区画整理事業に伴う一連の調査〔中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター〕で当該期の整地面とみられるところから銅錢「和同開珎」が出土し、付近に居住域が存在していたことを明示する。

平安時代から鎌倉時代にかけては主に遺跡北部においてみられ、⑨の地点では溝・土坑・掘立柱建物・井戸といった集落に伴う遺構が検出されている。また、②では井戸側（枠）として曲物を使用したものや、他の地点においても曲物以外に土釜・羽釜をはじめ多彩な種類のものが見つかっている。さらに北西部の区画整理事業に伴う調査【中田遺跡調査会】で検出された平安時代後期に比定される井戸内からは、青磁・白磁・黒色土器・瓦器・墨書き土器等が出土し、これらは当該期における人々の生活様相を知るうえで貴重な資料と言える。

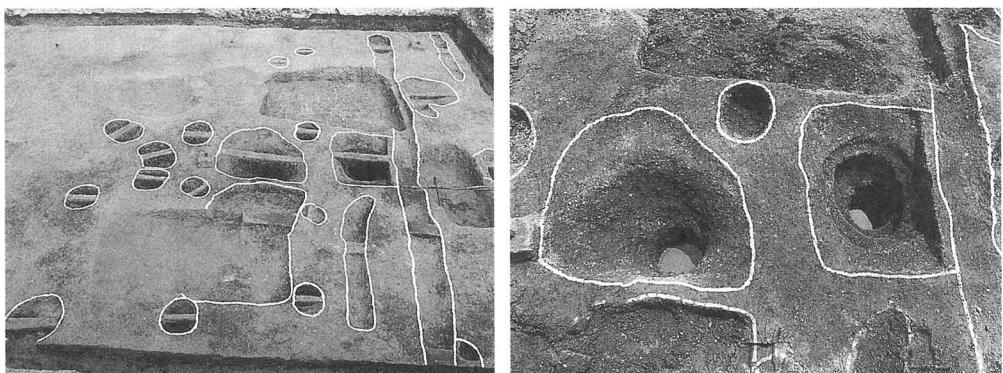


写真3 第24次調査 平安時代末一掘立柱建物（左）および曲物井戸（右）

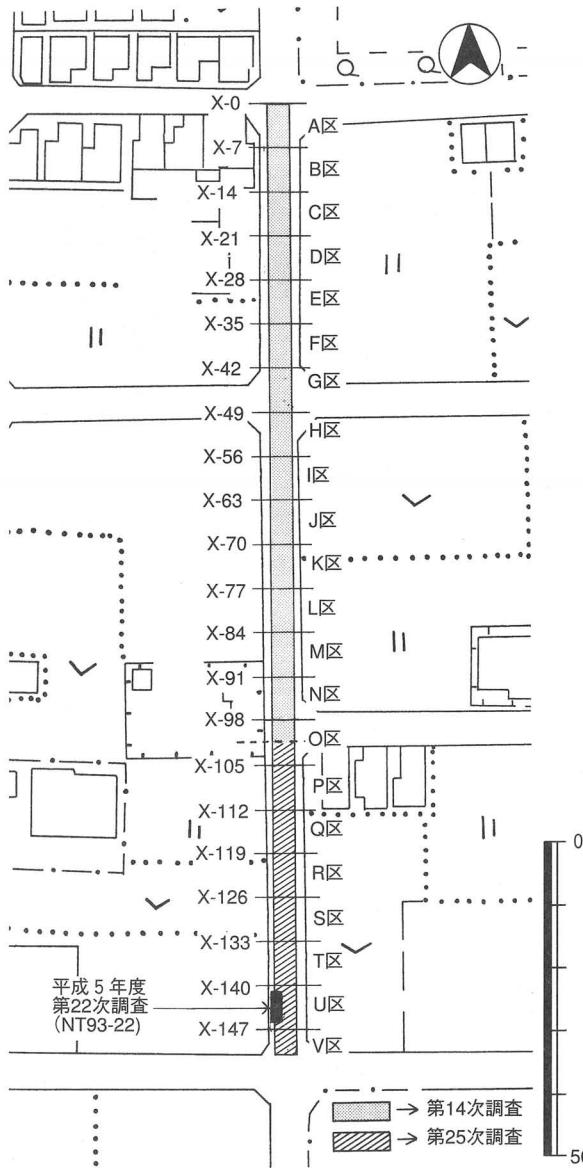
昭和46年に大阪府教育委員会によって実施された安中-教興寺道路工事に伴う調査【大阪府教育委員会】では、鎌倉・室町期に比定される瓦・什器等の出土と当地に字名として残る「地蔵堂」・「薬師堂」・「善坊寺」等の寺院が存在したことと有機的に関連づけて報告されている。また、今回の調査も含めて、当遺跡の中央部には現代の耕作地の下層にも鎌倉時代以降の農耕に伴う畝溝が確認されることから、中世以降現代まで生産域として踏襲されてきたことが窺われる。

引用・参考文献

- ・大阪府教育委員会 「中田遺跡発掘調査概要」昭和46年2月～昭和46年3月
- ・中田遺跡調査会 「中田遺跡<北区>発掘調査概要」昭和47年10月～昭和48年3月
- ・中田遺跡調査センター 「中田遺跡調査報告I 日本電信電話公社大阪東地区管理部地下線埋設工事に伴う調査
中田遺跡」1974.5
- ・八尾市教育委員会 「中田遺跡調査報告II 昭和49年度国庫補助事業 中田遺跡範囲確認調査 中田遺跡」1975.3
- ・八尾市教育委員会 「八尾市文化財調査報告21 平成元年度公共事業 八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書II
(中田遺跡 01-221)」1990.3

※ () 内の○数次については、第1表-I、IIを参照されたい。

第2章 調査の概要



第2図 調査地地区割り図

mまでの盛土および現代の耕土を含む土層を機械により除去した後、以下の1.2m前後の土層については人力による掘削・精査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。また、調査終了後は各地区ごとに任意のグリッドを1箇所設定し、下層確認調査を実施した。

今回の発掘調査は、八尾市教育委員会が八尾市下水道部から八尾木北6丁目地内における下水道工事の通達を受け、工事箇所内での遺構確認調査の結果、古墳時代前期の遺物包含層が確認された事に起因するものである。調査にあたっては、八尾市・八尾市教育委員会・当調査研究会との三者で協定書を締結した後、当調査研究会が八尾市から委託を受けて実施することとなった。

本調査は、当調査研究会が当遺跡内で実施した第14次・第25次調査にあたる。調査規模は調査区北部に当たる第14次が南北長約100m・東西幅約1.7m、調査区南部に当たる第25次が南北長約53m・東西幅約1.7mで総面積約260m²を測る。調査地区割りについては第14次調査区の北端部に任意の基準点を設定し、第25次調査も含め北から7mごと（※鋼矢板補強のH鋼の位置関係による）にアルファベットでA区～V区とした。掘削に際しては両調査区とも工事掘削深度まで、遺構確認調査結果に基づき現地表（標高1.04m前後）下1.0～1.2

第3章 第14次調査の成果

第1節 基本層序

基本層序は、調査区内で普遍的にみられる9層の土層を摘出して表した。なお、模式図に示すところの第7～9層については下層調査で確認した土層である。

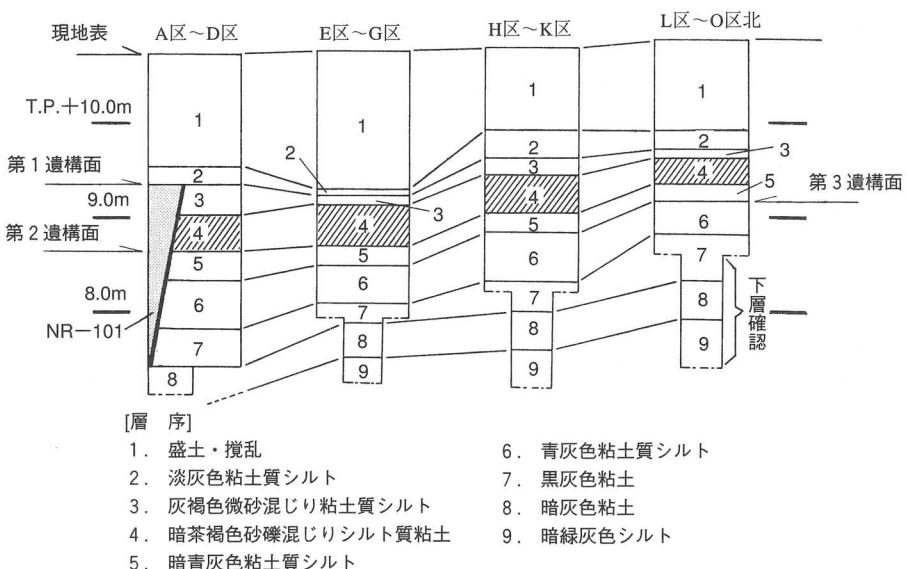
第1層：現耕土及び鋼矢板打設時の搅乱層。層厚0.8～1.4m（現地表の標高10.4m前後）。

第2層：淡灰色粘土質シルト。層厚0.1～0.3m。中世の遺物を若干含む堆積層であるが、調査区北部にあたるA、G区については全体的に希薄である。

第3層：灰褐色微砂混じり粘土質シルト。層厚0.1～0.3m。古墳時代中期に比定される遺物が含まれる。この層の上面（標高9.0～9.6m）が第1遺構面になり、調査区の南部にあたるI・L・M区で鎌倉時代後期～室町時代前期に比定される耕作面を検出した。

第4層：暗茶褐色砂礫混じりシルト質粘土。層厚0.2～0.5m。古墳時代前期（布留式期古相）に比定される遺物を密に含む。なかでも調査区南部にあたるK～O区は他の地区に比べて層厚が厚く、遺物包蔵量が多い。

第5層：暗青灰色粘土質シルト。層厚0.1～0.3m。古墳時代初頭（庄内式期古相）に比定される遺物を含む。この層の上面（標高8.4～9.2m）が第2遺構面になり、調査区のほぼ全域で遺構を検出した。



第3図 基本層序模式図

第6層：青灰色粘土質シルト。層厚0.4～0.5m。弥生時代後期末～古墳時代初頭（庄内式期）に比定される遺物を僅かに含む。この層の上面（標高8.3～9.2m）が第3遺構面になり、調査区のほぼ中央にあたるI・J区で遺構を検出した。

※以下、下層確認堆積層

第7層：黒灰色粘土。層厚0.4m前後。植物遺体を若干含む。

第8層：暗灰色粘土。層厚0.3m～0.4m。

第9層：暗緑灰色シルト。層厚0.5m以上。

第2節 検出遺構と出土遺物

調査の結果、弥生時代後期末から中世に至る遺構・遺物を検出した。とくに古墳時代初頭～前期（庄内式期～布留式期）に比定される集落の一部が全調査区を通じて検出することができた。遺物の総出土量はコンテナ箱（60×40×20cm）にして約22箱分を数え、その約8割は庄内式期～布留式期の土器（註1）によって占められる。以下各遺構面について記す。

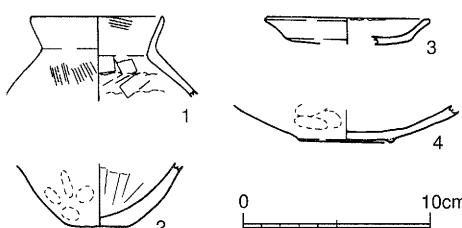
<第1遺構面>

第1遺構面では鎌倉時代後期～室町時代前期に比定される河川1条（N R-101）・溝21条（S D-101～121）を検出した。

河川（N R）

N R-101

A～B区にかけて検出した。B区北部で河川の南岸部分を確認したが、北岸部分は調査区外に至っている。規模は検出部分で幅8.5m以上・深さ1.5mを測る。内部堆積土は上から第1層灰色細砂・第2層青灰色シルトと粘土の互層・第3層灰褐色粗砂の3層に分層できる。



第4図 N R-101出土遺物実測図

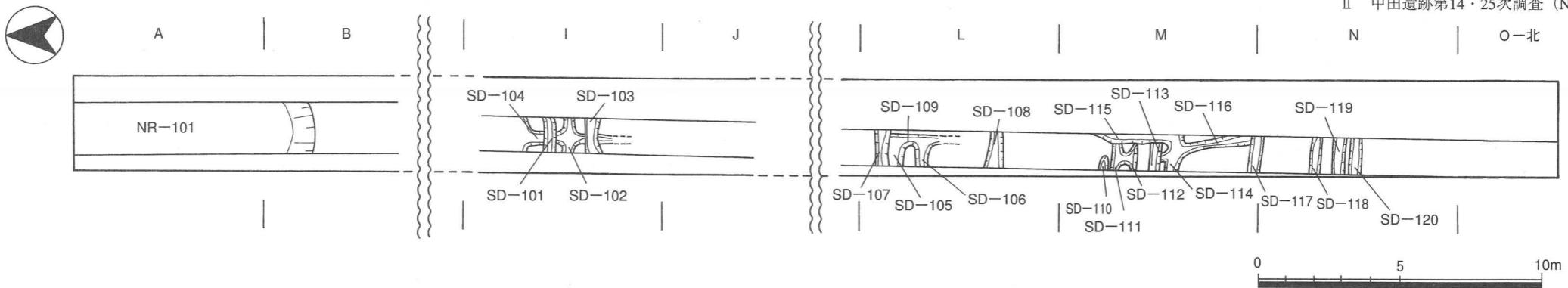
遺物は第1層灰色細砂から、土師器・瓦器の小破片が少量出土した。そのうち図化できたものは流れ込みによるとみられる古墳時代後期頃の甕（1・2）・室町時代前期頃に比定される瓦器小皿（3）・瓦器椀（4）である。瓦器椀については、粘土紐からなる簡素化傾向の高台からみて尾上編年IV-1期（註2）に比定されよう。

溝（S D）

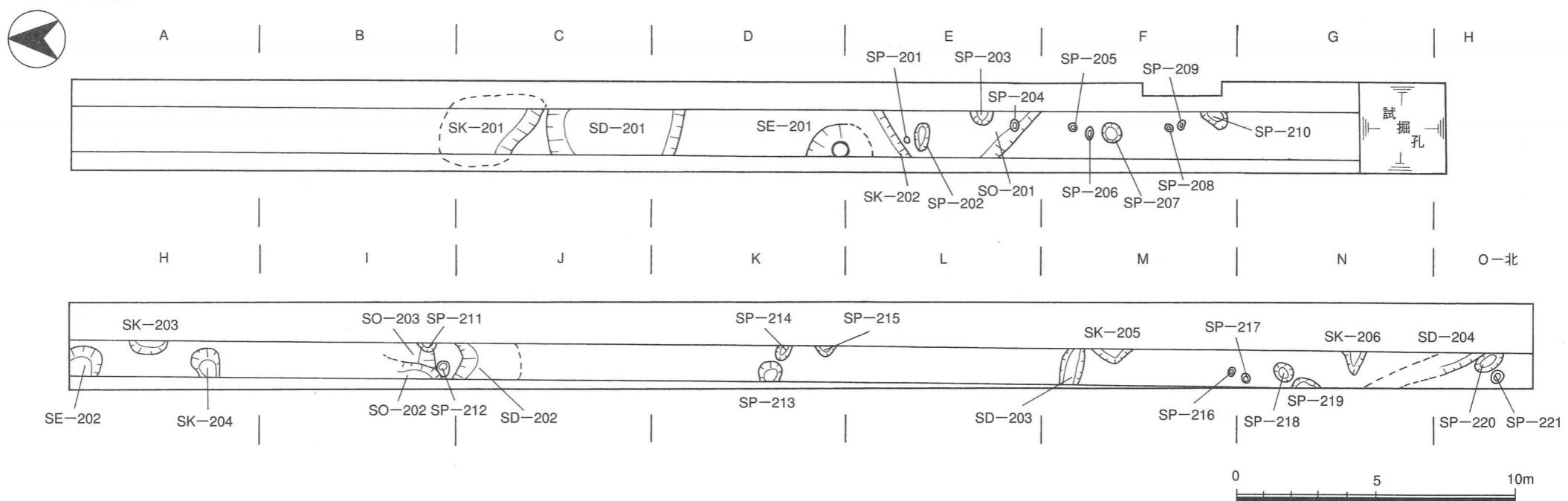
S D-101～120

検出状況からみて農耕作に伴う鋤溝と考えられるもので、調査区南部のI・L・M・N区で検出した。他の地区では近世の開墾及び現代の搅乱等によって削平を受けたものか、その痕跡

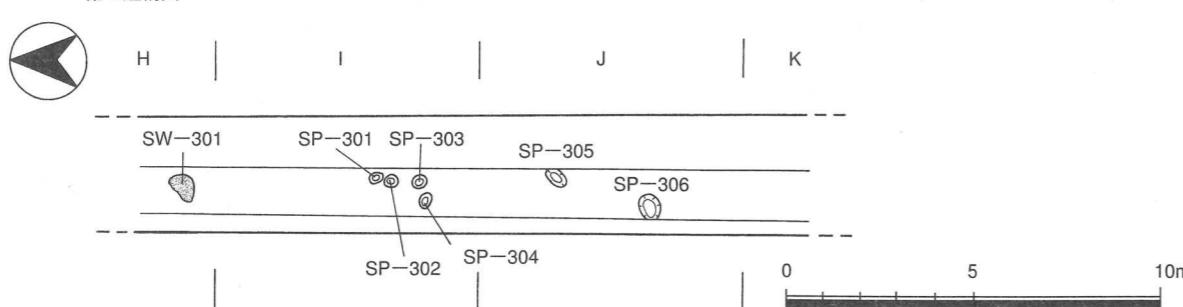
第1遺構面



第2遺構面



第3遺構面



第5図 検出遺構平面図

はない。溝の検出総数は20条を数え、検出規模は幅0.1~1.0m・深さ0.2m前後を測る。方向は東-西が16条、南-北が4条を数える。溝の断面形は皿状形・椀状形・逆台形の3種類で、内部堆積土は灰色シルト質粘土と灰褐色微砂混シルト質粘土の2種類がある。遺物は各溝から須恵器・土師器・瓦器の小破片が少量出土したが、図化できるものはなかった。なお、各溝の法量等の詳細は第3表に掲載した。

<第2遺構面>

第2遺構面では、古墳時代前期（布留式古相）に比定される井戸2基（S E-201・202）、土坑6基（S K-201~206）、溝3条（S D-201~203）、落ち込み4箇所（S O-201~204）、小穴21個（S P-201~221）を検出した。

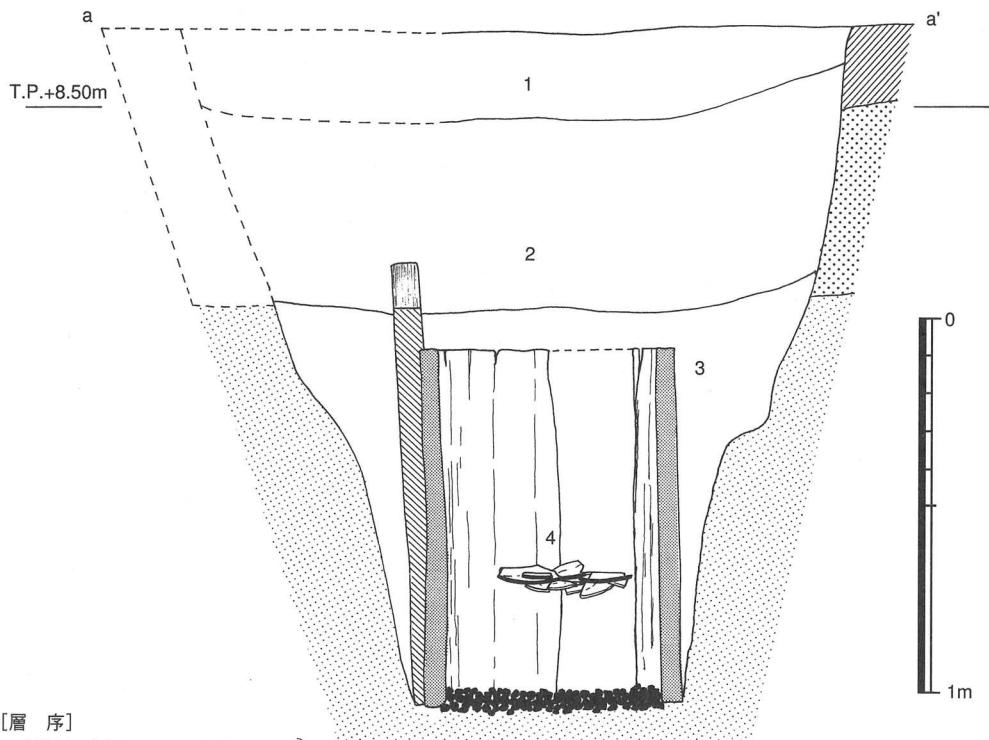
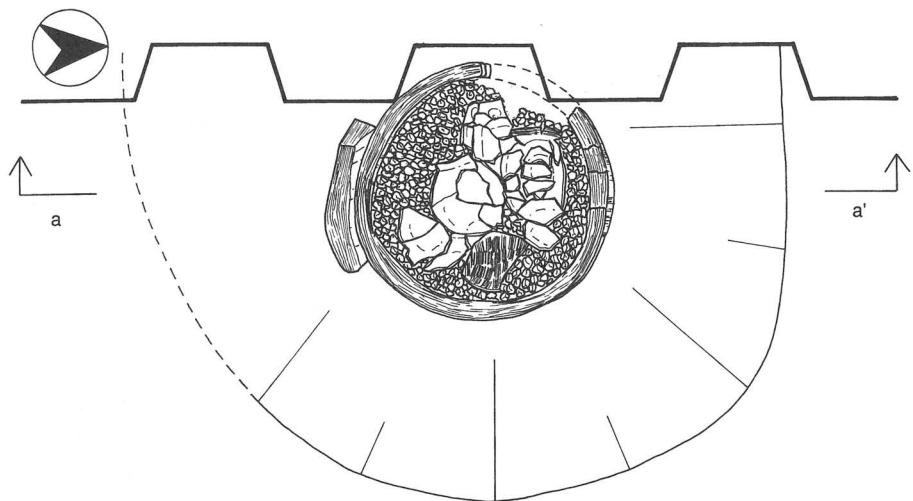
井戸（S E）

S E-201

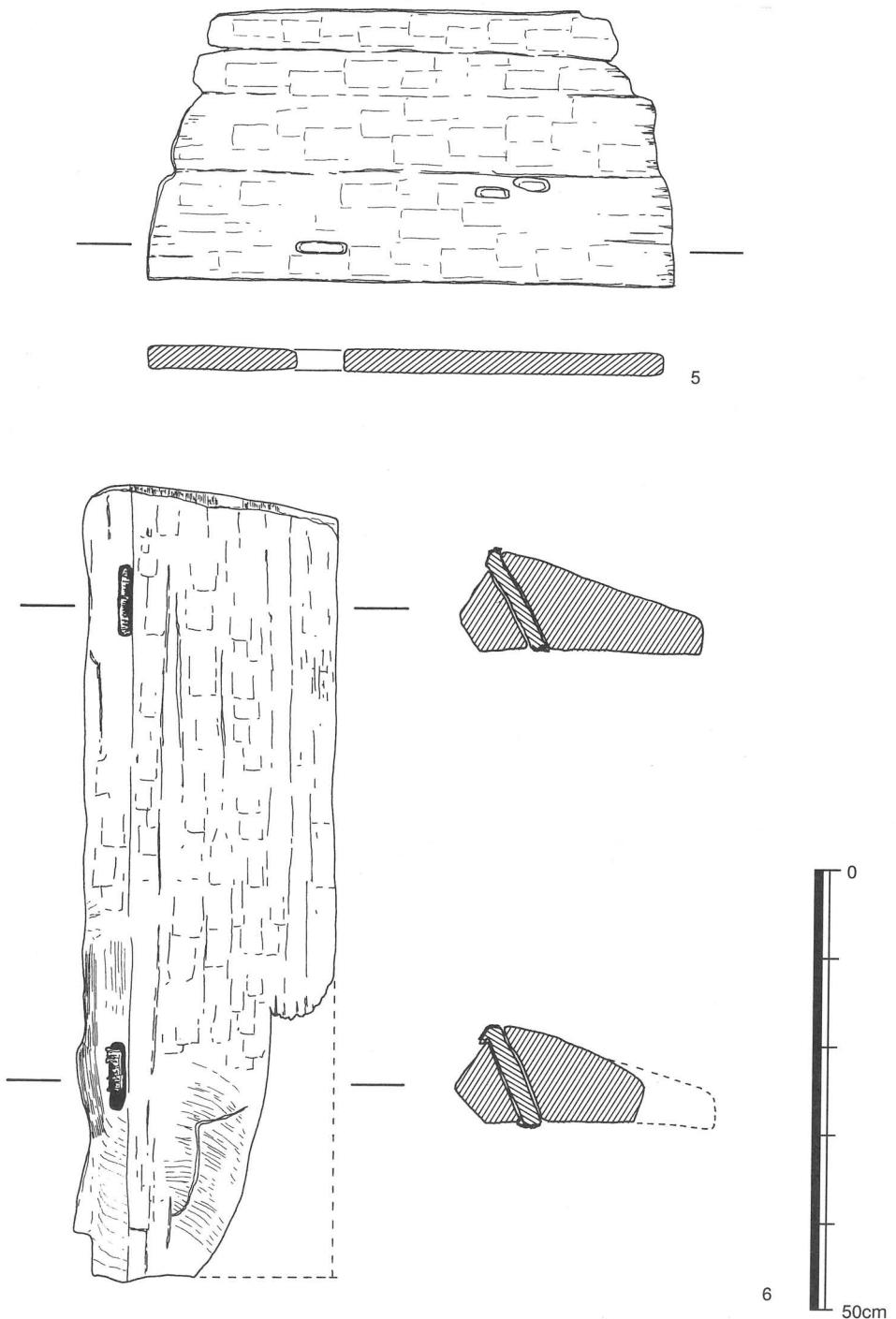
D・E区の境界付近で検出した。丸太の削抜き材を井戸側とした類例の少ない井戸である。さらにその井戸側上部には4枚の横板が組まれているのが窺われるが、内3枚は鋼矢板打設時に破壊されており現場撮影直後に崩落してしまった。井戸の掘形については、平面は西部を鋼矢板打設の際に破壊されたため形状は不明であるが、断面の形状は井戸の断ち割りからみて摺鉢状を呈しているとおもわれる。掘形の規模は検出部分で最大径1.5m（南北）・深さ2.1mを測る。掘形内の埋土は、上層から第1層黒褐色砂礫混じり粘土質シルト・第2層暗褐色粘土質シルト・第3層暗灰色粘土質シルトの3層に分層できる。井戸側内の埋土は、黒灰色微砂混じりシルト質粘土の单一層で、最深部には厚さ5cmの上下間で径2~3cmの小礫が敷き詰められており、これらの小礫は清水を常時保つための機能を果たしていたとおもわれる。丸太の削抜き井戸側は鋼矢板打設によって1/4欠損している。横板の法量は長さ65cm・幅32cm・厚さ3cmを測る。一方、丸太材の法量は直径62cm・高さ94cm・厚味が6cm前後を測

第3表 第1遺構面 溝（S D）法量一覧表

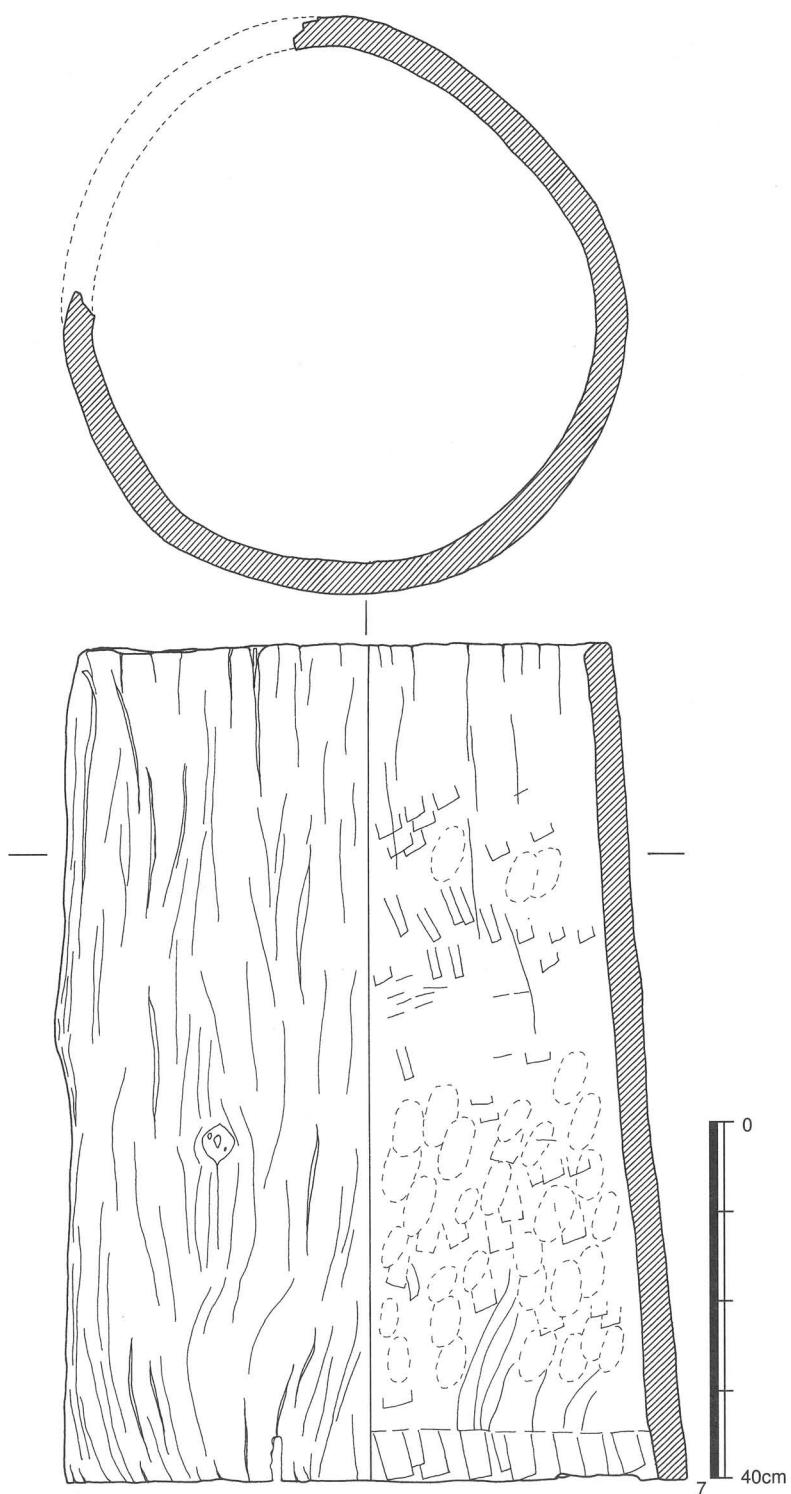
遺構番号	地区	方向	幅(cm)	深さ(cm)	断面図
SD-101	I区	東西	10~30	3~5	皿状形
SD-102	I区	東西	15~30	7~9	椀状形
SD-103	I区	東西	25~55	5~7	逆台形
SD-104	I区	南北	20~100	8~10	逆台形
SD-105	L区	東西	45以上	6~8	不明
SD-106	L区	東西	40~45	5~7	椀状形
SD-107	L区	東西	20~30	8~10	椀状形
SD-108	L区	東西	25~45	4~7	逆台形
SD-109	L区	南北	20~30	5~10	逆台形
SD-110	M区	東西	25	3~7	皿状形
SD-111	M区	東西	30~35	8~10	椀状形
SD-112	M区	東西	25~45	4~7	椀状形
SD-113	M区	東西	15~20	2~5	椀状形
SD-114	M区	東西	25~45	10~12	逆台形
SD-115	M区	南北	25以上	3~5	不明
SD-116	M・N区	南北	20~55	8~21	逆台形
SD-117	M・N区	東西	30	4~7	椀状形
SD-118	N区	東西	15~35	7~9	逆台形
SD-119	N区	東西	35~40	8~11	逆台形
SD-120	N区	東西	30~35	9~12	逆台形



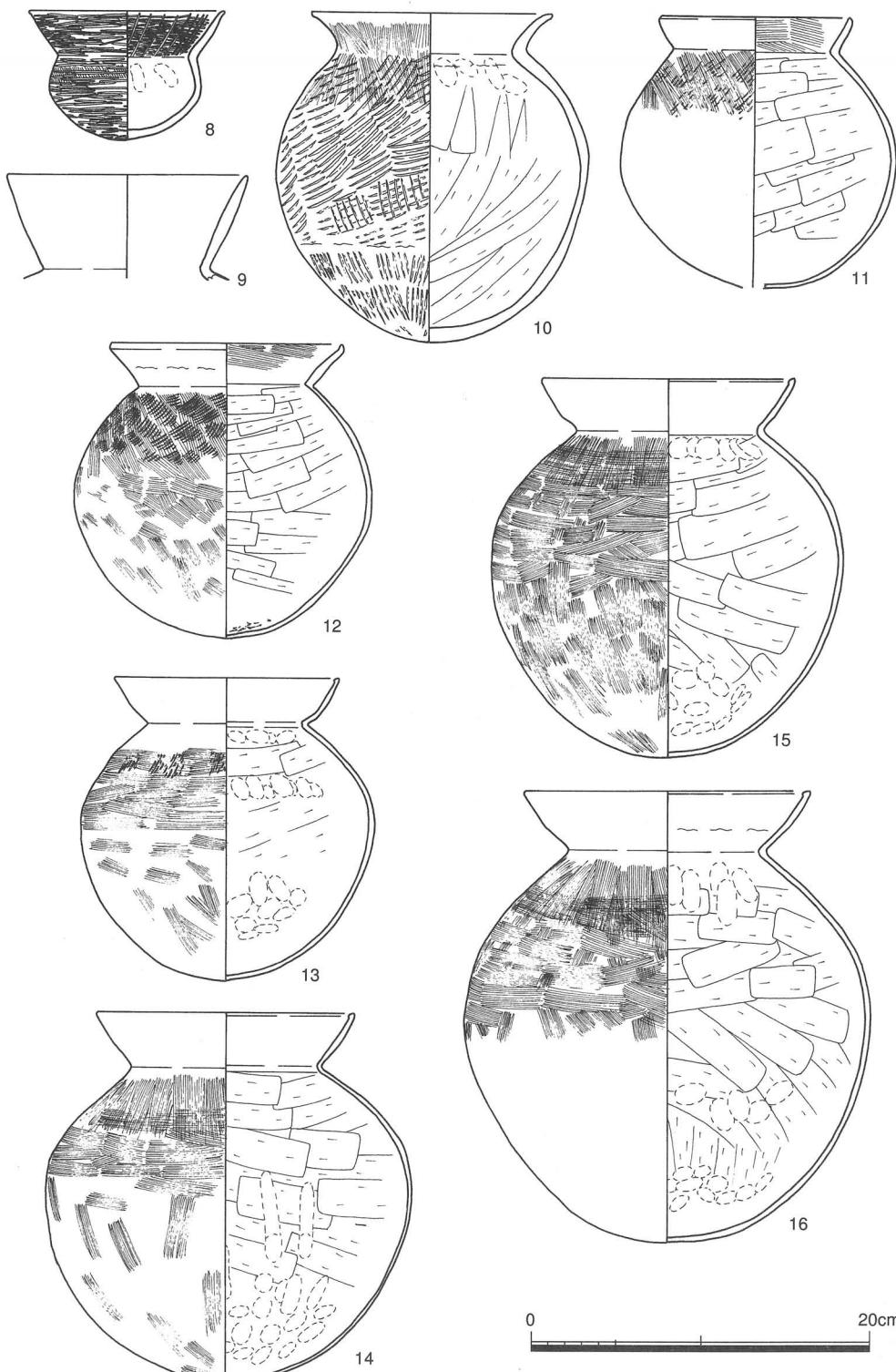
第6図 S E-201平・断面図



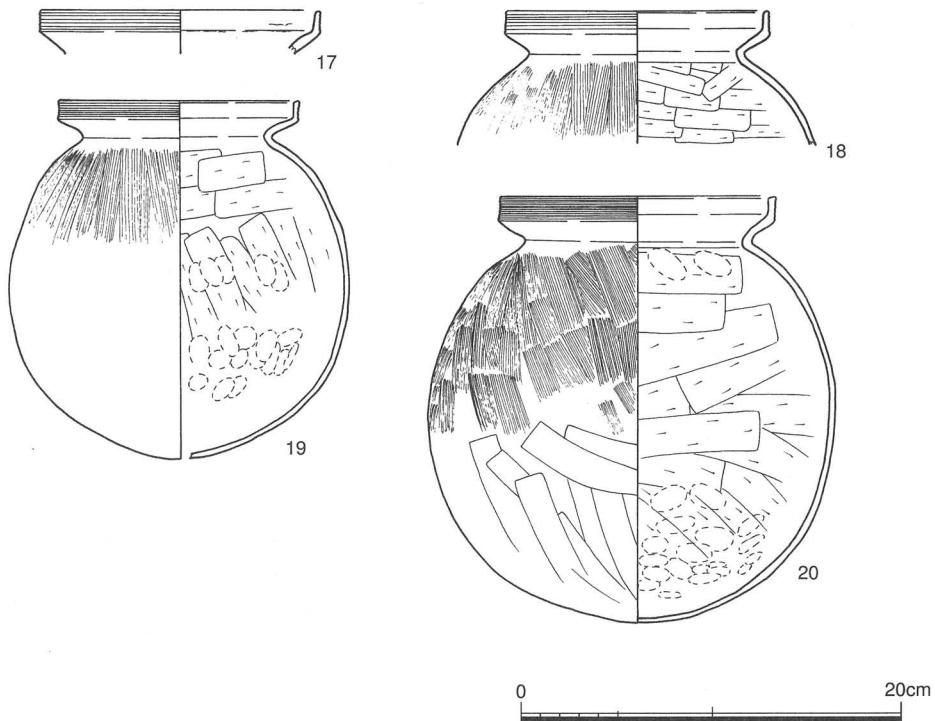
第7図 SE-201井戸側横板（5）および井戸側付設部材（6）実測図



第8図 SE-201丸太割抜き井戸側実測図



第9図 SE-201出土遺物実測図 I



第10図 S E - 201出土遺物実測図Ⅱ

る。また、丸太の剝抜き井戸側の南側には、井戸側を固定するかのように長さ92cm・幅29cm・厚さ4~10cmの木製部材が付設されていた。この部材には側辺の上部と下部の2箇所に1.5cm×7.5cmの孔が穿たれており、孔内には横木が残存したことから、何等かの建築部材を転用したものではないかと思われる。今回検出した丸太の剝抜き井戸について宇野隆夫氏の型式分類(註3)によれば、B I · a類丸太一木剝抜き井戸にあたるもので、畿内周辺部には布留式期に拡まるようである。現在までの知見では、奈良県磯城郡田原本町唐古遺跡の丸太剝抜き井戸(註4)が弥生時代中期初頭で最も古い検出例である。古墳時代では8例ほどの検出例をみるが、類例の少ない型式の一つと言える。出土土器について、掘形では第1~3層にかけて土師器の小破片が少量みられたが、図化できるものはなかった。井戸側内では最下層部分から古墳時代前期(布留式古相段階)に比定される土器類が出土し、図化できたものは、小型丸底壺(8)・直口壺(9)・甕(10~20)である。小型丸底壺(8)は口径が体部最大径を凌駕し、外面は密なヘラミガキ調整である。(10)の甕は、他の甕に比べ器壁が厚く、外面調整はタタキ痕が明瞭に窺われ、畿内第V様式の系譜を引くものとおもわれる。甕(11·12)は、体部外面のタタキ調整が上位にのみ施され、ハケナデもタタキが施されている部分のみに窺える。甕(13~16)は、いわゆる布留式甕で口縁屈曲部の彎曲化と口縁端部が丸味をもって肥

厚するほか、体部外面上位の水平方向のハケナデを特徴とする。甕（17～20）は、吉備地方からの搬入品とみられるもので、直立した口縁端部外面に数条の櫛描直線文が施される。

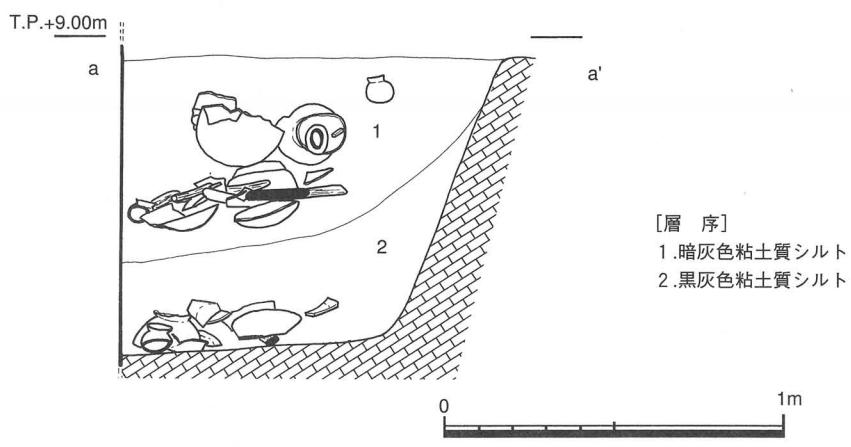
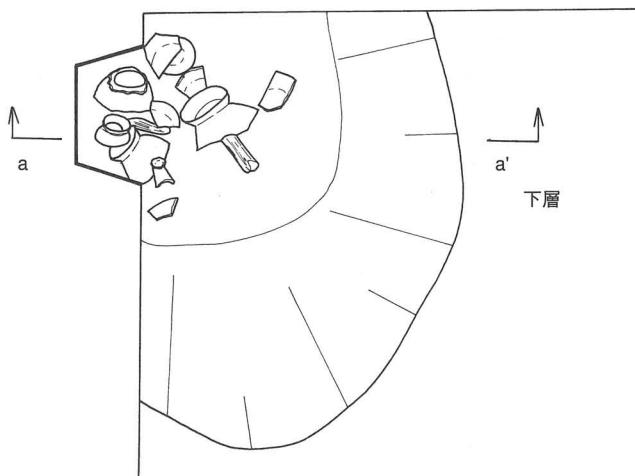
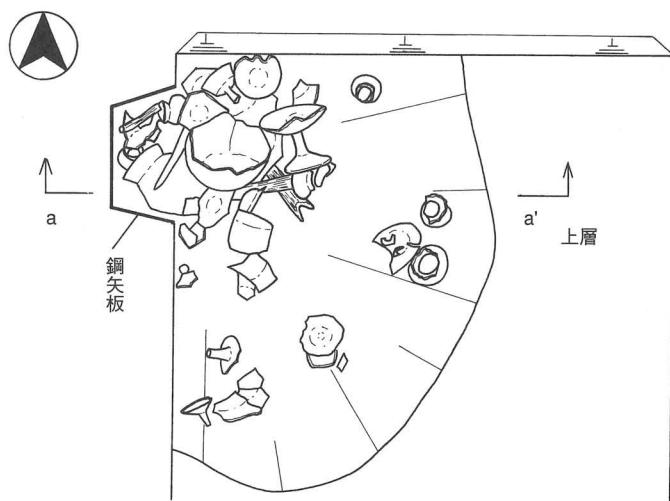
S E-202

H区の北西隅で検出した素掘りの井戸である。掘形上面の形状は北部及び西部が調査区外に至るため全容は不明である。規模は検出部で最大径1.2m・深さ0.75mを測る。井戸内埋土は上層が暗灰色粘土質シルト、下層が黒灰色粘土質シルトの2層に分層される。埋土内の遺物は、古墳時代前期（布留式古～中段階）に比定できる土器がコンテナ箱で約3箱分出土した。そのなかで図化できたものは、小型丸底壺（21～28）・複合口縁壺（29～31）・広口壺（32～35）・甕（36～49）・高杯（50～62）・砥石（63）がある。小型丸底壺を体部外面の調整別でみると、ハケナデ（21～23・26～28）、ヘラミガキ（24）、ヘラケズリ（25）でハケナデ調整は当該期のなかで新様相を示す。また、（28）の底部外面には「+」のヘラ記号がみられる。複合口縁壺（29～31）は形態的に、山陰や北陸からの影響を示唆する。（32）の広口壺は口縁部が外反して伸び、他に比べて硬質である。体部がいずれも球形を呈すると思われる広口壺（33～35）のうち（34）は、口頸部が短く外反し体部外面にタタキ調整がみられる。（34）については古墳時代初頭の所産と考えられるが、類例の少ないものである。甕の多くは内彎する口縁部と口縁端部の内部肥厚が内傾し面をもついわゆる布留式甕で時期的に布留式古相～中相の範疇である（40～49）。これに該当しないものをみると（36）は外反気味に伸びる口縁部から先細りの端部になる。（37・38）は直線的に伸びる口縁部に外傾する平坦な面を呈する。（39）は外反気味に伸びる口縁部につまみ上げの端部を呈する。また、（49）の肩部外面には1条の波状文で唯一装飾がみられるが、意図的なものか波状文の一部を切る1条の板ナデがみられる。高杯については、杯部で段を有するもの（50～54）と椀形を呈するもの（55～59）の2種類に分類できる。相対的には布留式期のなかでも前者が古相に位置付けられ、脚部に至るまでヘラミガキが施されるが、後者の新相になるとナデ調整が主流となり調整が粗略化へと移行していく。小型の砥石（63）は、一端に径4mm程の孔が穿たれており、おそらくここに紐を通して携帯していたものとおもわれる。使用痕は体部全面に確認され、中央部分はややくびれる。

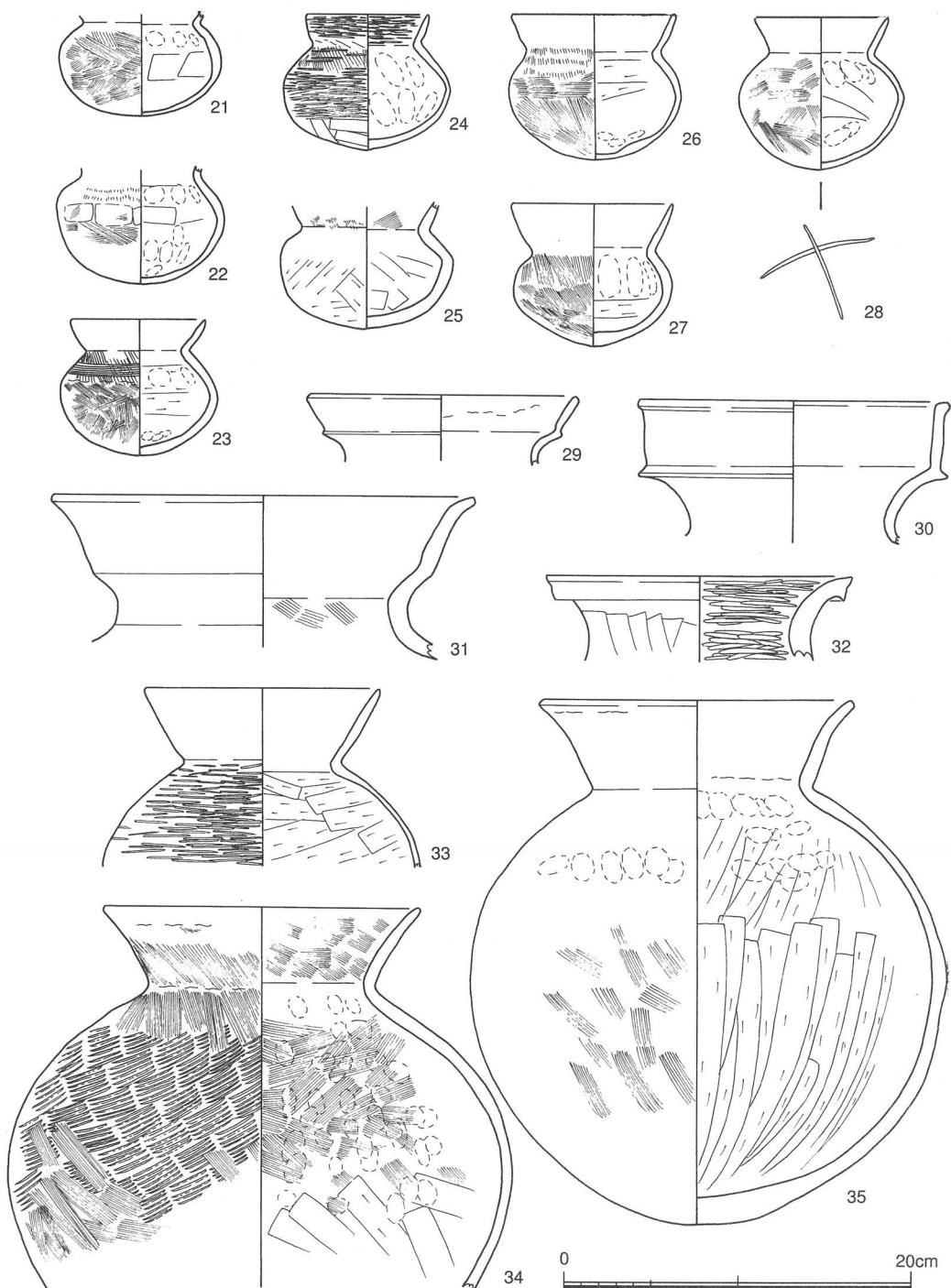
土坑（S K）

S K-201

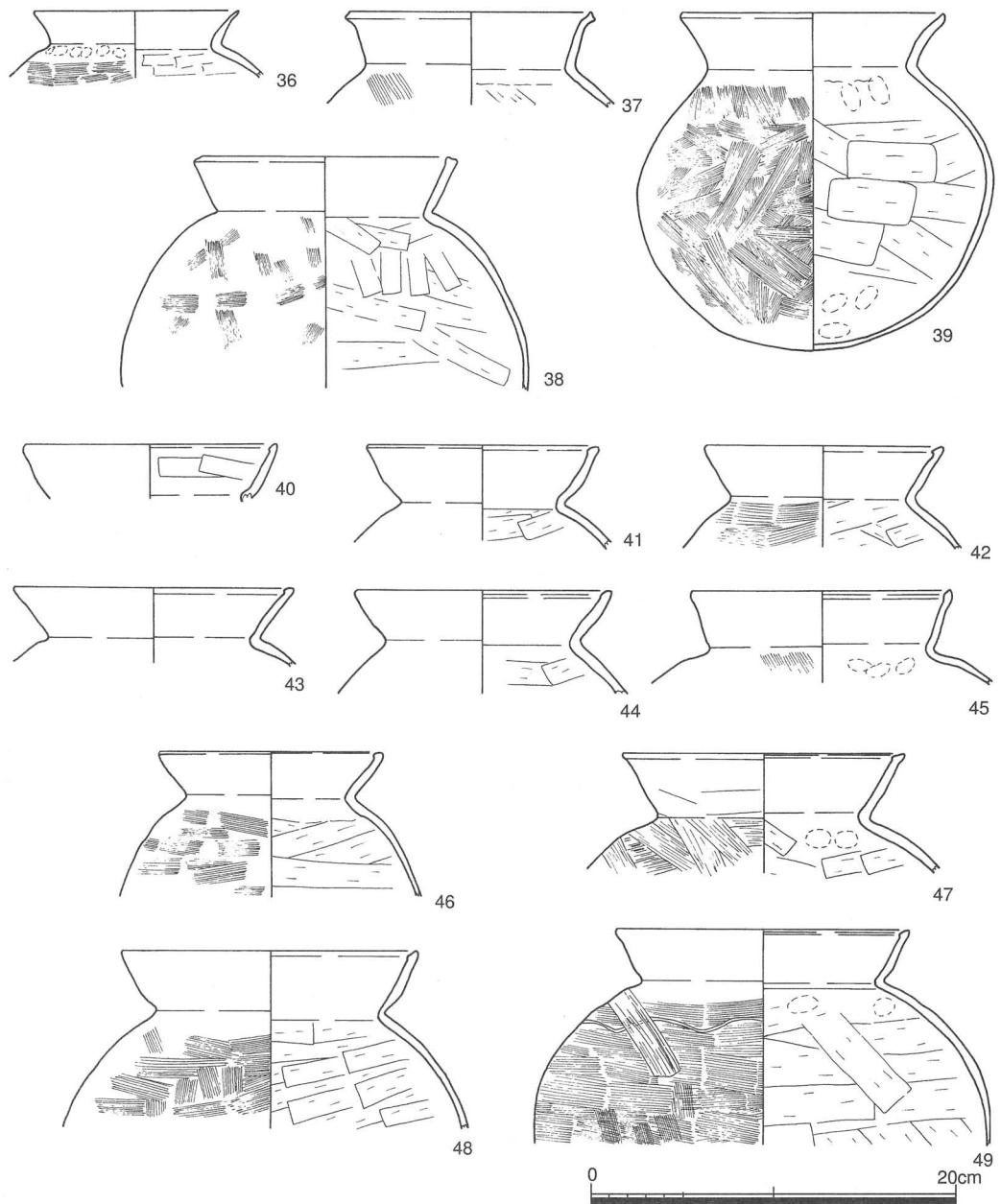
B・C区の境界付近で検出した。上面の形状は東部及び西部が調査区外に至るため不明である。規模は検出部で東西幅1.7m・南北幅3.0m・深さ0.7mを測る。埋土は上から第1層暗灰色粘土質土・第2層灰黒色微砂混じり粘土・第3層黒灰色粘土の3層に分層できる。また、第2層及び第3層には炭化物が多量に含まれている。遺物は古墳時代前期（布留式古～中段階）に比定できるものが出土した。そのうち図化できたものは小型丸底壺（64・65）・直口壺（66



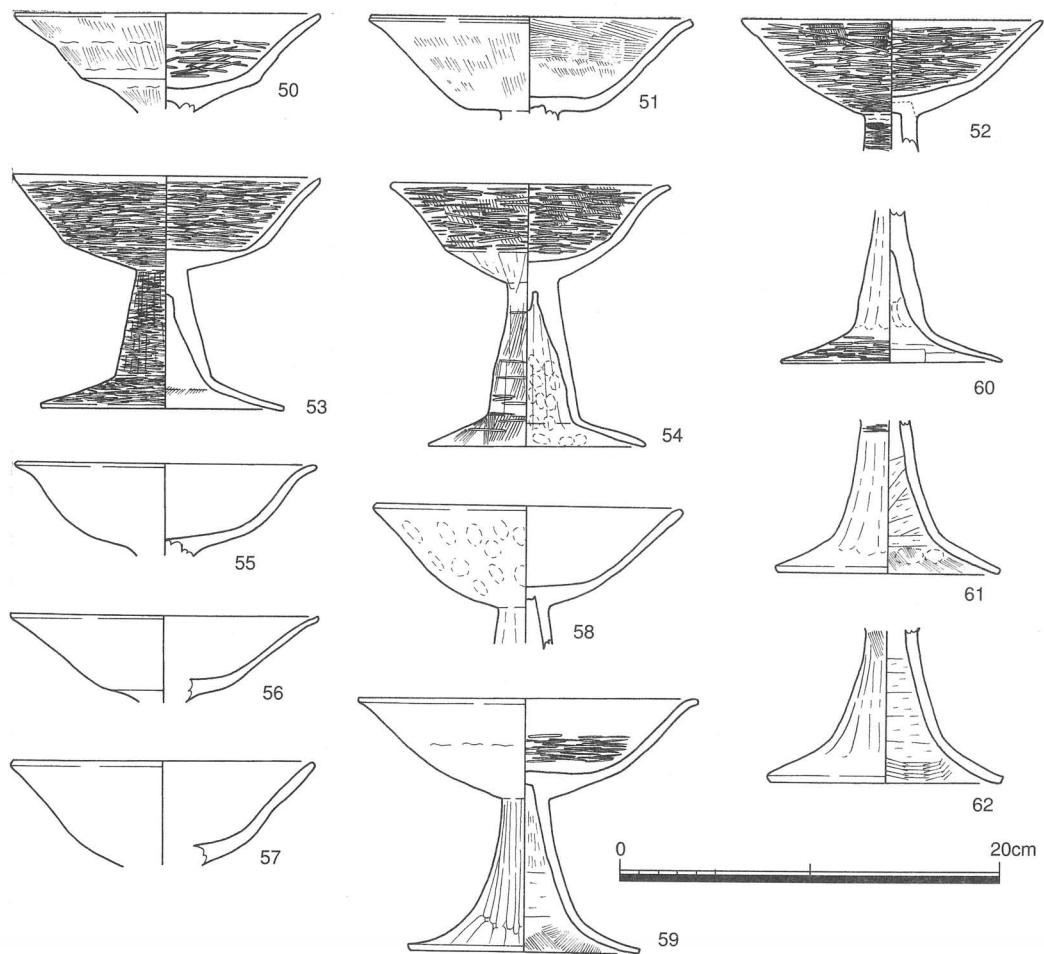
第11図 S E-202平・断面図



第12図 S E-202出土遺物実測図 I

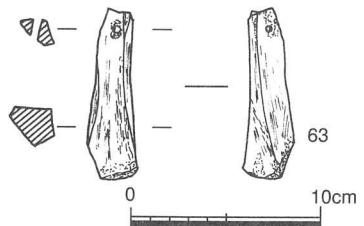


第13図 S E-202出土遺物実測図Ⅱ

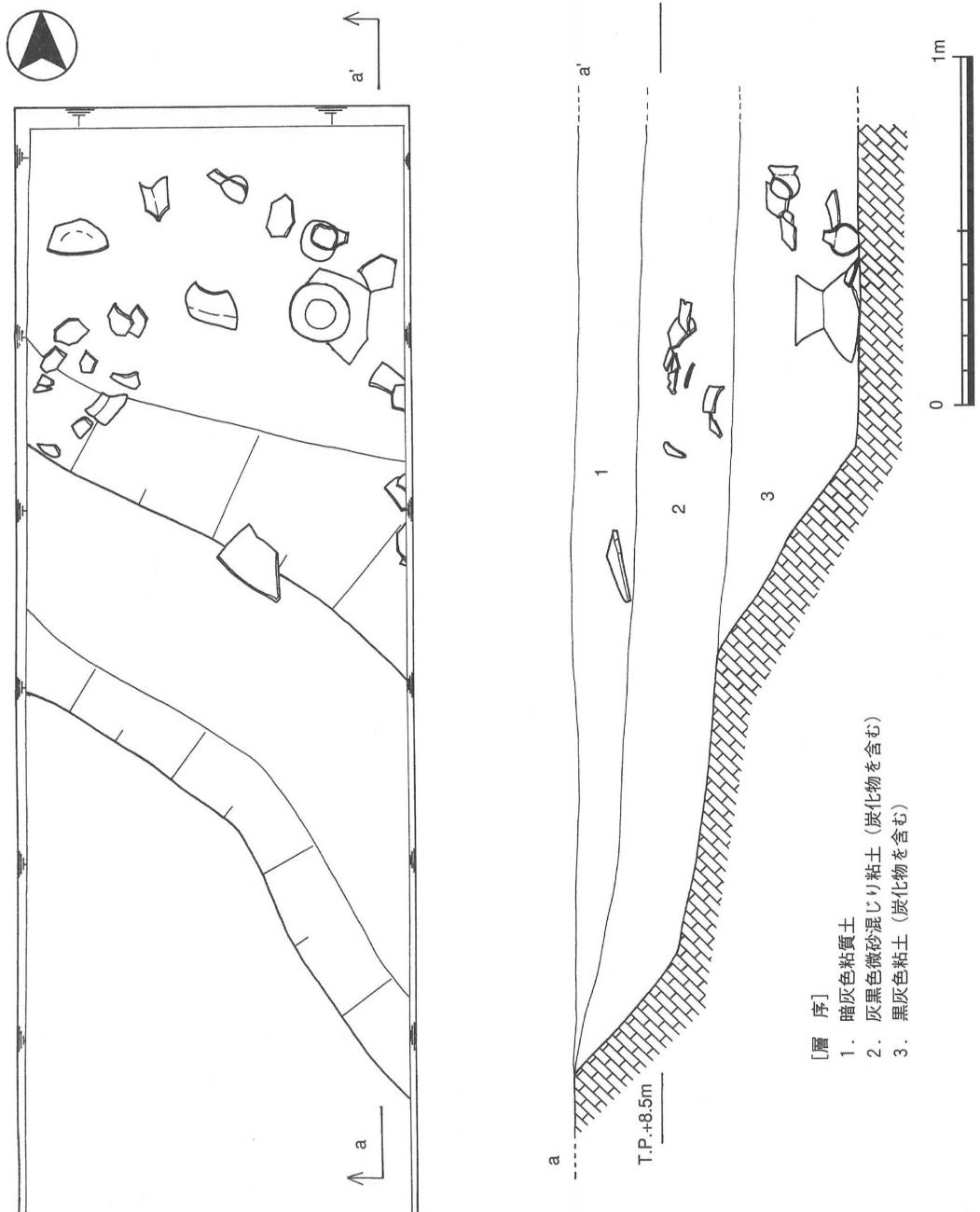


第14図 SE-202出土遺物実測図Ⅲ

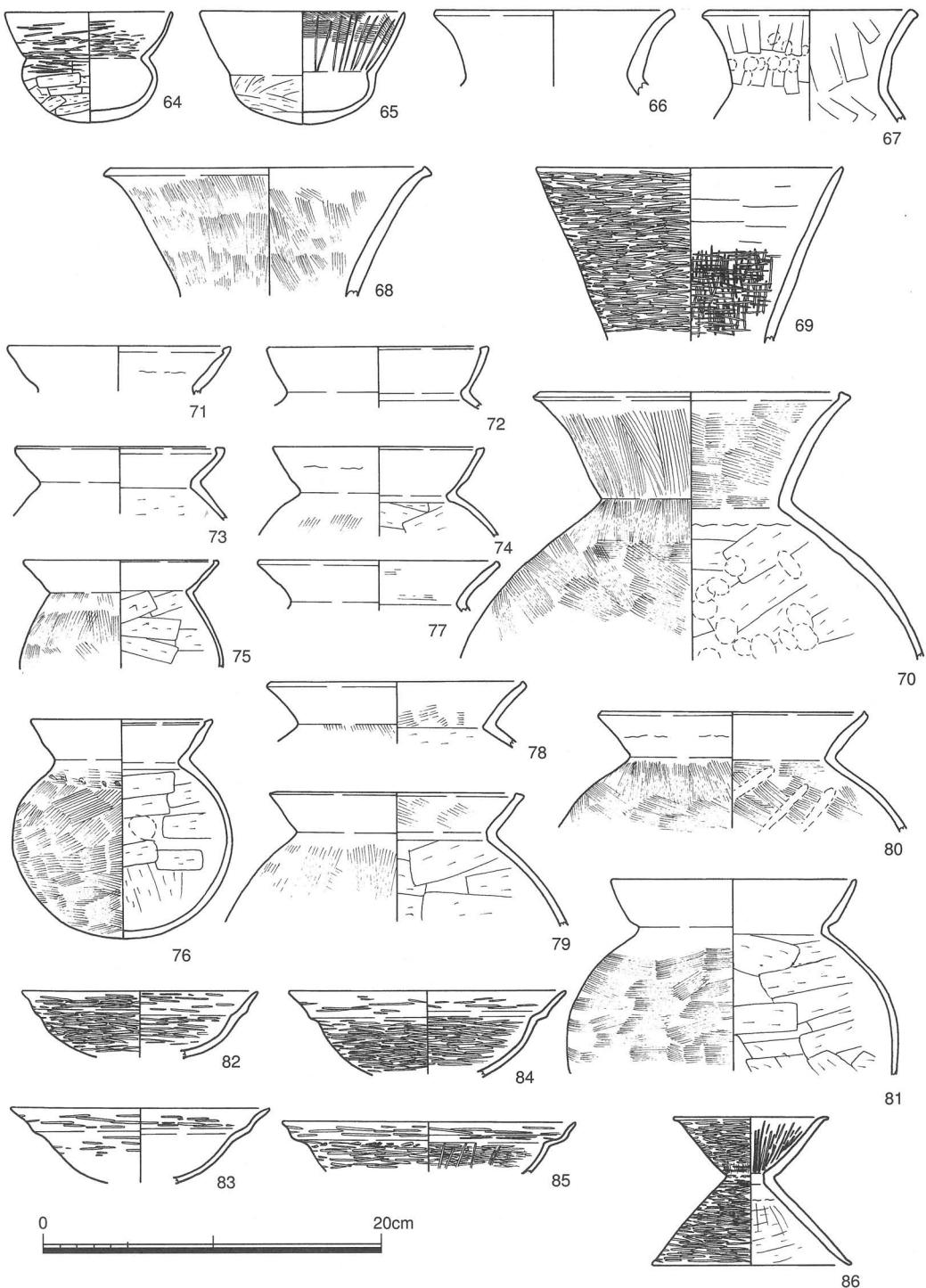
~70)・甕(71~81)・小型有段鉢(82~85)・小型器台(86)である。小型丸底壺(64・65)は口径が体部最大径を凌駕し、口縁部がヘラミガキ・体部がヘラケズリ調整されるものである。直口壺には口縁部がやや外反気味に伸びるもの(66~68)と直線的に伸びるもの(69)がある。また、大型の口縁部の調整をみるとハケナデされるもの(68)と周密にヘラミガキが施されるもの(69)がある。甕については口縁部の形態や体部外面の調整から先述のSE-202とほぼ同時期と考えられるが、そのなかに(80)のような、内面の調整がヘラケズリではなくハケナデの後ユビナデが加えられるといった特異なものも含まれる。半球形の体部に



第15図 SE-202出土遺物実測図Ⅳ

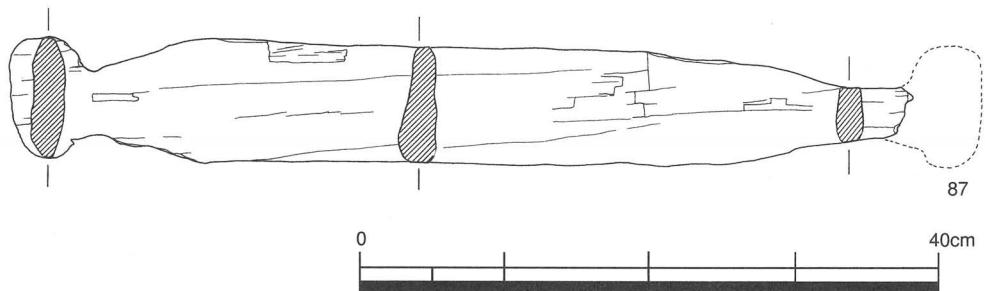


第16図 SK-201平・断面図



第17図 SK-201出土遺物実測図

段を成して短い口縁部が付く精製の小型鉢（82～85）は布留式古相の時期にのみ出現する。小型器台（86）は受部と脚部が貫通するもので、外面が密なヘラミガキ調整される。土器以外に織機の部材で「ちまき」^(註5)とも呼ばれる木製の布巻具が1点出土した（87）。これは紡織具のなかでもその名のとおり、織った布を巻きとる際に用いられる道具で、板状の両端に切り込みを入れて偏平に丸く仕上げられている。今回出土したものは長さ62cm・幅8cm・厚さ2cmを測るもので、両端のうちの一端は欠損しているが、他の出土例からみると大型の部類に属する。さらにその布巻具の周辺にも数点の木片が散在しており、図化するまでには至らなかったが、状況からみてこれらも紡織部材の一部であったと考えられ、布巻具同様に織機としての機能を果たさなくなつた後、投棄されたものとおもわれる。



第18図 SK-201出土「布巻具」実測図

S K-202

E区北西部で、S O-201内で検出した。遺構は北東肩部のみの検出のため全容は不明である。規模は検出部で最大幅0.6m・深さ0.23mを測る。埋土は暗褐色砂礫混じり粘土質シルトで、遺物は出土しなかった。

S K-203

H区内中央の東端で検出した。遺構は東部が調査区外に至るため全容は不明である。規模は検出部で東西幅0.5m・南北幅1.3m・深さ0.12mを測る。埋土は暗灰色粘土質シルトである。内部からの遺物で図化できたものは小型器台（88）の1点のみである。

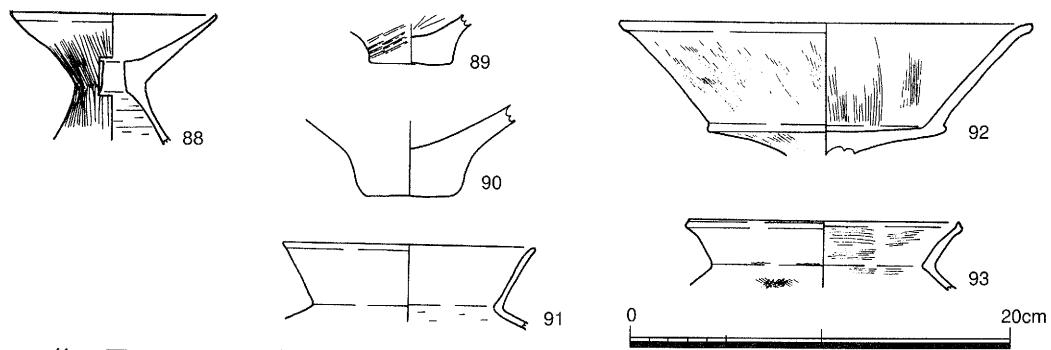
S K-204

H区SK-203の南西部で検出した。遺構の西部が調査区外に至るため全容は不明である。規模は検出部で東西幅0.7m・南北幅1.0m・深さ0.17mを測る。埋土は暗灰色粘土質シルトである。図化できた遺物は、甕（89～91）、高杯（92）がある。高杯（92）は、水平な杯底部から外反気味に大きく伸びる口縁部が付す布留式古段階に相当する。

S K-205

M区のやや中央東端で検出した。遺構の東部が調査区外に至るため全容は不明である。規模

は検出部で東西幅0.7m・南北幅0.4m・深さ0.07mを測る。埋土は暗褐色微砂混粘土質シルトである。出土遺物のうち図化できたものは甕(93)1点のみである。



第19図 SK-203 (88)・SK-204 (89~92)・SK-205 (93) 出土遺物実測図

SK-206

N区の東端で検出した。遺構 第4表 第2遺構面 小穴(S P)法量一覧表

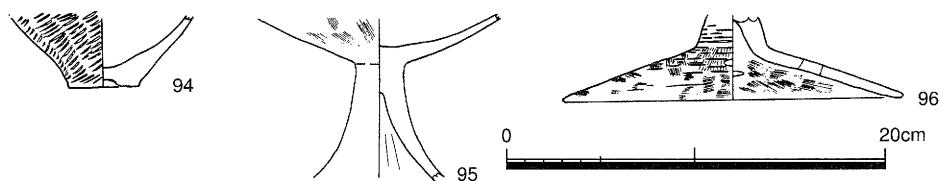
肩の東部の一部が調査区外に至るが、検出状況からみて平面の形状は、楕円形を呈するとおもわれる。断面形は逆台形を呈する。規模は長径1.0m・短径0.3m・深さ0.09mを測る。埋土は暗褐色砂礫混じり粘土質シルトである。遺物は古式土師器片が少量で、図化できるものはなかった。

小穴(S P)

総数21個(S P-201~221)を検出した。地区別では、E区-4個(S P-201~204)・F区-6個(S P-205~210)・I区-2個(S P-211・212)・K区-3個(S P-213~215)・M区-1個(S P-216)・N区-3個(S P-217~219)・O区-2個

遺構番号	地区	短径-長径(cm)	深さ(cm)	平面形	断面形
S P-201	E区	22-26	5	円形	皿状形
S P-202	E区	44-64	20	楕円形	半円形
S P-203	E区	最大径60	11	不明	不明
S P-204	E区	20-26	12	円形	半円形
S P-205	F区	23-29	17	円形	半円形
S P-206	F区	26-39	12	円形	皿状形
S P-207	F区	70-93	22	不定形	逆台形
S P-208	F区	10-13	11	円形	半円形
S P-209	F区	20-31	11	隅丸方形	逆台形
S P-210	F区	最大径75	27	不明	不明
S P-211	I区	最大径40	19	不明	不明
S P-212	I区	34	5	円形	皿状形
S P-213	K区	最大径96	20	不明	不明
S P-214	K区	最大径58	12	不明	不明
S P-215	K区	最大径61	13	不明	不明
S P-216	M区	20-34	14	楕円形	半円形
S P-217	N区	21	16	円形	半円形
S P-218	N区	48-69	6	隅丸方形	皿状形
S P-219	N区	最大径45	4	不明	不明
S P-220	O区	最大径77	10	不明	不明
S P-221	O区	34-70	14	円形	半円形

(S P-220・221)である。平面の形状別では円形-8個・橢円形-2個・隅丸方形-2個で、他は調査区外に至るため不明である。遺物は各小穴から古式土師器の小破片が少量出土した。そのうち図化できたものはS P-207から甕(94)・S P-210から高杯(95)・S P-220から高杯(96)の3点である。高杯(96)は、椀型の杯部が付くもので、古墳時代前期初頭(庄内式期)を通して普遍的にみられるが、前期のはじめ(布留式古段階)にも散見される。また、S P-206・211では柱根が遺存しており、建造物の存在を明示するが、面的な制約も含め周囲に規則性をもつ柱穴を確認することはできなかった。なお、各小穴についての法量及び形状等の詳細については第4表に掲載した。

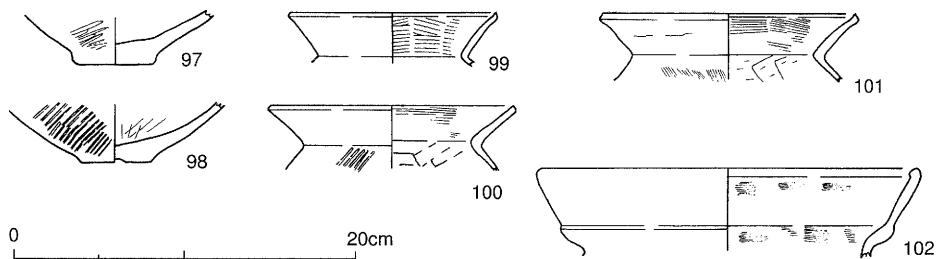


第20図 S P-207 (94)・S P-210 (95)・S P-220 (96) 出土遺物実測図

溝(S D)

S D-201

C区南半部からD区南半部にかけて検出した。溝は東西方向に伸び、断面形は浅い半円形を呈する。規模は最大幅5.0m・深さ0.4mを測る。埋土は暗灰色粘土質シルトである。遺物は弥生時代後期末(畿内第V様式)～古墳時代前期(布留式古段階)に比定されるもので、器種別では甕の占める割合が高い。そのうち図化できたものは甕6点(97～102)である。(102)については、口縁部の形態や胎土の色調から山陰系とおもわれる。



第21図 S D-201出土遺物実測図

S D-202

I・J区の境界付近で検出した。遺構の南肩を側溝掘削の際に削平してしまったが、東西の両壁面の観察から、規模は幅1.5m前後・深さ0.25m前後を測るものとおもわれる。断面形は浅い半円形で、埋土は暗褐色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

S D -203

M区北部で検出した。東西方向に伸び、断面形は逆台形を呈する。規模は最大幅0.7m・深さ0.09mを測る。埋土は暗褐色微砂混じり粘土質シルトである。遺物は古式土師器の小破片が少量出土した。

S D -204

O区北東部隅で、遺構の南西岸を検出した。規模は最大幅0.7m・深さ0.11mを測る。方向としては南東-北西に伸びるものとおもわれる。埋土は暗褐色微砂混じり粘土質シルトである。遺物は古式土師器の小破片が少量出土した。

落ち込み (S O)**S O -201**

E区の南西部隅から北東部に向かって落ち込むもので、南北に隣接するD区及びF区の遺構面のレベル数値をみると、E・F区の境界付近でD区、すなわち北に一段低くなっているのがわかる。深度は浅いところで0.2m、深いところで0.35mを測る。埋土は暗茶褐色砂礫混じり粘土質シルトである。さらに遺構内から土坑1基(S K-202)・小穴4個(S D-201~204)を検出した。遺物は土坑・小穴を除く埋土内から古墳時代前期(布留式期)に比定される土器片が少量出土した。そのうち図化できたものは複合口縁壺1点(103)である。

S O -202

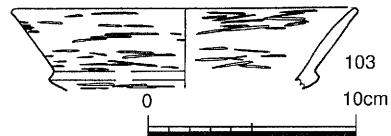
I区南西部で検出した。その検出状況から南東から北西に向かって落ち込むものとおもわれる。深度は0.15mで、内部堆積土は暗茶褐色微砂混じり粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

S O -203

I区南部から北部に向かって落ち込むが、途中S O-202によって切られ、肩の東部はS P-211によって切られる。深度は0.2mで、内部堆積土は暗灰色砂礫混じり粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

<第3 遺構面>

現地表下約1.7~2.4m(標高8.2~8.9m)の第6層青灰色粘土質シルト上面が検出面となるが、遺構が確認できたのはH~J区の3地区のみである。時期的には古墳時代初頭(庄内式古相)に比定される小穴6個(S P-301~306)・土器集積1箇所(S W-301)を検出した。



第22図 S O-201出土遺物実測図

第5表 第3遺構面 小穴 (S P) 法量一覧表

遺構番号	地区	短径-長径(cm)	深さ(cm)	平面形	断面形
S P-301	I 区	27-32	8	楕円形	皿状形
S P-302	I 区	24-30	10	円 形	椀状形
S P-303	I 区	24-38	11	楕円形	逆台形
S P-304	I 区	14-35	7	楕円形	逆台形
S P-305	J 区	最大径30	4	楕円形	逆台形
S P-306	J 区	最大径40	4	不 明	不 明

小穴 (S P)

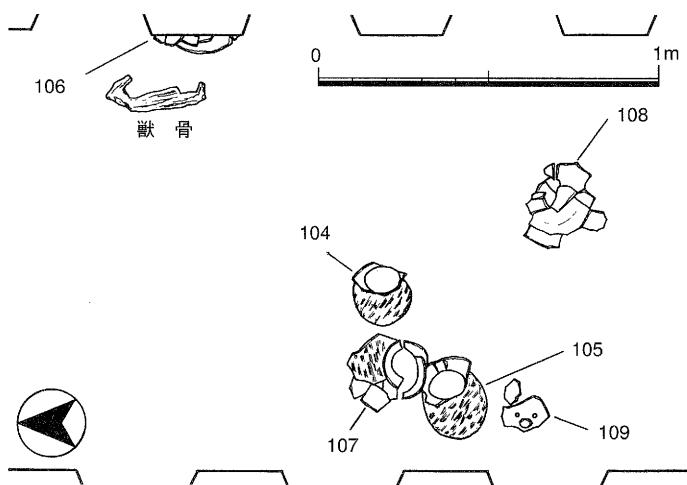
I 区では S P-301~304 の 4 個、J 区では S P-305・306 の 2 個の計 6 個を検出した。各規模は径 14~40 cm・深さ 4~11 cm を測り、内部堆積土はすべて暗灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は各小穴から古式土師器の小破片が少量出土した

が、図化できるものはなかった。また、これらの小穴において建造物を復元できる規則制をもつ柱穴は確認できなかった。なお、各小穴の法量・平面形については第5表に掲載した。

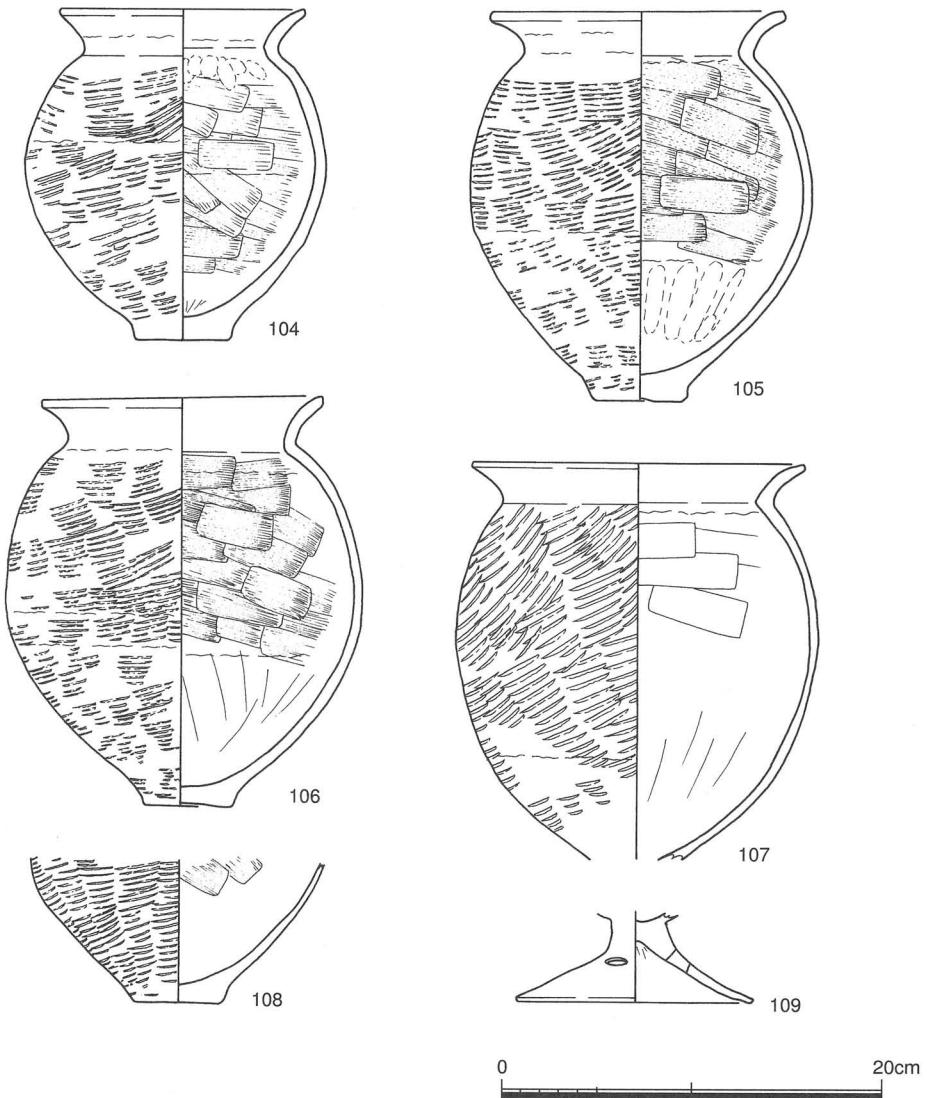
土器集積 (S W)

S W-301

H・I 区の境界付近で検出した。遺物の集積は東西・南北径 1 m 前後の範囲で広がっている。集積内遺物を時期的に類別すると弥生時代後期末頃に比定されるものが古墳時代初頭（庄内式期古相）に比定される遺物とともに混在しており、その時期間に機能していた遺構とみられる。出土遺物のうち図化できたものは弥生時代後期末頃に比定される甕 5 点（104~108）および古墳時代初頭（庄内式期古相）に比定される高杯 1 点（109）である。甕は底部が欠損している（107）および上半部が欠損している（108）も含めて胴長の体部に突出する平底が付くとみられるもので、内面は板ナデによって調整される。また、（104~107）の甕は上半と下半のタタキ方向がやや異なることや明瞭に残る接合痕から分割成形されているのがわかる。高杯（109）は、深みのある椀形の杯部が付くものと思われる。



第23図 SW-301平面図

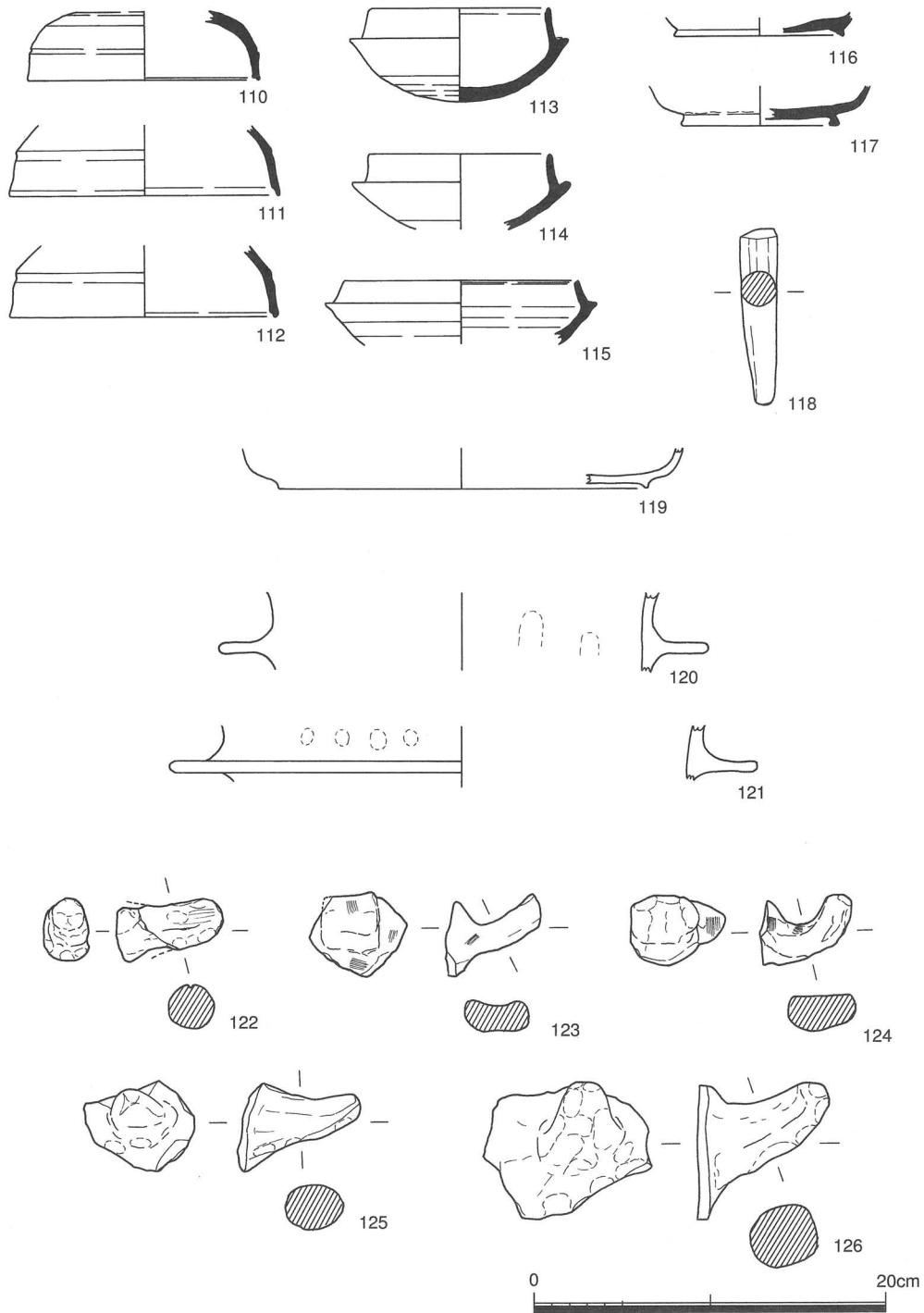


第24図 SW-301出土遺物実測図

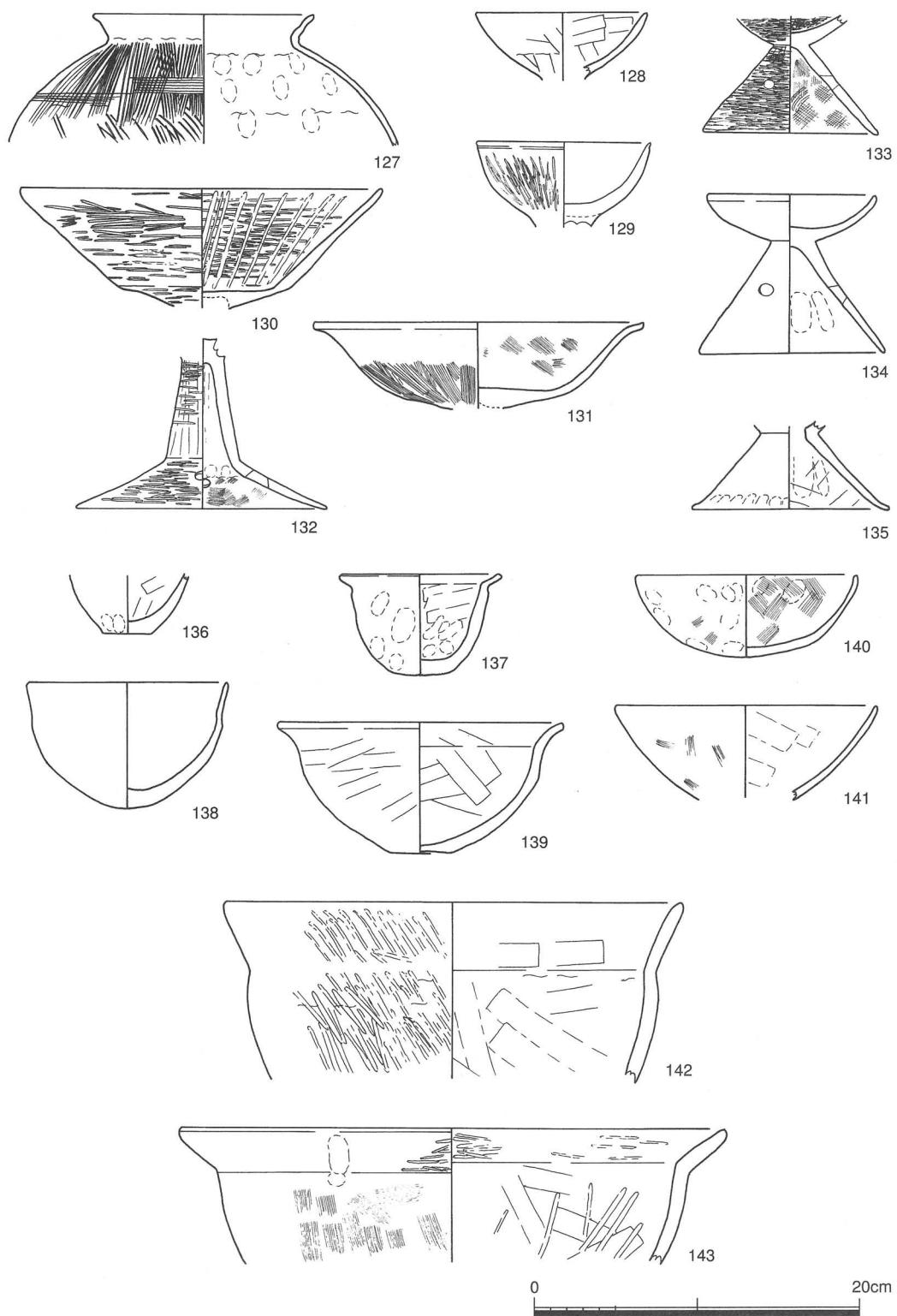
<遺構に伴わない出土遺物>

第3層内 (110~126)

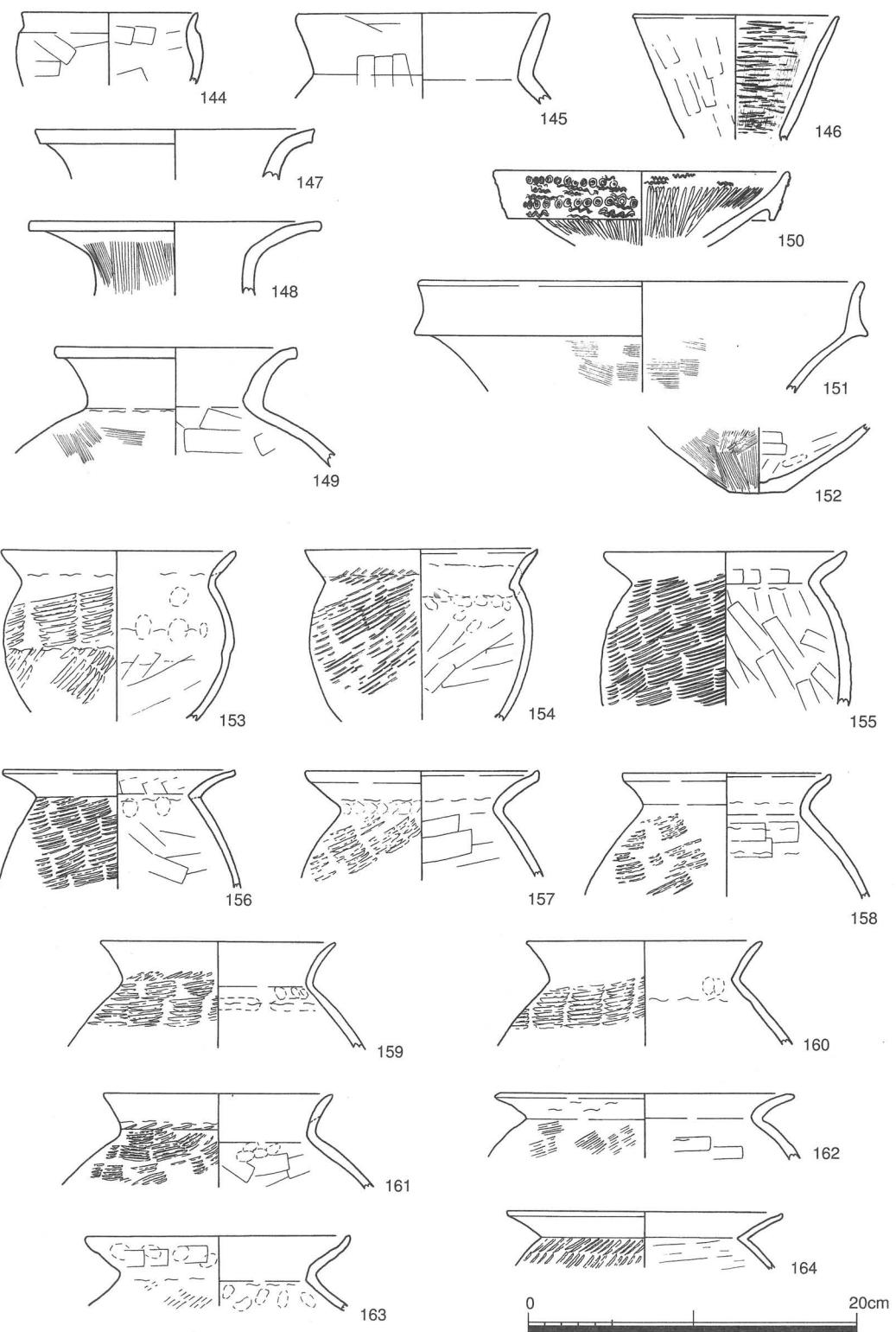
図化できたものは総数17点で、古墳時代中期～中世に相当するものである。内容は須恵器では杯蓋3点(110~112)・杯身5点(113~117)の計8点である。杯蓋および杯身3点(113~115)は陶邑編年^(註6)MT15~TK10型式の範疇とみなされる。一方、奈良時代の杯身底部に付く高台には断面三角形のもの(116)と断面長方形(117)のものがみられる。土師器では瓦質土器三足釜の脚部(118)・盤(119)・羽釜2点(120・121)・甌の把手5点(122~126)がある。盤(119)には断面逆三角形の低い高台が付く。



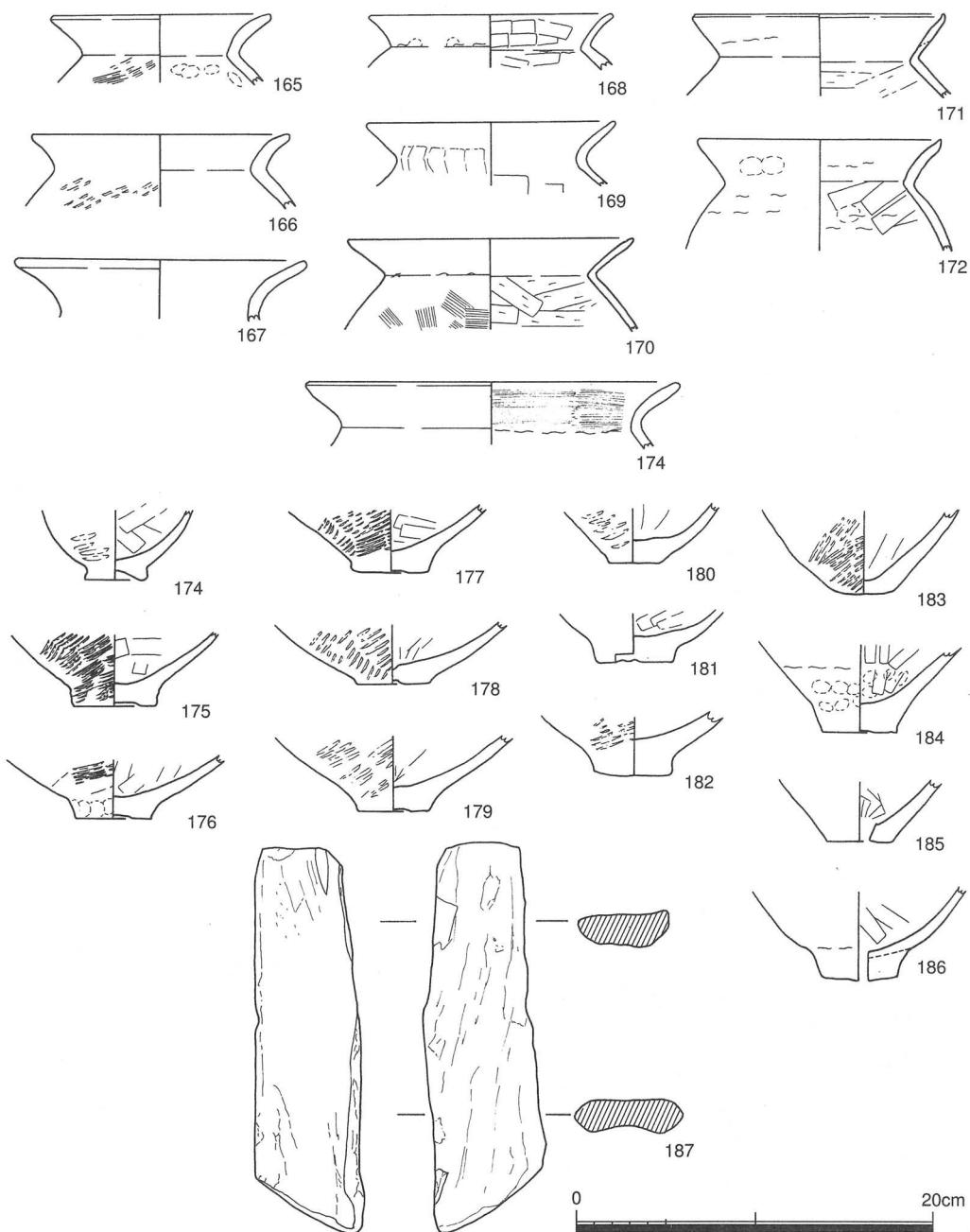
第25図 第3層出土遺物実測図



第26図 第4層出土遺物実測図



第27図 第5層出土遺物実測図 I



第28図 第5層出土遺物実測図Ⅱ

第4層内 (127~143)

図化できたものは総数17点で、古墳時代前期（布留式期古相）に比定されるものである。内容は東海系の甕が1点（127）・高杯が5点（128~132）・器台が3点（133~135）・鉢が小型から大型のものまで8点（136~143）である。いわゆる「S字」口縁をもつ東海系の

甕（127）は、外面に粗いハケナデを施す。杯部椀型の高杯（128・129）には低い脚部が付くものとおもわれる。（130）の高杯は弥生V様式の系譜を引くもので、水平な杯底部から外反せず直線的に伸びる口縁部が付き、内面には放射状のヘラミガキが施される。器台3点のうち2点（133・134）は受部と脚部が貫通しないもので、（135）についてはいわゆる鼓型器台と呼ばれるものである。鉢は小型、大型を含めて形態的に平底を呈するもの（136・137・139）、丸底を呈するもの（138・140）とに分類できるが、他のもの（141～143）については底部欠損のため不明である。

第5層内（144～187）

図化できたものは総数44点で、古墳時代初頭（庄内式期古相）に比定されるものである。内容は小型鉢が1点（144）・壺が8点（145～152）・甕が34点（153～186）・砥石が1点（187）である。小型鉢（144）は短小の口縁部が付く。壺は口縁の形態から直口壺（145・146）・広口壺（147～149）・複合口縁壺（150・151）に類別できる。（151）は口縁部の形態と胎土の色調から他地域からの搬入品の可能性が強い。甕は全体的に畿内第V様式の系譜を引くものが多い。また、底部の形態だけをみると平底をもつものがほとんどで、そのうち底部穿孔されているものが2点（185・186）含まれる。やや板状を呈する石材を加工した砥石（187）には、両面ともに使用痕が認められる。



写真4 調査地近景（南西から）

第3節 出土遺物觀察表

※胎土一量／粒度長は最大長 (mm) / 鉱物=石：石英、長：長石、雲：雲母、角：角閃石、チ：チャート、赤：赤色斑紋、砂

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調整・手法	色調 外面 内面	胎土 量／粒度長／鉱物	焼成	遺存度	備考
1 NR-101	甕 (土師器)	7.0 —	外面：ヨコナデ、タタキ (磨滅気味) 内面：ヘラナデ、接合痕2条	明茶灰色	少／3／長、雲、 石	良好	1/4	
2 同上		— 底径 3.0	外面：ナデ、ユビオサエ 内面：ヘラナデ	淡灰茶色	多／3／長、雲	良好	底部のみ	
3 NR-101	小皿 (瓦器)	8.6 —	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ 内面：ユビオサエ、ナデ	黒灰色	微／1／砂粒	良好	1/5	
4 NR-101	碗 (瓦器)	— 高台径 4.8	外面：ユビオサエ、ヨコナデ (高台) 内面：ヘラミガキ	灰白色～ 灰色	微／1／砂粒	良好	底部1/2	
8 SE-201	小型甕 (土師器)	11.4 7.8	外面：ヘラミガキ、ハケナデ (6本/cm) 内面：ヘラミガキ、ナデ	淡灰茶色	微／3／長、雲	良好	4/5	底部外面に黒班を有する
9 SE-201	直口甕 (土師器)	14.0 —	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	淡灰茶色	微／2／長	良好	口縁部 1/3	
10 SE-201	甕 (土師器)	14.0 20.9 体部最大径 18.9	外面：ハケナデ (7本/cm)、タタキ (3本/cm)、接合痕1条 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラナデ、 ヘラケズリ、接合痕1条	乳茶灰色 暗茶褐色	多／2／長	良好	4/5	体部外面に煤付着
11 —○	同 上	11.1 16.2 体部最大径 16.3	外面：ヨコナデ、タタキ (5本/cm) 内面：ハケナデ (5本/cm)、ヘラケズ リ	淡茶灰色 明茶灰色	少／2／長、雲	良好	3/5	
12 —○	同 上	13.8 17.6 体部最大径 17.7	外面：ヨコナデ、タタキ (4本/cm)、 ハケナデ (8本/cm)、接合痕1条 内面：ヨコナデ、ハケナデ (6本/cm) ヘラケズリ	黒灰褐色 淡茶褐色	少／4／長、雲	良好	4/5	体部外面に煤付着
13 —○	同 上	13.2 18.0 体部最大径 17.2	外面：ヨコナデ、タタキのちハケナデ (不明瞭)、ハケナデ 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラケズ リ	明茶灰色 淡茶褐色	少／4／長、雲	良好	4/5	体部外面に煤付着
14 —○	同 上	16.8 26.8 体部最大径 24.0	外面：ヨコナデ、ハケナデ (10本/cm) 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラケズ リ、接合痕1条	暗茶褐色 暗茶褐色	少／3／石、長、 雲	良好	3/5	外面に煤付着
15 —○	同 上	14.8 22.6 体部最大径 20.8	外面：ヨコナデ、ハケナデ (10本/cm) 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラケズ リ	暗茶灰 灰茶褐色	少／2／長、雲	良好	4/5	外面に煤付着
16 —○	同 上	16.8 26.8 体部最大径 24.0	外面：ヨコナデ、ハケナデ (10本/cm) 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラケズ リ、接合痕1条	暗茶褐色 淡茶灰色	少／3／石、長、 雲	良好	3/5	外面に煤付着
17 —○	同 上	14.4 —	外面：ヨコナデ、櫛描直線文 (7条) 内面：ヨコナデ	黒灰色 淡灰茶色	少／2／石、角	良好	口縁部 1/2	外面に煤付着 吉備系
18 —○	同 上	17.6 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ (10本/cm)、 櫛描直線文 (8条) 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	淡灰色	多／2／石、長	良好	口縁部 ～肩部 1/3	吉備系
19 —○	同 上	12.4 19.0 体部最大径 17.8	外面：ヨコナデ、ハケナデ (8本/cm)、 櫛描直線文 (8条) 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ、ユビオサ エ	黒茶褐色 淡茶褐色	少／3／石、長	良好	3/5	外面に煤付着 吉備系
20 —○	同 上	14.2 22.5 体部最大径 21.4	外面：ヨコナデ、ハケナデ (10本/cm)、 ヘラナデ、櫛描直線文 (12条) 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ、ユビオサ エ	淡灰黄色 淡黄褐色	少／3／石、長、 雲、角	良好	4/5	外面に煤付着 吉備系
21 —○	小型甕 (土師器)	— — 体部最大径 9.3	外面：ハケナデ (7本/cm) 内面：ユビオサエ、ヘラケズリ、ナデ	淡灰茶色	少／2／長、雲	良好	体部のみ	外面に煤付着
22 —○	同 上	— — 体部最大径 9.6	外面：ヘラナデ後ハケナデ (8本/cm)、 ナデ 内面：ユビナデ後ヘラケズリ	淡茶灰色 ～灰茶色	少／2／雲、長	良好	体部のみ	

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調整・手法	色調 外面 内面	胎土 量/粒度長/鉱物	焼成	遺存度	備考
23 —	小型壺 (土師器) SE-202	7.6 7.8 体部最大径 9.0	外面: ヨコナデ、ハケナデ (5~8本/cm)、接合痕2条 内面: ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラケズリ	茶灰色	少/1.5/長、雲、赤	良好	ほぼ完形	
24 —	同上	7.0 7.8 体部最大径 9.7	外面: ヘラミガキ、ハケナデ (6本/cm) 後ヘラミガキ、ヘラケズリ 内面: ヘラミガキ、ユビオサエ	淡茶灰色	少/1.5/長、雲、チ	良好	ほぼ完形	
25 —	同上	— — 体部最大径 10.0	外面: ハケナデ (8本/cm)、ナデ、ヘラケズリ 内面: ハケナデ (8本/cm)	淡灰茶色 ~ 淡橙灰色	多/3/長、雲、角、チ、赤	良	体部のみ	
26 —	同上	9.2 8.5 体部最大径 9.8	外面: ヨコナデ、ハケナデ (8~9本/cm) 内面: ヨコナデ、ユビナデ後ヘラナデ、ヘラケズリ	茶灰色	多/2/長、雲、角、赤	良好	完形	
27 —	同上	9.0 8.2 体部最大径 9.2	外面: ヨコナデ、ハケナデ (10本/cm) 内面: ヨコナデ、ユビナデ後ヘラナデ、ヘラケズリ	淡橙灰色	多/3/長、雲、角	良好	3/5	体部外面に煤付着
28 —	同上	7.7 8.7 体部最大径 9.6	外面: ヨコナデ、ハケナデ 内面: ヨコナデ、ユビナデ、ヘラナデ	乳灰茶色	少/2/長、雲	良好	完形	底部外面に「+」の ヘラ記号有り 外面に黒斑を有する
29 —	広口壺 (土師器) SE-202	17.6 —	外面: ヨコナデ、ヘラナデ 内面: ヘラミガキ	にぶい 橙色	少/2/長、雲	良好	口縁部 1/6	
30 —	複合口縁壺 (土師器) SE-202	15.2 —	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ、接合痕1条	淡灰茶色	少/1/雲	良好	口縁部 1/4	
31 —	同上	17.8 —	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ	淡灰茶色	少/2/長、雲	良好	口縁部 1/4	内面に黒斑を有する
32 —	複合口縁壺 (土師器) SE-202	24.0 —	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ、ハケナデ	乳茶灰色	少/5/石、長、雲、角	良	口縁部 1/4	
33 —	短頸直口壺 (土師器) SE-202	13.4 —	外面: ヨコナデ、ヘラミガキ 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	淡灰茶色	少/1/長、雲	良好	1/3	体部外面に黒斑を有する
34 —	同上	18.0 — 体部最大径 29.0	外面: ヨコナデ後ハケナデ (6本/cm)、 タタキ (5本/cm) 後一部ハケナデ (6本/cm)、接合痕1条 内面: ヨコナデ後ハケナデ (6本/cm)、 ユビナデ後ハケナデ (8本/cm)、 ヘラケズリ、接合痕1条	茶灰色~ 暗灰茶色	少/3/長、雲、角	良好	1/3	
35 —	同上	17.6 30.3 体部最大径 27.4	外面: ヨコナデ、ナデ、ハケナデ、接合 痕1条 内面: ヨコナデ、ユビナデ後ハケナデ、 接合痕1条	淡灰茶色 ~ 黒灰茶色	多/5/石、長、赤	良好	4/5	外面に黒斑を有する
36 —	甕 (土師器) SE-202	11.2 —	外面: ヨコナデ、ユビナデ、ハケナデ (6本/cm) 内面: ヨコナデ、ヘラナデ	にぶい 橙色 橙色	少/4/長、雲、角、チ	良好	口縁部 1/4	
37 —	同上	13.2 —	外面: ヨコナデ、ハケナデ 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ、接合痕2条	乳茶灰色	少/3/長、雲	良好	口縁部 1/5	
38 —	同上	13.4 —	外面: ヨコナデ、ハケナデ 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	淡灰茶色 淡橙灰色	多/3/長、雲	良	1/4	体部外面に煤付着
39 —	同上	14.4 18.6 体部最大径 19.5	外面: ヨコナデ、ハケナデ (10本/cm) 内面: ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラケズリ、接合痕1条	茶灰色	多/3/長、雲	良	完形	
40 —	同上	13.6 —	外面: ヨコナデ 内面: ヘラナデ	淡茶灰色	多/3/長、赤	良好	口縁部 2/3	
41 —	同上	12.6 —	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	茶灰色 淡茶灰色	少/2/長	良	口縁部 1/7	外面に煤付着
42 —	同上	12.8 —	外面: ヨコナデ、ハケナデ (5本/cm) 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	茶灰色	微/1/長	良好	口縁部 1/3	
43 —	同上	15.2 —	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ	淡橙灰色	少/3/長、雲、赤	良	口縁部 1/6	

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調整・手法	色調 外面 内面	胎土 量／粒度長／鉱物	焼成	遺存度	備考
44 一三	甕 (土師器) SE-202	12.6 —	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	淡茶灰色 茶灰色	少／2／長	良好	口縁部 1/7	
45 同上		14.2 —	外面：ヨコナデ、ヘケナデ 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ	淡茶灰色 乳灰茶色	少／2／長、雲、 チ	良好	3/5	内外面に煤付着
46 同上		12.2 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	淡茶灰色	少／2／長、雲	良好	口縁部 1/4	
47 同上		15.2 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ (6~8本/cm) 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	淡茶灰色	少／2／長、雲	良好	口縁部 1/2	外面に黒斑を有する
48 一三	同上	16.0 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ (8本/cm) 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	灰茶色	少／3／長、雲	良	口縁部 5/6	外面に煤付着
49 一三	同上	16.0 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ (8本/cm) 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	淡灰黄色	少／4／長、雲	良好	1/4	
50 一三	高杯 (土師器) SE-202	16.0 —	外面：ハケナデ (5本/cm) 内面：ヘラミガキ、接合痕3条	淡褐灰色	多／3／石、長、 雲、角、チ、赤 微／2／長、雲	良	杯部 2/3	杯部内面に黒斑を有する
51 同上		16.8 —	外面：ハケナデ (5~7本/cm) 内面：ハケナデ (5~7本/cm)、ヘラナデ	淡茶灰色	微／0.5／雲	良好	杯部 1/3	
52 一三	同上	15.8 —	外面：ヘラミガキ、杯部と柱状部の境目に接合痕1状 内面：ヘラミガキ	茶灰色	微／1.5／長、雲	良好	2/3	外面に煤付着
53 一三	同上	16.0 12.3 12.8	外面：ヘラミガキ、ヘラナデ、ヘラナデ 後ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、ヘラナデ、ハケナデ	茶灰色	微／1.5／長、雲	良好	4/5	杯部外面に煤付着
54 一三	同上	14.4 13.9 11.5	外面：ハケナデ (6~7本/cm) 後ヘラミガキ、ヘラケズリ 内面：ハケナデ (6~7本/cm) 後ヘラミガキ、ユビオサエ	乳灰茶色	少／2.5／長	良好	4/5	杯口縁部内面に黒斑を有する
55 同上		15.8 —	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	淡灰茶色	少／2／長	良好	杯部 1/3	外面に黒斑を有する
56 同上		16.2 —	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	灰白色	少／4／長、雲	良好	杯部 1/4	
57 一四	同上	15.6 —	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	淡灰茶色	少／2／長、雲	良好	杯部 3/5	
58 同上		16.0 —	外面：ユビオサエ後ヨコナデ、ヘラナデ、 杯部と柱状部の境目に接合痕1 条 内面：ヨコナデ、ナデ	暗灰色～ 褐色	少／2／長、雲	良好	杯部 5/6	外面に煤付着
59 一四	同上	17.8 13.5 12.0	外面：ヨコナデ、ナデ、ヘラナデ、接合 痕1条 内面：ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	淡橙灰色 赤	多／2.5／長、雲、 赤	良好	4/5	杯部外面に煤付着
60 同上		— — 11.6	外面：ヘラナデ、ヘラミガキ 内面：ヘラナデ、ユビオサエ	淡灰茶色	少／3／長、雲	良好	脚底部 1/3	
61 一四	同上	— — 11.6	外面：ヘラナデ、ナデ 内面：ユビオサエ後ハケナデ (8本/cm)、ヘラケズリ	淡灰茶色 暗灰茶色	少／2／長、雲、 角	良好	脚底部 のみ	
62 一四	同上	— — 12.2	外面：ヘラナデ、ナデ 内面：ヘラケズリ、ハケナデ (5本/cm)	暗茶灰色 茶灰色	少／2／長、雲、 角	良好	脚底部 のみ	
64 一四	小脛甕 (土師器) SK-201	9.8 5.5	外面：ヘラミガキ、ヘラケズリ、接合痕 1条 内面：ヘラミガキ、ナデ	乳灰茶色 乳灰色	微／2／石、長、 雲	良好	3/5	
65 一四	同上	12.0 6.7	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ 内面：ハケナデ (6地本/cm) 後放射状 ヘラミガキ、ナデ	淡灰茶色	少／2／長、雲、 角	良好	3/5	
66 同上	直口甕 (土師器) SK-201	14.0 —	外面：剥離のため調整不明 内面：ヨコナデ	乳茶灰色	多／4／長、雲	良好	口縁部 1/6	
67 同上		12.0 —	外面：ユビオサエ後ヘラナデ 内面：ヘラナデ	暗茶褐色	多／2／石、長、 雲	良好	口縁部 1/3	
68 同上		18.0 —	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラナデ、ヘラミガキ	淡茶灰色	少／2／長、雲	良好	口縁部 1/2	
69 一四	同上	18.6 —	外面：ヨコナデ後ハケナデ 内面：ヨコナデ後ハケナデ	淡灰茶色	多／3／長、雲	良好	口縁部 1/3	

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調整・手法	色調 外面 内面	胎土 量／粒度長／鉱物	焼成	遺存度	備考
70 一四	直口壺 (土師器) SK-201	17.8 —	外面：ヨコナデ後ハケナデ（8本/cm）、 ハケナデ 内面：ヨコナデ後ハケナデ（8本/cm）、 ユビオサ工後ヘラケズリ、接合痕 1条	淡灰黄色	少／5／長、雲	良好	1/3	
71	甕 (土師器) SK-201	14.2 —	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	淡灰色	少／1／長、雲、 角	良好	口縁部 1/5	外面に煤付着
72	同上	15.0 —	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ後ハケナデ	淡灰黄色	少／2／石、長、 雲	良好	口縁部 1/6	外面に黒斑を有する
73	同上	13.0 —	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、接合痕1条	乳灰色～ 灰褐色	微／0.5／石、長	良好	口縁部 1/3	
74	同上	13.0 —	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	淡灰茶色	少／1／石、長、 雲、角	良好	口縁部 1/4	外面に煤付着
75	同上	12.2 —	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	乳茶灰色	少／3／長、雲	良好	口縁部 1/6	口縁部外面に煤付着
76 一五	同上	12.4 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ、接合痕1条 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	乳茶灰色	少／3／長、雲	良好	口縁部 1/3	
77	同上	11.4 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ（7本/cm） 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	乳茶黄色	少／2／長、雲	良好	口縁部 1/4	
78	同上	10.6 13.1 体部最大径 13.0	外面：ヨコナデ、ハケナデ（8本/cm）、 肩部にヘラ刻み目を施す 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	淡灰茶色	少／3／石、長、 雲	良好	3/5	
79	同上	15.6 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ（11本/cm）、 接合痕1条 内面：ヨコナデ、ハケナデ（9本/cm）、 ユビナデ	淡茶灰色	少／3／石、長、 雲	良好	1/4	外面に煤付着
80	同上	14.2 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ（6本/cm） 内面：ハケナデ、ヘラケズリ	淡灰黄色～ 暗灰褐色	少／1／石、長、 雲	良好	口縁部 1/4	外面に煤付着
81 一五	同上	14.4 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ（12本/cm） 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	淡灰茶色 暗褐色	微／1／石、長、 雲	良好	1/3	外面に煤付着
82	小型鉢 (土師器) SK-201	9.8 —	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	乳灰茶色 灰黄色	微／1／石、長	良好	2/3	内外面に黒斑を有する
83	同上	15.2 —	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	明茶灰色 淡灰茶色	微／1／長、雲、 赤	良好	3/5	内外面に黒斑を有する
84 一五	同上	17.4 —	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	明茶灰色 ～暗灰色	微／1／長	良好	口縁部 1/4	
85	同上	16.4 —	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	淡灰色	微／1／長、雲	良好	1/4	
86 一五	器台 (土師器) SK-201	9.0 8.8 底径 11.7	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、ヘラケズリ接合痕1 条	暗灰茶色～ 明茶灰色	微／0.5／長、雲	良好	3/5	外面に煤付着
88	器台 (土師器) SK-203	10.7 —	外面：ハケナデ（5本/cm）、ヘラミガ キ、脚部に透光の痕跡有り 内面：ナデ、ヘラケズリ	淡灰茶色	多／3／長、雲 角	良好	1/4	
89	甕 (土師器) SK-204	— 底径 4.2	外面：タタキ 内面：ヘラナデ	淡灰茶色	少／2／長、雲、 角	良好	底部のみ	
90	同上	— 底径 4.4	外面：ナデ 内面：ナデ	淡茶灰色 暗灰色	多／5／長、雲、 赤	良好	底部1/2	
91	同上	13.2 —	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	淡褐灰色 明茶褐色	少／2／長、雲	良好	口縁部 1/6	
92 一五	高杯 (土師器) SK-204	21.6 —	外面：ハケナデ（6～9本/cm） 内面：ハケナデ（6～9本/cm）	明茶灰色	少／3／長、雲	良好	杯部1/3	
93	甕 (土師器) SK-205	12.0 —	外面：ヨコナデ 内面：ハケナデ（5本/cm）	暗灰茶色～ 淡灰茶色	少／1／長、雲	良好	口縁部 1/6	
94	甕 (土師器) SP-207	— 底径 3.6	外面：タタキ（4本/cm）、底部は凹底 を呈する 内面：ナデ	暗褐色 暗灰茶色	微／4／長、雲、 角	良好	底部のみ	
95	高杯 (土師器) SP-210	— —	外面：ハケナデ、ナデ 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	淡茶灰色	少／3／長、雲、 角	良好	脚柱部のみ	外面に煤付着

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調整・手法	色調 外面 内面	胎土 量／粒度長／鉱物	焼成	遺存度	備考
96 SP-220	高杯 (土師器)	— 底径 17.8	外面：ヘラミガキ、ハケナデ(8本/cm)、脚部に四方孔を穿つ 内面：ヘラナデ、ハケナデ(10本/cm)	淡灰茶色 暗茶灰色	微／1／石、長、雲	良好	脚底部 1/4	
97 SD-201	甕 (弥生土器)	— 底径 4.4	外面：タタキ 内面：ヘラナデ	淡灰茶色	少／5／長、雲	良好	底部のみ	背面に黒斑を有する
98	同上	— — 底径 4.2	外面：タタキ(3本/cm)、底部は凹底 を呈する 内面：ヘラナデ	淡灰茶色	少／5／長、雲	良好	底部のみ	
99	同上	12.0	外面：ヨコナデ 内面：ハケナデ(5本/cm)	暗灰茶色～ 淡灰茶色	少／1／長、雲	良好	口縁部 1/6	外面に煤付着
100	同上	14.2	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ後ハケナデ、ヘラケズリ	淡灰褐色	少／3／長、雲、角	良好	口縁部 1/4	内外面に煤付着
101	同上	14.8	外面：ヨコナデ、ハケナデ 内面：ハケナデ(7本/cm)、ヘラケズリ	乳灰茶色	少／3／長、雲、角	良好	口縁部	口縁部外面に煤付着
102	同上	22.0	外面：ヨコナデ 内面：ハケナデ(8本/cm)	淡灰茶色 乳灰茶色	多／3／石、長、赤	良好	口縁部 1/6	
103 SO-201	複合口縁甕 (土師器)	16.4 —	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	淡茶灰色	微／0.5／長、雲	良好	口縁部 1/6	
104 SW-301	甕 (弥生土器)	12.8 17.6 体部最大径 15.9 底径 4.8	外面：ヨコナデ、タタキ(4本/cm)、接合痕2条 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、接合痕1条	淡茶褐色	多／5／石、長、雲、赤	良好	4/5	
105 一五	同上	15.3 20.7 体部最大径 18.1 底径 4.3	外面：ヨコナデ、タタキ(5本/cm)、接合痕3条、底部はやや凹底を呈する 内面：ヨコナデ、ヘラナデ、接合痕1条	明茶灰色 灰黑色	多／2／石、長、雲、赤	良	ほぼ完形	
106 一五	同上	14.8 21.8 体部最大径 18.9 底径 4.5	外面：ヨコナデ、タタキ(4本/cm)、接合痕3条 内面：ヨコナデ、ヘラナデ、接合痕2条	明茶灰色 灰黑色	多／5／長、雲、赤	良好	2/3	外面に煤付着
107 一五	同上	17.4 — 体部最大径 19.0	外面：ヨコナデ、タタキ(3本/cm)、接合痕1条 内面：ヨコナデ、ヘラナデ、接合痕1条	淡茶灰色	多／4／長、雲	良好	1/4	外面に煤付着
108 一五	同上	— — 底径 4.4	外面：タタキ(3本/cm) 内面：ヘラナデ	淡茶灰色	多／4／石、長、雲、赤	良好	底部のみ	
109 一六	高杯 (土師器) SW-301	— — 据径 12.4	外面：ナデ、裾部に三方孔を穿つ 内面：ナデ	明茶褐色	多／4／石、長、雲、赤	良好	底部1/3	
110 須恵器 第3層	杯蓋	13.0 —	外面：回転ヘラケズリ、回転ナデ 内面：回転ナデ	暗灰色	密	良好	口縁部～ 天井部 1/6	
111	同上	15.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	淡灰色 淡青灰色	密	良好	口縁部 1/6	
112	同上	15.0 —	同上	淡青灰色	密	良好	口縁部 1/6	
113 一六	杯身 (須恵器) 第3層	9.1 5.4 立ち上がり高 1.8 受部径 12.4	外面：回転ヘラケズリ、回転ナデ 内面：回転ナデ	暗灰色	少／4／砂粒	良好	ほぼ完形	
114	同上	10.0 — 立ち上がり高 1.6 受部径 12.2	外面：回転ヘラケズリ、回転ナデ 内面：回転ナデ	淡青灰色	密	良好	1/8	
115	同上	13.2 — 立ち上がり高 1.3 受部径 15.2	同上	暗灰色	密	良好	1/4	

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調整・手法	色調 外面 内面	胎土 量/粒度長/鉱物	焼成	遺存度	備考
116 （須恵器） 第3層	杯身 （須恵器） 高台径 9.8 高台高 0.5	— — 高台径 8.8 高台高 0.5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	暗灰色	密	良好	底部 1/4	
117	同上	— — 高台径 8.8 高台高 0.5	同上	暗灰色	密	良好	1/4	
119 （土師器） 第3層	盤 （土師器） 高台径 21.0 高台高 0.4	— — 高台径 27.8	外面：ナデ 内面：ナデ	乳灰色暗 灰茶色	少／1／砂粒	良好	底部 1/5	
120 （土師器） 第3層	羽釜 （土師器） 鍔径 27.8	— — 鍔径 33.8	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ 内面：ユビオサエ、ナデ	茶褐色	少／5／砂粒	良好	鍔部 1/6	
121	同上	— — 鍔径 33.8	同上	淡茶褐色	少／4／砂粒	良好	口縁部 1/6	
127 （土師器） 一六 第4層	甕 （土師器） —	13.4 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ（7本/cm）、接合痕2条 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ、接合痕2条	乳灰褐色 乳灰茶色	少／3／石、長、雲	良好	口縁部～ 体部 1/2	東海系
128 （土師器） 第4層	高杯 （土師器） —	10.4 —	外面：ヘラナデ、接合痕1条 内面：ヘラナデ	茶灰色	少／2／長、雲	良好	口縁部 1/3	外面に黒斑を有する
129	同上	10.6 —	外面：ヘラミガキ、沈線1条を巡らす、接合痕1条 内面：ナデ	明灰茶色	少／3／長、雲	良好	杯部 1/3	
130 一六	同上	22.2 —	外面：ヘラミガキ（底部付近はヘラケズ リ） 内面：ヘラミガキ	淡褐灰色	少／4／雲、チ	良	杯部のみ ほぼ完形	外面に黒斑を有する
131 一六	同上	20.2 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ（7本/cm） 内面：ヨコナデ、ハケナデ（7本/cm）、ナデ	淡褐灰色	多／3／長、雲	良	杯部 1/4	
132 一六	同上	— — 裾径 15.2	外面：ヘラナデのちヘラミガキ、ヘラミ ガキ、裾部に四方孔を穿つ 内面：ナデ、ユビオサエ後ハケナデ（8 本/cm）、接合痕1条	淡灰色 明褐色	少／2／雲、角	良	脚部 1/2	
133 一六	器台 （土師器） 第4層	— — 裾径 10.8	外面：ヘラミガキ、裾部に三方孔を穿つ 内面：ハケナデ（4～5本/cm）	淡灰褐色	少／5／長、雲	良好	脚部のみ	
134 一六	同上	10.4 9.9 裾径 11.3	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ、脚部に三 方孔を穿つ 内面：ヘラミガキ、ユビオサエ、ナデ	茶灰色	少／3／長、雲、角	良	ほぼ完形	
135	同上	— — 底径 12.0	外面：ナデ、ユビオサエ 内面：ユビナデ後ヘラナデ	褐灰色	少／2／長、雲、赤	良好	脚部 1/2	
136 一七	小型鉢 （土師器） 第4層	— — 底径 2.9	外面：ナデ、ユビオサエ、平底を呈する 内面：ヘラナデ	淡褐灰色 淡茶灰色	少／3／長、雲	良	底部のみ	外面に黒斑を有する
137 一六	同上	9.6 6.2 底径 2.5	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ、や や平底を呈する 内面：ヨコナデ、ヘラナデ、ユビオサエ	淡茶灰色 ～褐灰色	少／3／長、雲	良好	3/4	
138 一七	鉢 （土師器） 第4層	12.0 7.7	外面：ヨコナデ、ナデ、やや丸底を呈す る 内面：ヨコナデ、ヘラナデ、ユビオサエ	淡灰褐色 ～褐灰色	少／2.5／角、チ、赤	良	4/5	
139 一七	同上	17.3 8.0 底径 3.4	外面：ヨコナデ、ヘラナデ、やや凹底を 呈する 内面：ヨコナデ、ヘラナデ	乳灰褐色	少／4／長、雲、角	良好	1/2	外面に黒斑を有する
140 一七	鉢 （土師器） 第4層	13.4 5.0	外面：ユビオサエ後ハケナデ、（7本/ cm）、やや丸底を呈する 内面：ユビオサエ後ハケナデ（7本/cm）	褐灰色 茶灰色	多／3.5／石、長、雲、角、赤	良	ほぼ完形	外面に黒斑を有する
141	同上	16.0 —	外面：ハケナデ 内面：ヘラナデ	淡茶褐色	多／3／長、雲	良好	口縁部～ 体部 1/4	

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調整・手法	色調 外面 内面	胎土 量/粒度長/鉱物	焼成	還存度	備考
142	鉢 (土師器) 第4層	28.0 —	外面: ヘラミガキ、接合痕2条 内面: ヘラナデ、接合痕1条	茶灰色	多/3/長、雲、角、赤	良好	口縁部 1/8	
143	同上	33.4 —	外面: ヘラミガキ、ヘラナデ後ヘラミガ キ 内面: ヘラミガキ、ハケナデ	茶灰色 暗灰茶色	少/4/長、雲	良好	口縁部 1/6	
144	小型鉢 (土師器) 第5層	10.6 —	外面: ヨコナデ、ヘラナデ 内面: ヨコナデ、ヘラナデ	淡褐色 淡灰茶色	多/4/石、長、角	良好	1/4	口縁部内面に黒斑を 有する
145	直口壺 (土師器) 第5層	16.8 —	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ	淡黃灰色	少/3/石、雲	良	口縁部 1/6	外面に黒斑を有する
146 — 一七	同上	12.4 —	外面: ヘラナデ 内面: ヘラミガキ	褐灰色	多/2/長、角、赤	良好	口縁部 5/6	
147	広口壺 (土師器) 第5層	15.2 —	外面: ヨコナデ、ヘラナデ 内面: ヨコナデ	淡褐色	多/2/長、角	良好	口縁部 1/3	
148	同上	17.6	外面: ヨコナデ、ハケナデ (6本/cm) 内面: ヨコナデ	淡褐色	少/3/長	良好	口縁部 1/6	
149 — 一七	同上	14.6 —	外面: ヨコナデ、ハケナデ、接合痕1条 内面: ヨコナデ、ヘラナデ	茶灰色 暗灰茶色	少/2/長、雲、 チ	良好	口縁部 1/2	口縁部内面に黒斑を 有する
150 — 一七	複合口縁壺 (土師器) 第5層	17.6 —	外面: ヘラミガキ、波状文(不明瞭)お よび円形浮文を2段に巡らす 内面: ヘラミガキ、波状文(不明瞭)を 巡らす	褐灰色	少/2/長、雲	良好	口縁部 1/6	
151	同上	26.8	外面: ヨコナデ後ハケナデ (7本/cm) 内面: ヨコナデ後ハケナデ (7本/cm)	乳褐色	少/2/長、雲	良好	口縁部 1/2	口縁部内面に黒斑を 有する
152	壺 (土師器) 第5層	— — 底径 3.2	外面: ハケナデ (7本/cm) 内面: ヘラナデ、ユビオサエ	暗灰茶色 黑灰色	少/1.5/長、雲	良好	底部のみ	内面に煤付着
153 — 一七	甕 (土師器) 第5層	14.0 — 体部最大径 13.7	外面: ヨコナデ、タタキ (3本/cm)、 接合痕1条 内面: ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラナデ、 接合痕1条	淡茶灰色 ~暗褐色	少/5/長、雲	良好	1/3	
154 — 一七	同上	14.2 — 体部最大径 13.6	外面: ヨコナデ、タタキ (4本/cm)、 接合痕1条 内面: ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラナデ、 接合痕2条	暗灰茶色	少/3/長、雲	良好	1/4	体部外面に煤付着
155 — 一七	同上	14.8 9.9	外面: ヨコナデ、タタキ (3本/cm) 内面: ヘラナデ、接合痕1条	茶灰色	少/2/雲、角	良好	1/3	体部外面に黒斑を有 する
156	同上	14.0 —	外面: ヨコナデ、タタキ (4本/cm) 内面: ユビオサエ、ヘラナデ、接合痕1 条	乳灰色	少/2/長、雲	良好	口縁部~ 体部 1/6	外面に煤付着
157	同上	14.2 —	外面: ヨコナデ、タタキ、接合痕1条 内面: ヨコナデ、ヘラミガキ、接合痕1 条	淡灰茶色 明褐色	多/3/長、雲	良好	口縁部~ 体部 1/3	
158	同上	12.8 —	外面: ヨコナデ、タタキ 内面: ヨコナデ、ヘラナデ、接合痕3条	明茶褐色 淡茶灰色	多/3/長、雲	良好	口縁部~ 体部 1/3	
159	同上	14.0 —	外面: ヨコナデ、タタキ (3本/cm) 内面: ユビオサエ、ナデ、接合痕1条	明褐色	少/3/長、雲、 角	良好	口縁部肩部 1/5	
160	同上	14.0 —	同上	淡茶灰色 明茶灰色	少/3/長、雲	良好	口縁部~ 肩部 1/4	
161	同上	13.8 —	外面: ヨコナデ、タタキ (4本/cm) 内面: ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラナデ、 接合痕1条	淡茶褐色	少/3/長、雲	良好	口縁部~ 肩部 1/4	
162	同上	20.6 —	外面: ヨコナデ、タタキ (3本/cm)、 接合痕1条 内面: ヨコナデ、ヘラナデ、接合痕1 条	淡茶灰色	少/3/長、雲、 角、赤	良好	口縁部~ 肩部 1/5	
163	同上	16.0 —	外面: ヨコナデ、ユビナデ後ヘラナデ、 タタキ (4本/cm)、接合痕1条 内面: ヨコナデ、ユビオサエ、接合痕1 条	暗灰色~ 暗茶灰色	多/5/長、雲	良好	口縁部 1/5	
164	同上	16.8 —	外面: ヨコナデ、タタキ (4本/cm) 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	茶褐色	多/3/長、雲	良好	口縁部 1/6	

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調整・手法	色調 外面 内面	胎土 量／粒度長／鉱物	焼成	遺存度	備考
165 (土師器) 第5層		12.2 —	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ユビオサエ	暗茶灰色	少／3／長、雲、角	良好	口縁部 1／2	
166	同上	14.4 —	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、ナデ	茶灰色	少／4／雲、角、チ	良好	口縁部 1／2	外面に黒斑を有する
167	同上	16.3 —	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	淡灰茶色 乳灰色	少／4／長、雲	良	口縁部 1／4	
168	同上	13.6 —	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、接合痕1条 内面：ヘラナデ、接合痕1条	乳灰色	少／2／長、雲	良好	口縁部 1／5	
169	同上	13.8 —	外面：ヨコナデ、ヘラナデ 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	明褐色～ 乳褐色	少／4／長	良好	口縁部 1／6	
170	同上	16.0 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ(7本/cm) 接合痕1条 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	茶灰色 灰茶色	少／4／長、雲、角	良好	口縁部～ 肩部 1／3	
171	同上	14.0 —	外面：ヨコナデ、接合痕1条 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	灰茶色 暗灰色	少／3／長、雲	良好	口縁部 1／6	外面に煤付着
172	同上	13.6 —	外面：ヨコナデ、ユビオサエ後ヨコナデ、 接合痕1条 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラナデ、 接合痕2条	乳灰茶色	少／2／長、雲	良好	口縁部～ 肩部 1／6	
173	同上	20.6 —	外面：ヨコナデ 内面：ハケナデ(8本/cm)、接合痕1条	灰黄褐色	少／2／石、雲	良好	口縁部 1／4	
174	同上	— 底径 3.4	外面：タタキ、突出する凹底を呈する 内面：ヘラナデ	淡茶灰色 黒灰色	少／3／長	良好	底部のみ	
175	同上	— 底径 4.6	外面：タタキ(3本/cm)、ユビオサエ、 突出するやや凹底を呈する 内面：ヘラナデ	淡褐灰色	少／2／長、雲	良好	底部のみ	
176	同上	— 底径 4.2	同上	暗灰褐色	少／2／長、雲	良好	底部のみ	
177	同上	— 底径 4.3	外面：タタキ(3本/cm)、突出するや や凹底を呈する 内面：ヘラナデ	茶灰色 暗灰茶色	少／3／長、雲、 角	良好	底部のみ	
178	同上	— 底径 4.2	同上	淡灰茶色 暗灰色	少／5／長、雲	良好	底部のみ	
179	同上	— 底径 4.0	同上	暗茶色 淡灰茶色	少／5／雲	良好	底部のみ	
180	同上	— 底径 2.6	外面：タタキ、やや突出する平底を呈す る 内面：ヘラナデ	淡灰褐色 茶褐色	少／4／雲、チ	良好	底部のみ	外面に黒斑を有する
181	同上	— 底径 4.2	外面：摩滅のため調整不明、突出する平 底を呈する 内面：ヘラナデ	茶灰色	少／3／長、雲、 赤	良好	底部のみ	底部外面に初圧痕有 り
182	同上	— 底径 4.4	外面：タタキ(3本/cm)、突出する平 底を呈する 内面：摩滅のため調整不明	褐灰色	少／4／長、雲、 角、赤	良好	底部のみ	
183	同上	— 底径 2.9	外面：タタキ(3本/cm)、平底を呈す る 内面：ヘラナデ	淡茶灰色 淡灰色	多／5／長、角、 チ	良好	底部のみ	外面に黒斑を有する
184	同上	— 底径 4.2	外面：エビオサエ、ナデ、接合痕1条、 突出する平底を呈する 内面：ユビオサエ後ナデ	暗灰茶色 黒灰色	多／3／長、チ	良好	底部 1／2	外面に黒斑を有する
185	同上	— 底径 3.6	外面：ナデ、接合痕1条、平底で底部穿 孔 内面：ヘラナデ	明褐色	少／5／雲	良好	底部のみ	
186	同上	— 底径 4.2	外面：ナデ、接合痕1条、突出する平底 で底部穿孔 内面：ヘラナデ	褐灰色	少／5／長、雲	良好	底部のみ	

第4節 小結

本調査区では、古墳時代初頭（庄内式古相）・古墳時代前期（布留式古相）・中世（鎌倉時代後期～室町時代前期）の概ね3時期に亘る遺構および遺物を検出することができた。

古墳時代初頭の遺構面としては、調査区中央より南寄りのI区・J区間で住居址を暗示する小穴6個を検出したが狭小な調査区でもあり、建造物復元までは至らなかった。次の前期に入ると、ほぼ調査区内全域に集落を構成する遺構が現われる。しかし、初頭と同様に前期の遺構面でも柱穴を暗示する小穴がみられるが、面的な事情から建物跡を見出せない。該期において特筆すべき遺構に、丸太の刳抜き井戸があり、井戸内に投棄された吉備産の数個の甕も含め集落構造の実態に一考をうながす。遺物ではSK-201内出土の「布巻具」があり、該期の機織り技術の一端を知るうえで貴重な資料と言える。中世の遺構として数条の耕作溝を検出したが、これは畝溝というよりは周辺における既往の調査から水田内の排水用として掘られた可能性が高い。また、調査区北端で検出した自然河道は、近隣の調査で見つかっている該期の水田を覆う洪水層と時期的・層位的に合致するものである。

(註)

(註1) 原田昌則 1993.3 「II 久宝寺遺跡第1次調査（KH84-1） 第3節 2）出土遺物」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告37

※第25次調査も含め、本報告では中河内地域における古墳時代初頭（庄内式期）～前期（布留式期）のいわゆる古式土器については、氏の器種分類ならびに編年を基とした。

(註2) 尾上実 1983 「南河内の瓦器椀」『古文化論集（藤澤一夫先生古稀記念論集）』

(註3) 宇野隆夫 1982 「井戸考」『史林 六五卷五号』

(註4) 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎 1943 『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第一六冊

(註5) 竹内晶子 1985.10 「8 紡織具と製品 2. 織機」『弥生文化の研究 第5卷 道具と技術 I』<編集>金闇恕／佐原眞雄山閣出版株式会社

(註6) 田辺昭三 1966.4 『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ

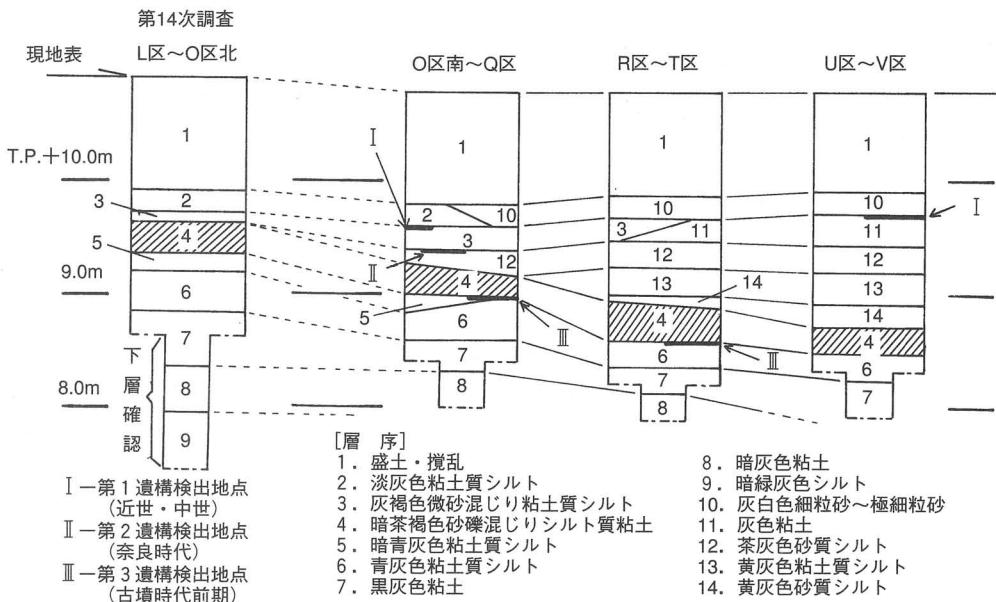
第4章 第25次調査の成果

第1節 基本層序

基本層序については、前回の第14次調査結果とほとんど大差なく、層位番号と層名も第14次調査と対応するものはそのまま使用した。ここでえて細分すれば、第14次調査で検出した中世期の遺物包含層（第2層）を当該期の洪水層（第10層）と思われる砂層の堆積がO区南・P区間付近から切り込み、調査区南端まで全域を覆っている状況が窺える。また、S区から調査区南端に向かってはその洪水によって埋没したと思われる水田耕土（第11層）を確認した。また、O区南～Q区間では奈良時代の遺構ベース層となる堆積層（第12層）を確認した。さらに第14次調査からみられる古墳時代前期（布留式期）の遺物包含層（第4層）の層高を第14次調査結果を含めて模式図からみた場合、最も高いレベルに位置するのがL区～O区間であり、そこを頂点として北部（A区～D区）および南部（U区～V区）へ向かうほど緩やかに低くなっている、山形状の曲線を描く。その高低差は1.0m前後を測る。以上が時期別にみた堆積層の概略であるが、その考察については「第5章　まとめ」の項で述べることとし、ここでは第14次調査で摘出した第1層～第9層を除く第10層～第14層の5層について列記する。

第10層：灰白色細粒砂～極細粒砂。層厚0.1～0.15m。中世期における河川の洪水層と考えられる。

第11層：灰色粘土。層厚0.1～0.2m。中世期に洪水によって埋没した水田の耕土にあたる



第29図 基本層序模式図

土層で、調査区南端のV区では畦畔を検出した。

第12層：茶灰色砂質シルト。層厚0.15m前後。O区南～Q区間では奈良時代の遺構ベース層となる。

第13層：黄灰色粘土質シルト。層厚0.2m前後。

第14層：黄灰色砂質シルト。層厚0.05～0.1m。

第2節 検出遺構と出土遺物

調査の結果、近世井戸・中世の水田域・奈良時代の集落域・古墳時代前期（布留式期）の集落域の4時期に亘る遺構面を検出した。各時代の遺構内容は、近世が井戸1基、中世が畦畔1条、奈良時代が土坑1基（SK-201）・柱穴1個（SP-201）・溝2条（SD-201・202）、古墳時代前期が小穴7個（SP-301～SP-307）・落ち込み1箇所（SO-301）である。以下各遺構面について記す。

<第1遺構面>

-近世-

井戸（SE）

SE-001

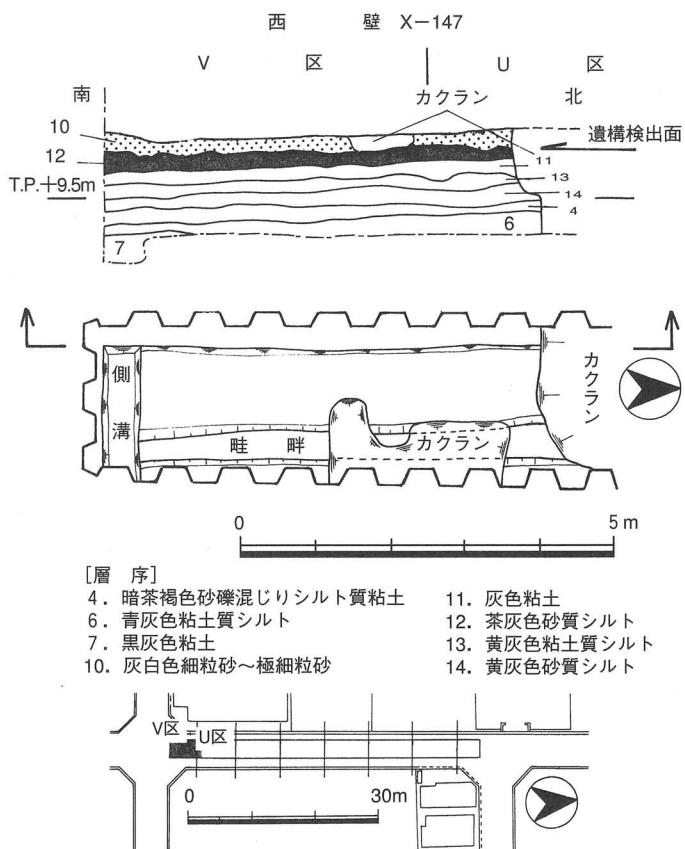
調査区北端O区南で、近世井戸1基を検出した（※第33図参照）。底板を打ち抜いた桶を井戸側とするもので、本来の掘り形を含む上位部分は現代の道路築造の際に削平されている。井戸側内に落ち込んでいた平瓦（瓦磚）の破片から、桶枠の上にそれら数枚が組まれていたものと思われる。桶枠の下にはさらに1段ないし2段以上の同等の桶枠が存在するものとみられるが、検出地点に民家が隣接しているため2段目以下を掘削することは土質状問題があるということで断念し、調査可能な範囲で確認するに止まった。掘り形の平面形状は検出状況から推察して径1.5m～2.0mを測る円形を呈するものと思われる。井戸側内および掘り形内埋土については第33図に示すとおりである。桶の法量は径0.8m・高さ0.95mを測り、外面には上部と下部に1条ずつタガの痕跡が認められる。遺物は井戸側内から伊万里系の染付磁器や唐津の碗の破片が僅かに出土したほか、唯一図化できたものとして古墳時代の混入とみられる高杯の底脚部（188）がある。

-中世-

調査区南端U区～V区間で水田畦畔を1条検出した。水田耕土および上層の砂層内に含まれる土師器・瓦器碗の破片の形態から鎌倉時代後期～室町時代前期頃に河川の洪水によって埋没したものと考えられる。畦畔は南北にはほぼ直線的に伸び、北部は既設の埋設物によって攪乱・



第30図 SE-001
出土遺物実測図



第31図 第1遺構検出地点および遺構平・断面図

削平されており、南部は調査区外に至っている。検出規模は、南北長5.5m・東西幅の下端0.65m・上端0.4m・高さ0.1m前後を測る。断面は台形を呈する。畦畔および水田面には、足跡らしき窪みが僅かながらにみられる。

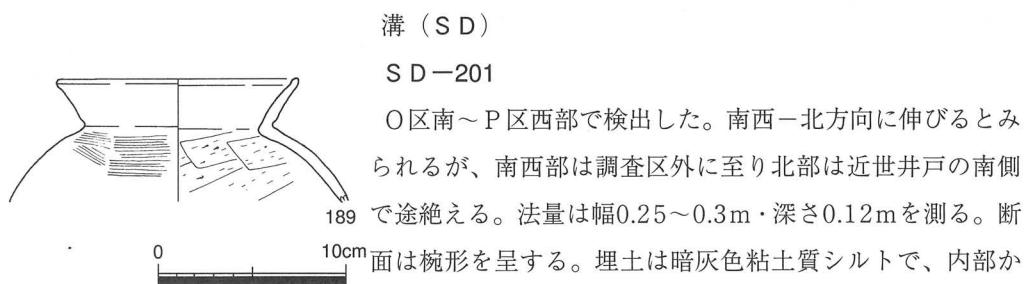
<第2遺構面>

奈良時代

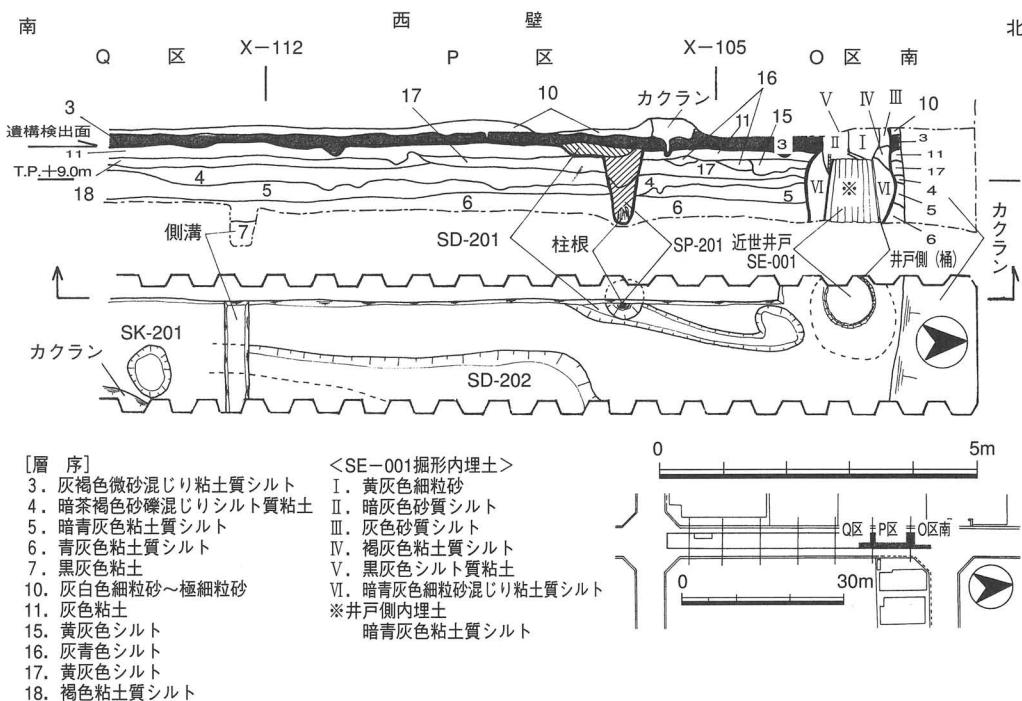
土坑 (SK)

SK-201

Q区西部で検出した。平面形状は東西にやや長い楕円形を呈する。法量は長径0.8m・短径0.68m・深さ0.28mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は上層が灰褐色砂質シルト・下層が暗灰色粘土質シルトの2層に分層できる。遺物は下層から古式土師器および須恵器の小破片が出土したが図化できるものはなかった。



第32図 SD-201出土遺物実測図 1点 (189) が出土した。建物住居を構成する柱穴 S P-201との位置関係から有機的関係が示唆される。



第33図 第2遺構検出地点および遺構平・断面図（※SE-001→近世井戸）

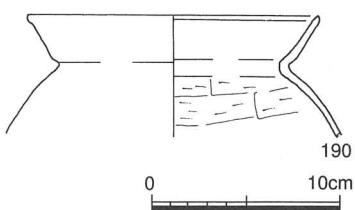
SD-202

遺構の東肩が上層の中世の耕作によって削平されたものか、明確な輪郭が把握できず全容は不明である。平面の状況からみて東から屈曲して南へ伸びていたものと推測される。埋土は暗灰色粘土質シルトで、内部からは土師器甕・須恵器杯の破片が少量出土した。

柱穴 (SP)

SP-201

SD-201内西壁沿いで検出した。遺構の西側は鋼矢板打設の際に破壊されたが、平面の形状は検出状況から推定してほぼ円形を呈するものと思われる。法量は推定で径0.6m前後・深さは1.2mを測る。埋土は上層が茶灰色粘土質シルト・下層が暗茶灰色シルト質粘土の2層に分層できる。断面の形状はU字形を呈する。最深部には、径15cm・長さ25cmの柱根が遺存しており、その周囲には柱の固定あるいは腐敗を防ぐためのものか径10cm前後の礫が4個敷き詰められていた。柱根以外の遺物では、下層から須恵器高杯・杯の破片ほか混入品とみられる布留式甕(190)が出土した。

第34図 SP-201
出土遺物実測図

第6表 第3遺構面 小穴(SP)法量一覧表

遺構番号	地区	短径-長径(cm)	深さ(cm)	平面形	断面形
S P-301	P区	最大径53	22	不明	半円形
S P-302	P区	最大径42	15	不明	楕形
S P-303	P~Q区	82-96	14	不定形	楕形
S P-304	Q区	44-60	10	椭円形	半円形
S P-305	Q区	30-44	4	椭円形	皿形
S P-306	Q区	28-42	6	不明	皿形
S P-307	Q区	最大径34	12	円形	楕形

<第3遺構面>

古墳時代前期

小穴(S P)

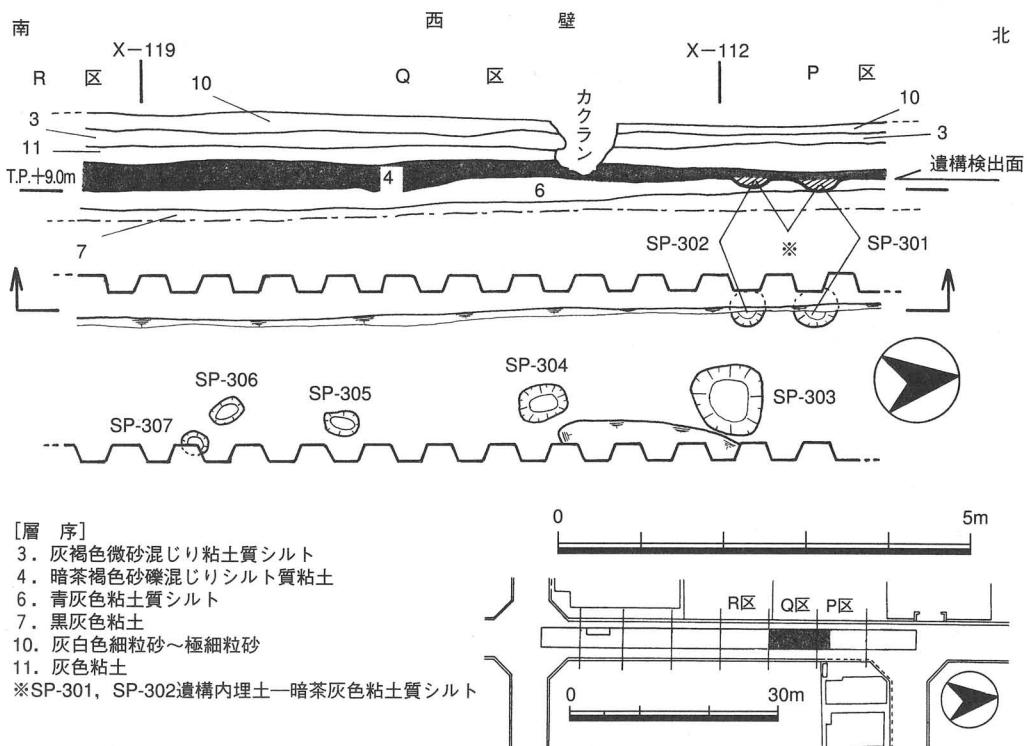
P区南部~Q区にかけて

総数7個(S P-301~S

P-307)を検出した。これ

らのなかには、S P-301・

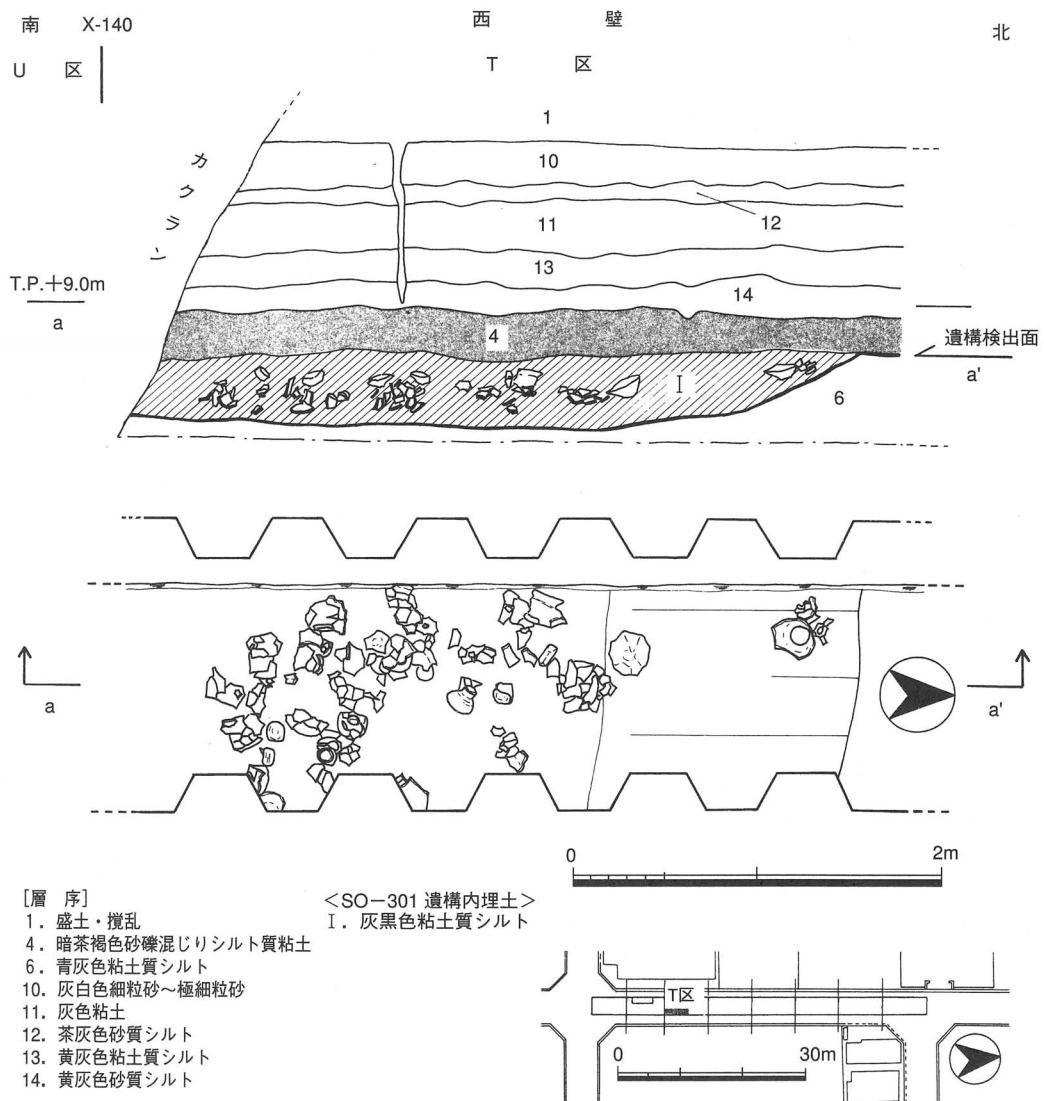
302から柱根跡、S P-303・304から柱材の一部とみられる木片等々が確認されることから、建物住居を構成する遺構と判断されるが、調査区の面的な制約もあり復元までには至らなかった。小穴内の埋土はすべて暗茶灰色粘土質シルトの単一層である。遺物はS P-301~S P-303の3個から古式土師器の小破片が少量出土したが、図化できる遺物はなかった。この複数の小穴群は、北部の第14次調査で検出した集落の最南端部に位置する建物を示唆するものと思われる。本地区より南部では落ち込みS O-301を除いては、住居跡を示すような柱穴はみられない。なお、個々の法量・形状等については第6表に掲載した。



第35図 第3遺構検出地点および遺構平・断面図 I

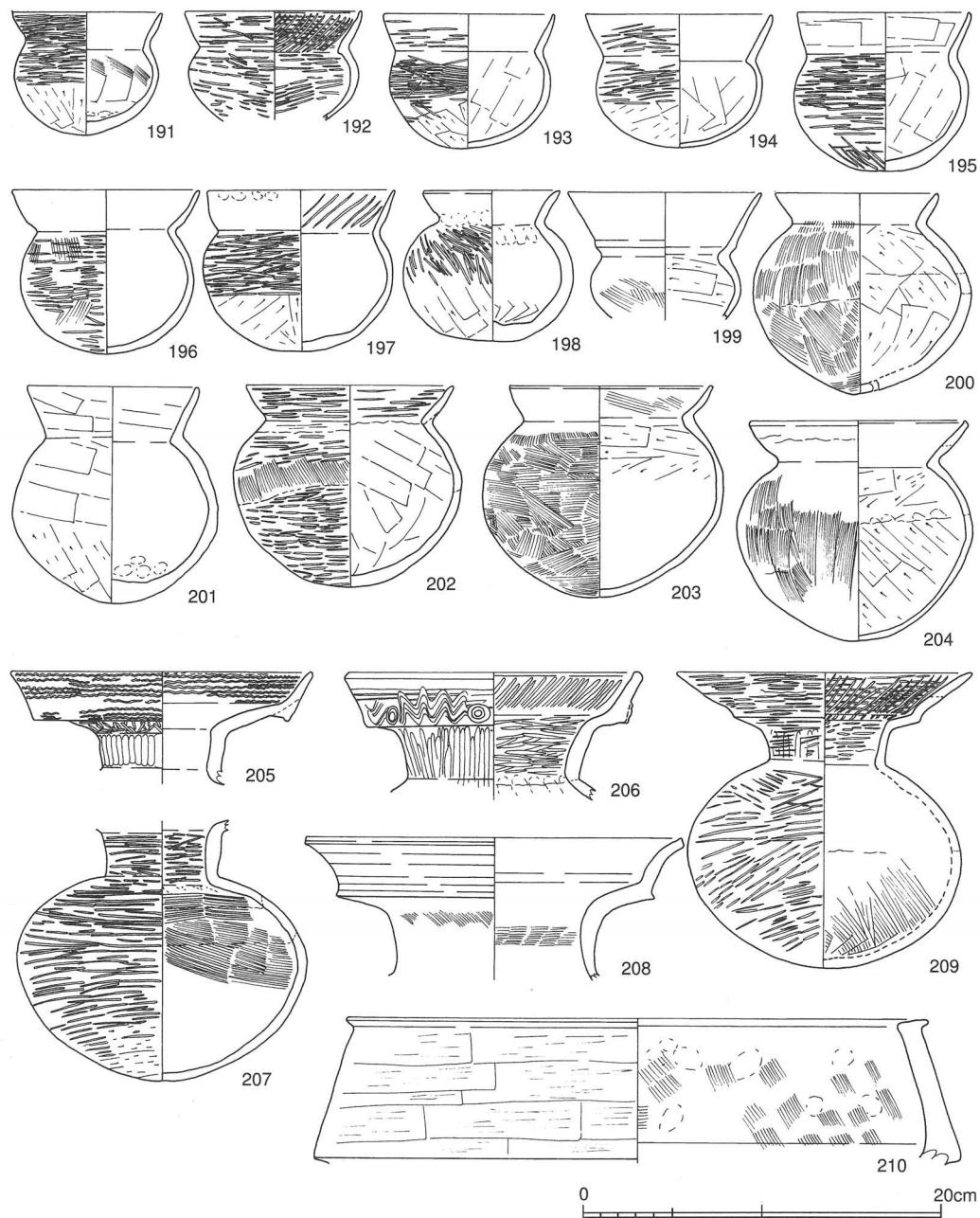
落ち込み (SO-301)

T区南部で検出した。検出規模は南北長3.9m・東西長は調査区幅(1.7m)を越える。深さは最深部で0.4mを測る。埋土は灰黒色粘土質シルトで、炭化物が混入する。狭小な調査区の為、性格的に不明なところは多いが、遺構・遺物の検出状況から「土器捨て場」であったと推察される。また、遺構岸の緩やかな傾斜や埋土内に植物遺体が混入していること、さらに下層の壁面に滯水の痕跡が窺えることから、人為的に掘られたというより池状を呈していた土地を利用したものではないかと思われる。

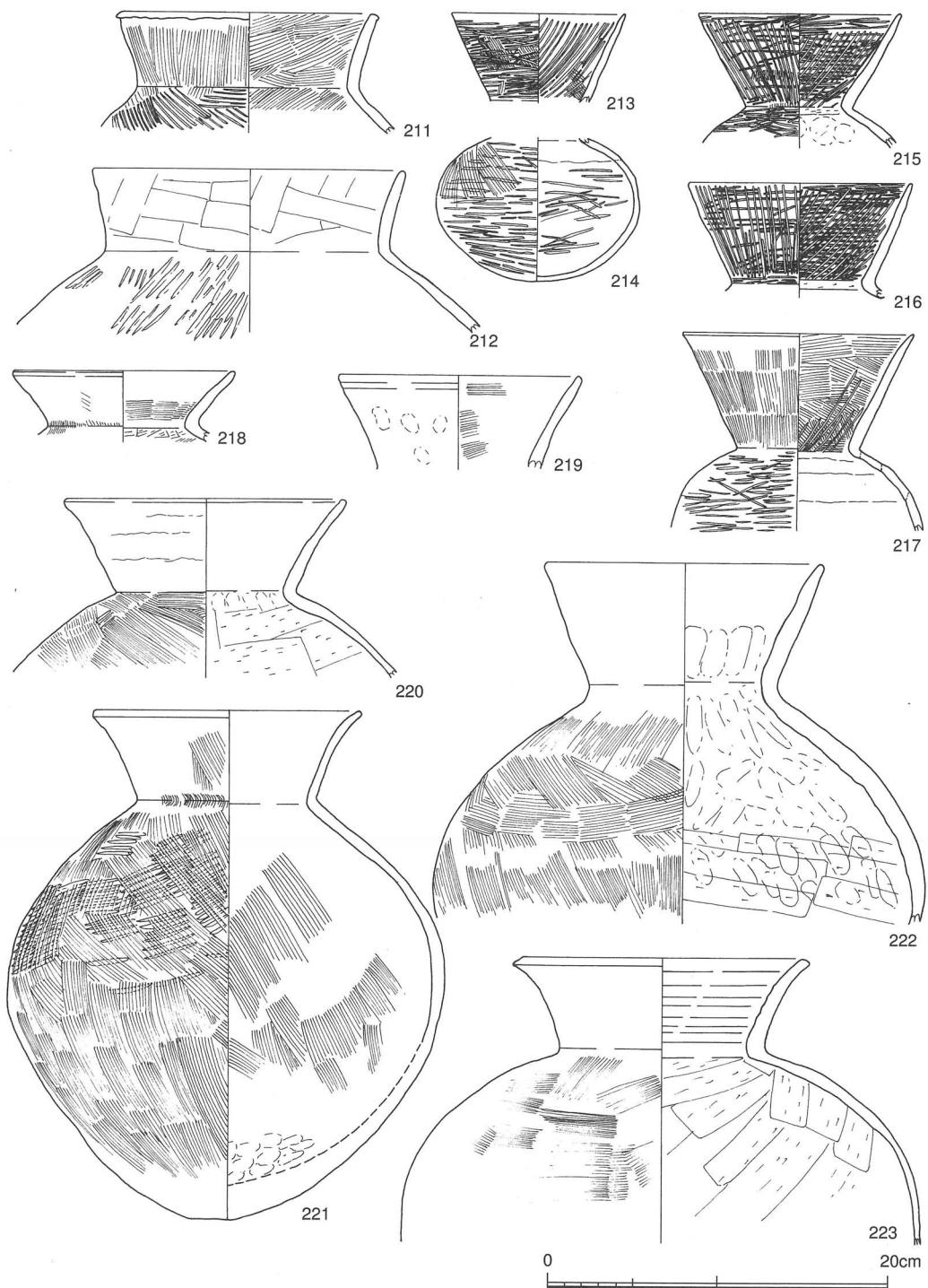


第36図 第3遺構検出地点および遺構平・断面図Ⅱ

遺構埋土内からは庄内式新相～布留式古相に比定される土器が折り重なるように、コンテナ箱（60×40×20cm）で約6箱分出土した。そのなかから完形品を含め図化できたものは、小型丸底壺9点（191～199）・小型壺5点（200～204）・複合口縁壺5点（205～209）・大型

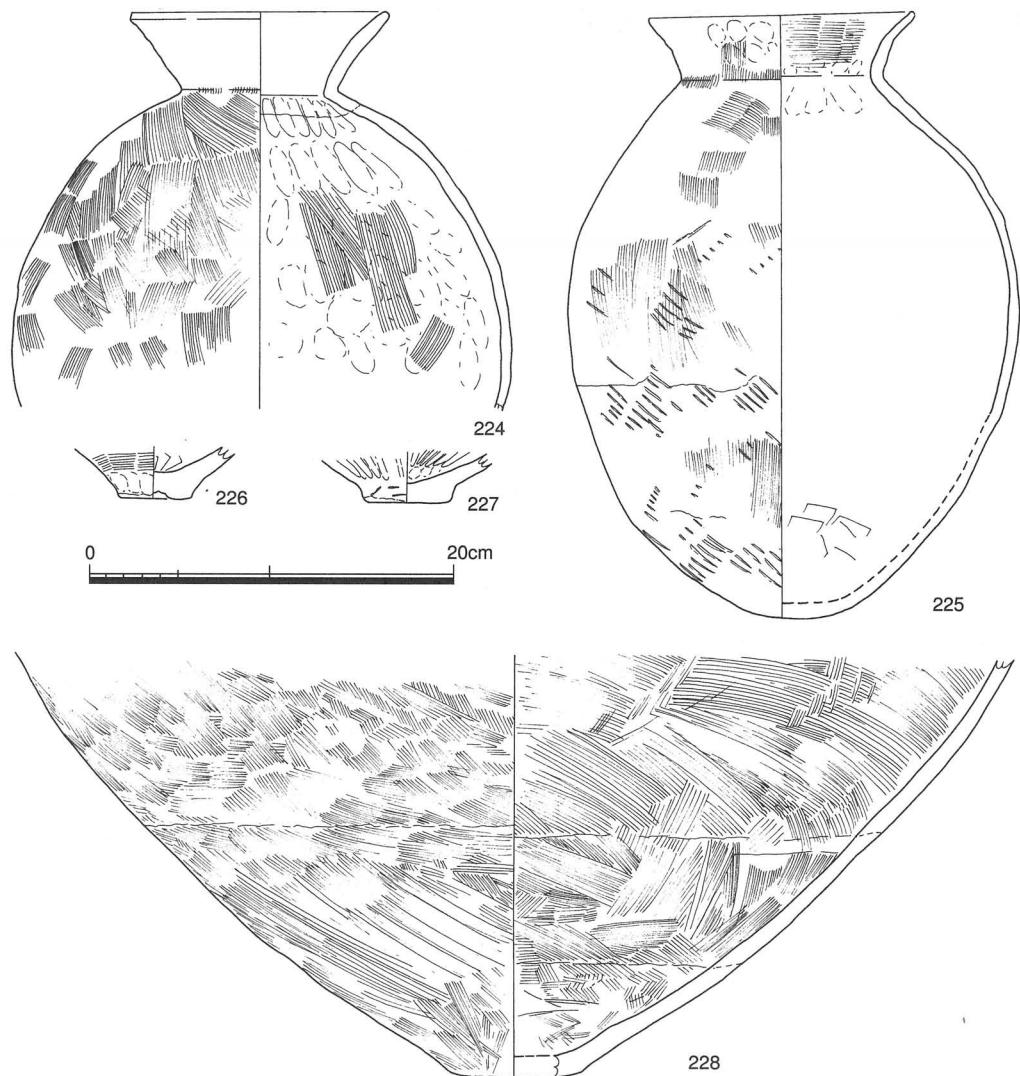


第37図 SO-301出土遺物実測図 I

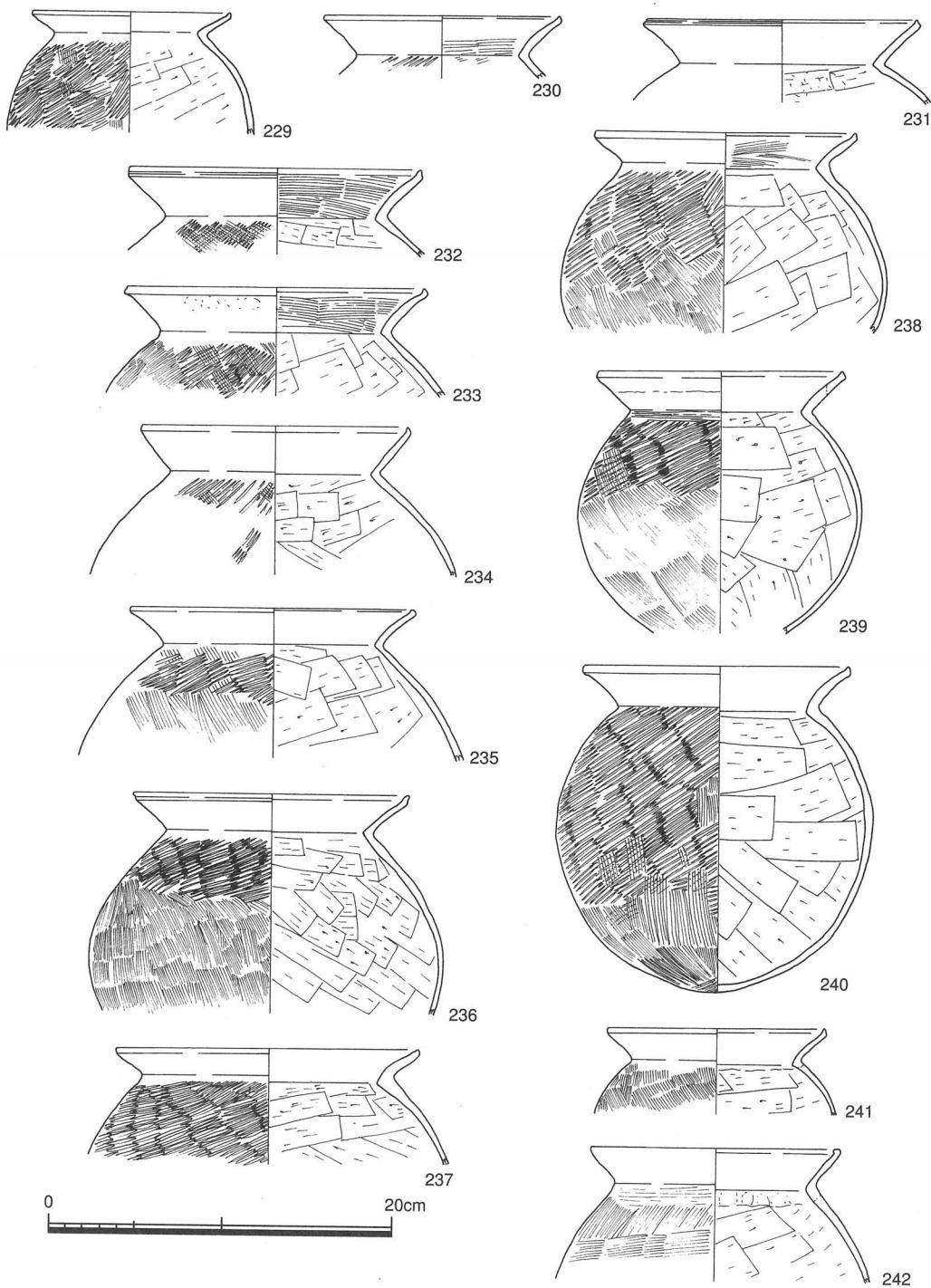


第38図 SO-301出土遺物実測図Ⅱ

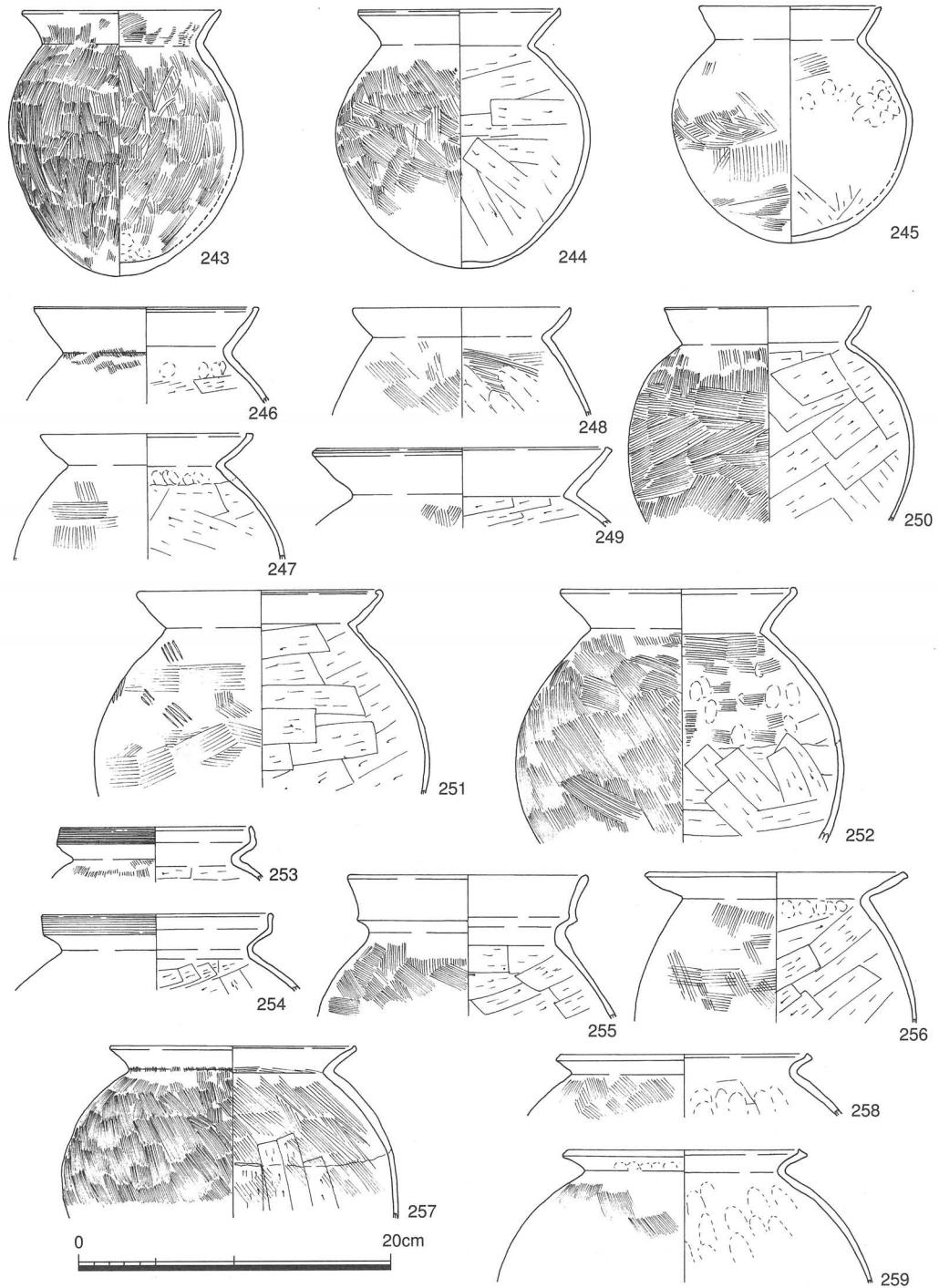
複合口縁壺 1 点 (210) ・ 短頸直口壺 2 点 (211・212) ・ 直口壺 7 点 (213～219) ・ 大型直口壺 6 点 (220～225) ・ 壺 3 点 (226～228) ・ 甕 31 点 (229～259) ・ 高杯 10 点 (260～269) ・ 器台 9 点 (270～278) ・ 手焙形土器 1 点 (279) ・ 小型鉢 9 点 (280～288) ・ 大型鉢 2 点 (289・290) の土器類の他石製品 10 点 (291～300) の総数 110 点を数える。以下、各器種別に概観したい。



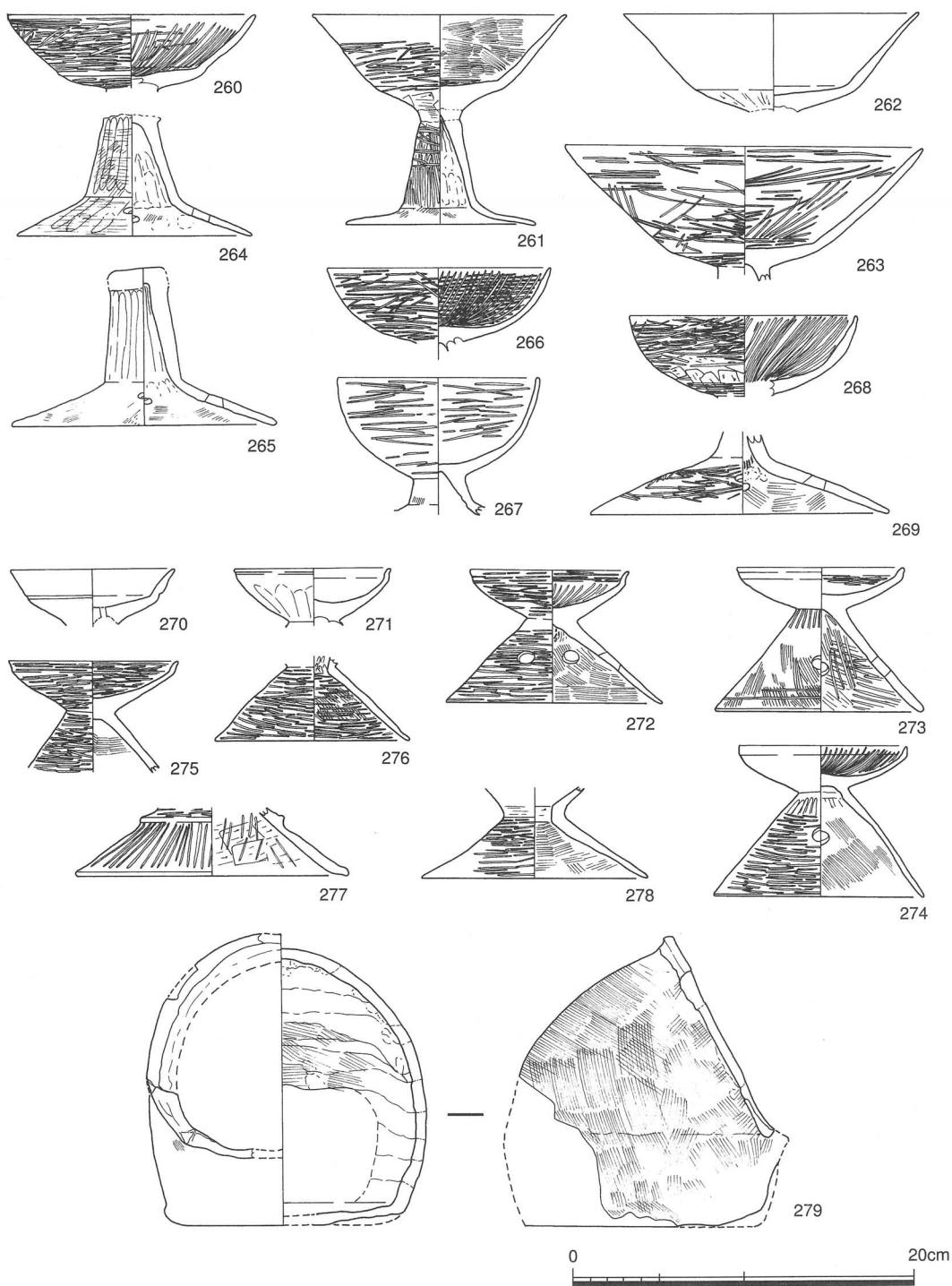
第39図 SO-301出土遺物実測図Ⅲ



第40図 SO-301出土遺物実測図IV



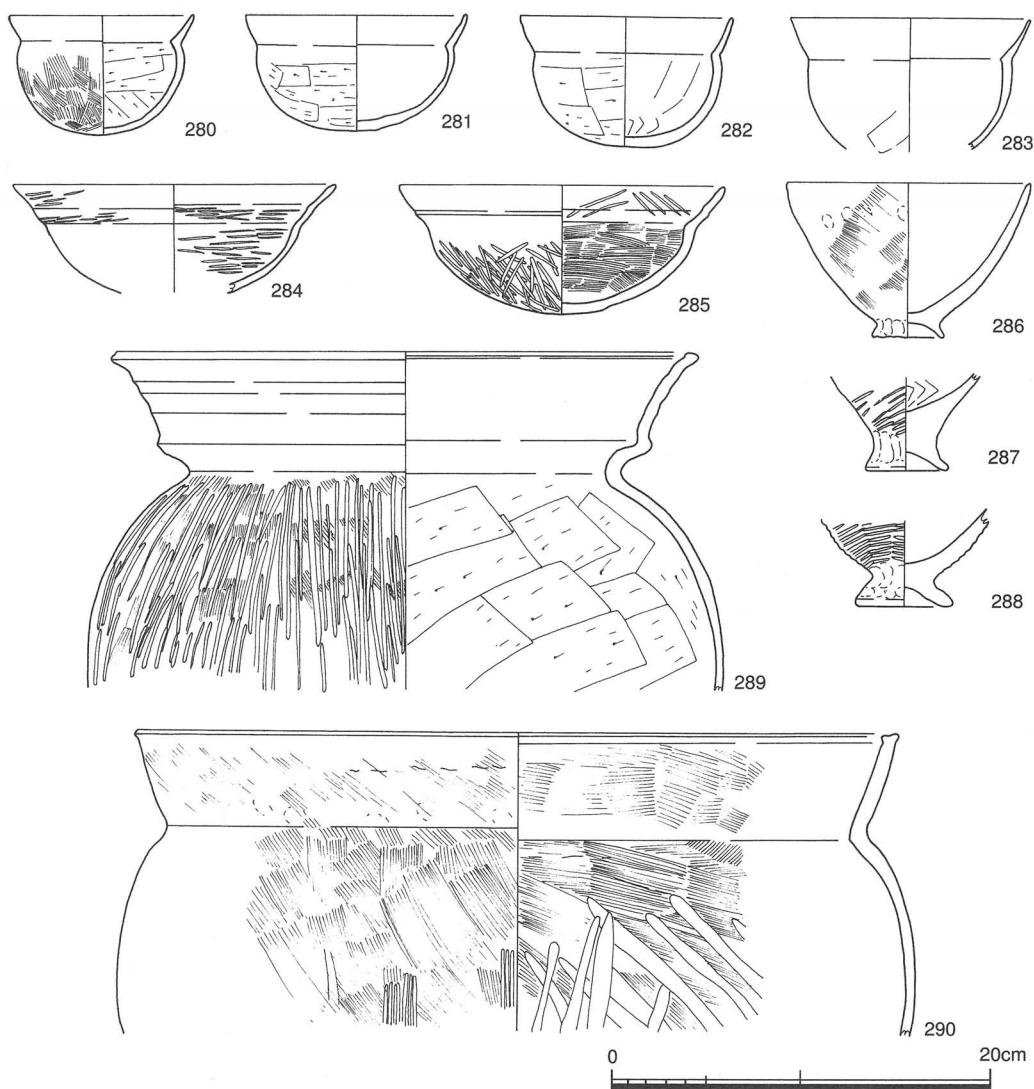
第41図 SO-301出土遺物実測図V



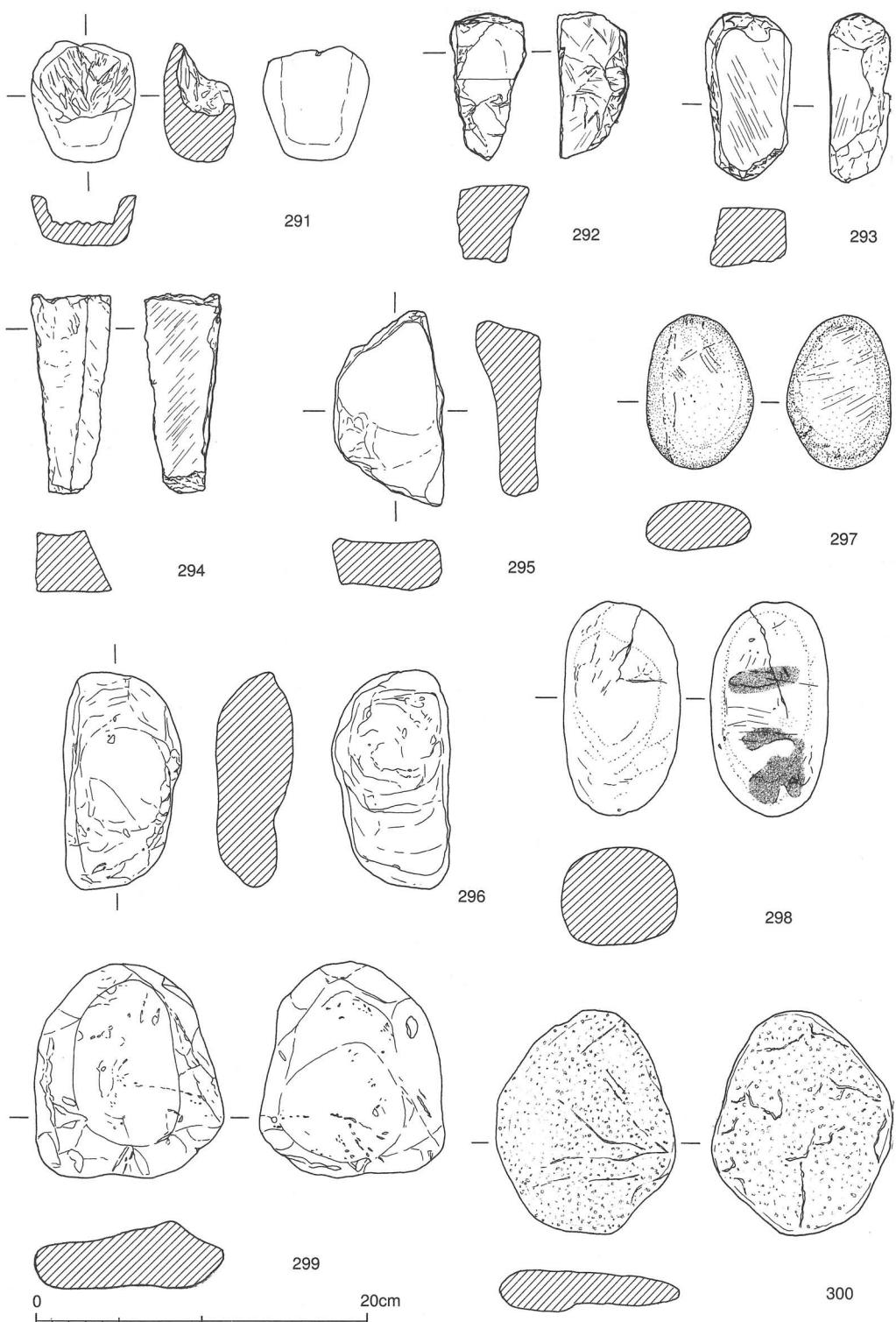
第42図 SO-301出土遺物実測図VI

小型丸底壺（191～197）は、口径と体部最大径がほぼ等しく、口縁部は内彎気味に伸びる。外面の調整はヘラミガキが主流であり、（192・197）には口縁部や体部内面にもヘラミガキが施されている。（198）は、やや平底を呈し、器壁が他のものより厚く、全体的に粗雑である。（199）は口縁部と体部の境目に明瞭な段を有する山陰系のもので胎土は白っぽい。

小型壺（200～204）はすべて球形の体部をもつが、底部の特徴をみるとやや尖り底を呈するもの（200・201）と丸底を呈するもの（202～204）の2種類に分けられる。また、（201）の粗製のものに対して（202）は外面全体に周密なヘラミガキが施される精製品である。



第43図 SO-301出土遺物実測図Ⅶ



第44図 SO-301出土遺物（土製品・石器）実測図VIII

複合口縁壺（205～209）は、直立もしくは外傾して立ち上がる頸部から、さらに明瞭な段をなして外傾して開く口縁部からなる。（205・206）の波状文や竹管文によって加飾されるものは庄内式期からの混入品であろう。（207）と（209）はほぼ同一形態とみられ、体部は中位が膨らむ卵形を呈する。（210）は器壁の厚い口縁部が内傾する大型品で、一般的に西部瀬戸内系とされるものであるが胎土中には角閃石を多量に含む。

短頸直口壺（211）は、口縁部～肩部の内外面全域にハケナデ調整される。一方の（212）の外面はタタキ調整される。

直口壺7点（213～219）は球形の体部から直線的に伸びる口縁部が付く精製品である。（213・215・216）の口縁部内外面には放射状のヘラミガキが施されるが、（217）の口縁部外面はハケナデで、内面は放射状のヘラミガキを施した後ハケナデ調整しているのが窺われる。

大型直口壺（220～225）は、器高が30cm～40cm位を測るもので外面調整はすべてハケナデによるものであるが、（221・225）のようにタタキ目の残存するものもみられる。（223）以外は肩部の張らないどちらかというと体部最大径を中位にもつものである。また、（225）は長胴形の体部に比して短小の口縁部が付く。

甕（229～240）は、いわゆる河内型庄内式甕と呼ばれるもので球形に近い体部を成し、タタキ目が体部上半にのみみられ、下半部は密なハケナデによって消される。これらの甕は庄内式期のなかでも新相段階のもので、布留式期古相段階まで混在するものとみられる。（241～252）は布留式甕で、口縁屈曲部の彎曲化と口縁端部が丸味をもって肥厚するほか、（247・250・251）のように体部外面上位のハケナデが水平方向に施されるのに特徴をもつ。（253・254）は吉備産で、直上に伸びる口縁端部外面に数条の櫛描直線文が施される。（255）は山陰産で、口縁部と体部の境目に明瞭な段を有し、比較的長く伸びる口縁端部をもつ。（256～259）は四国東部地方にみられるもので、（256・257）が阿波産、（258・259）が讃岐産であろう。

高杯（260～263）は弥生V様式の系譜を引くもので、水平な杯底部から斜上方へ直線的に伸びる口縁部をもつ。（266～269）は椀形の杯部に低い脚部が付くもので、杯部内外面には周密なヘラミガキが施される。

器台（270～275）は、皿状の受部と「ハ」の字形に開く脚部をもつ。（270）については他のものよりは口縁端部が長く、受部底部に穿孔がみられる。同じ器台でも（276～278）は、鼓形器台と呼ばれるもので受部が貫通する。また、（277）は屈曲部に明瞭な段をもっており、色調・胎土から山陰系の所産と考えられる。

手焙形土器（279）は、覆部と体部が一体化したもので作りが粗い。内面には輪積みによる成形を示唆する接合痕が指頭圧痕と共に幾重にも認められ、外面は全面ハケナデ調整される。

小型鉢（280～283）は、半球形の体部に内彎気味に短く伸びる口縁部が付く。（284・285）

は半球形の体部から二段に屈曲する口縁部が付く精製品である。(287・288) の台付き鉢は、外面にタタキ目を有す粗製品である。

大型鉢(289)は内彎して立ち上がる体部から二段に屈曲する口縁部を有する。山陰系とみられる。(290)は緩やかに内彎して立ち上がる体部から内彎気味に伸びる口縁部に至る。口縁端部の上面は凹面を成す。

(291)は、胎土色調が乳白色を呈する用途不明土製品で、内部をヘラ状工具のようなもので抉られている。

石材と見られるもの9点(292~300)を図化した。(292~296)は、砥石である。(292)は石英・長石の粒子からなる砂岩で青灰色を呈する。(293)は細粒砂岩で乳白色を呈する。(294)はチャート・石英・花崗岩の粒子を含む砂岩で青灰色を呈する。(295)もチャート・石英・花崗岩の粒子を含む砂岩で緑灰色を呈する。(296)は長石の細粒を非常に多く含む安山岩で淡黄色を呈する。(297)はチャート・石英・花崗岩の粒子を含む砂岩で灰色を呈する。両面の磨擦痕から磨石とおもわれるが、一端には敲打痕がみられ叩石としても使用された可能性が高い。(298)は両端部に敲打痕が認められる叩石で、一端にはヒビ割れが生じている。石質はザクロ石黒雲母流紋岩で浅黄色を呈し、片面には煤が付着している。(299・300)は石皿状の形態を示すが、石製品として用いられたか否かは断定を欠く。(299)は両面に僅かながら凹面を有する。石質は丹波帯か四万十帯の砂岩で暗灰色を呈する。(300)は片面に平坦な面をもつ。石質はアプライドで灰白色を呈する。以上の石製品については、粘土層を中心とする低湿地状に立地する当地から考えると、付近に存在した河川から採取した川原石を原石として利用したことが窺える。

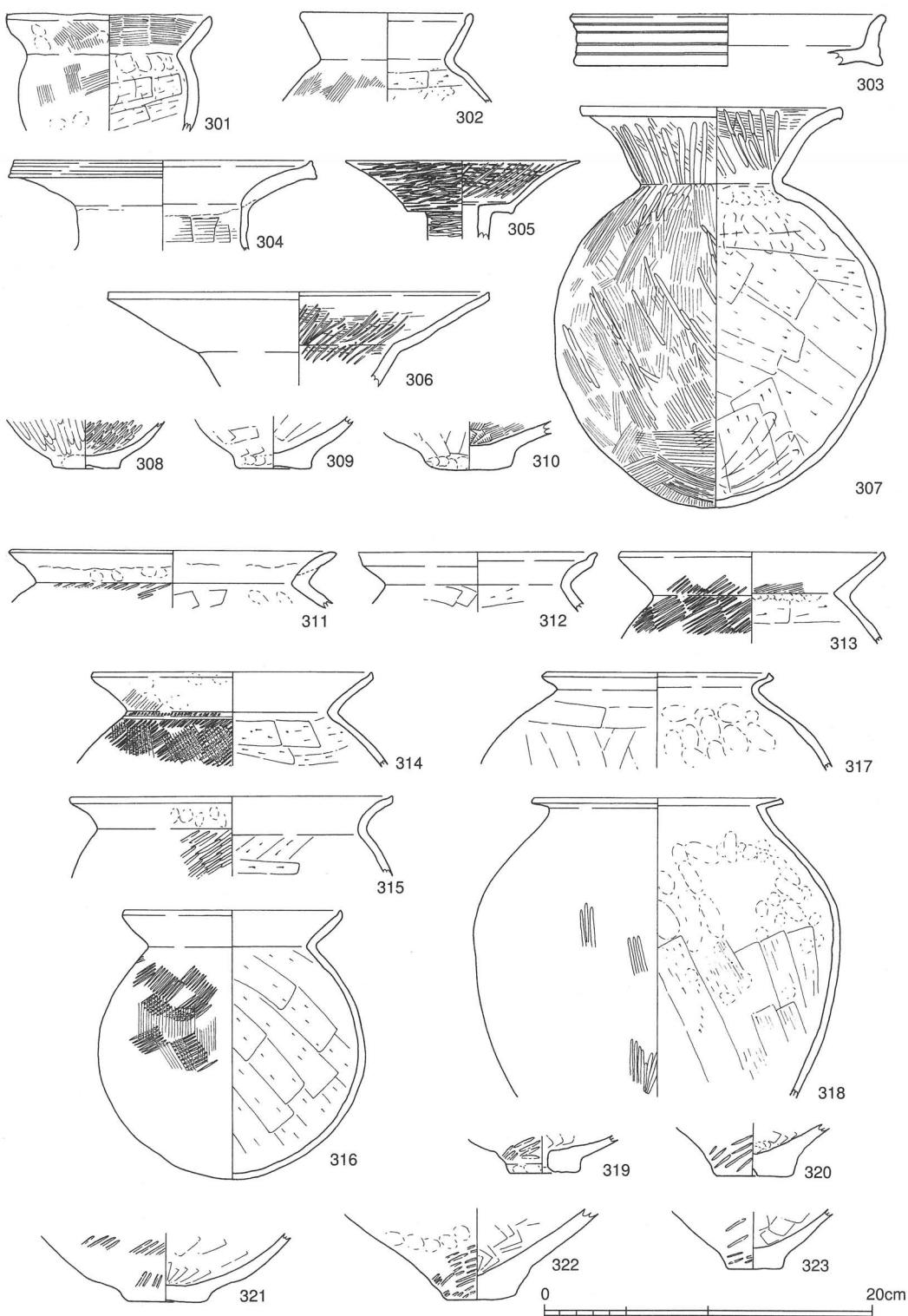
<遺構に伴わない出土遺物>

遺構に伴わない出土遺物として図化できたものはすべて第4層にあたる古墳時代前期（布留式期）の遺物包含層からのみである。時期的にはすべて布留式期古相段階に比定されるものである。以下、器種別に記述する。

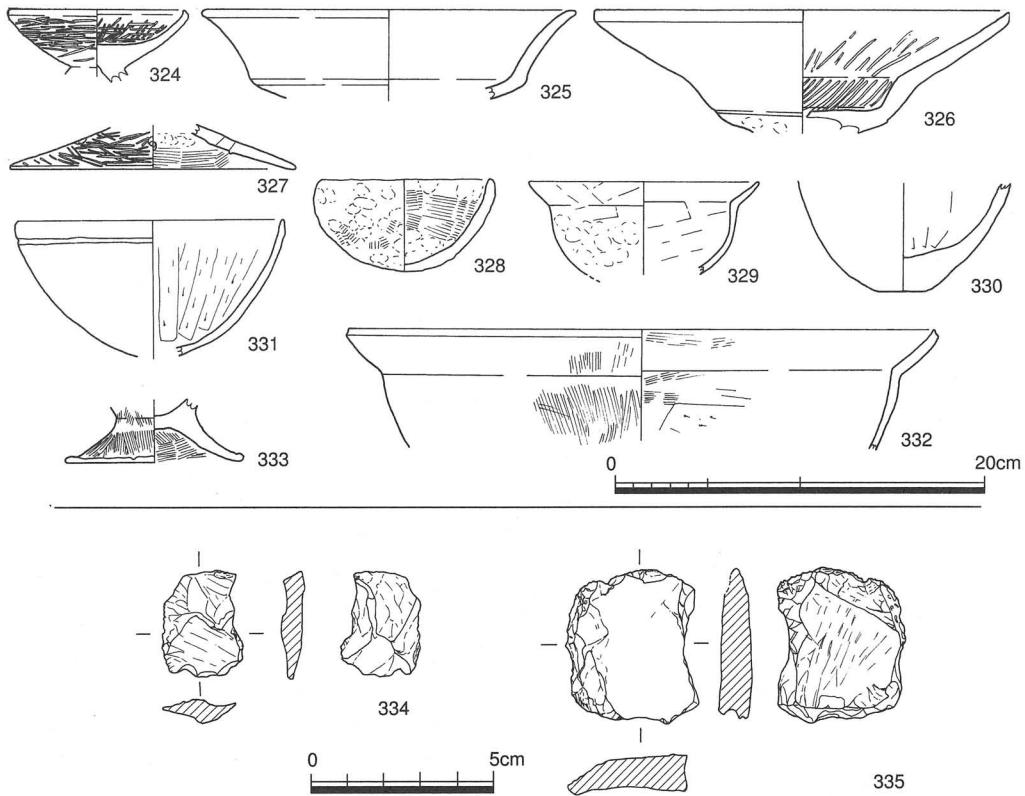
小型壺(301)は、球形とみられる体部から体部径を凌駕する口縁部が付く。

(302)の直口壺は内彎気味に伸びる口縁部に丸味をもつ端部が付く。

(303~306)は複合口縁壺である。体部はどれも残存しないが、口縁部～頸部の形態が各々異なる。(303)は外反して短く伸びる口縁部外面に数条の凹線を施し加飾する。(304)はやや直立する頸部に外反する口縁部が付く。また、口縁端部は外傾する面をもち、2条の凹線が施される。(305)は直立する頸部から水平方向に伸びた後、内外面に明瞭な段をなして外反して開く口縁部が付く。周密なヘラミガキを主とした精製品である。(306)は外傾して立ち上がる頸部から直線的に外上方へ伸びる口縁部が付く。口縁部・頸部内面ともに横方向のヘラ



第45図 第4層出土遺物実測図Ⅰ



第46図 第4層出土遺物実測図Ⅱ

ミガキ後さらに放射状のヘラミガキが施される。

(307) の広口壺は完形品で、器壁は体部内面2/3以下がヘラケズリされて薄く、ヘラケズリが施されない口縁部から肩部は厚い。

(311～316) の甕6点のうち(311)については、口縁部の形態と肩部内面のユビナデおよびヘラナデ調整法からみて弥生V様式の系譜を引くもので、他はすべて布留式甕影響の庄内式甕である。(316)は完形品で、形態・調整ともに典型的な標識甕といえる。(317・318)は讃岐産の甕である。底部のみ図化できたもののうち(319)にだけ穿孔がみられる。

(324)は浅い皿状の受部をもつ器台で、受部の内外面は周密なヘラミガキが施される。

(325～327)は高杯の杯部および脚底部である。(325)は弥生V様式の系譜を引くもので、杯部内外面の口縁部と底部の境目に明瞭な段を有する。(326)は水平な杯部内面から斜上方に短く立ち上がった後さらに大きく外傾して内彎気味に伸びる口縁部を呈する。杯部内面上半

には放射状のヘラミガキが施される。(327) は椀形の杯部が付くものと思われる。

鉢は小型のものが4点(328~331)、大型が1点(332)である。(328)は一部ハケナデ調整がみられるが手づくねを主とした粗製品である。(329)は半球形の体部に内彎する小さい口縁部が付く。(330)は突出気味の厚い平底を呈するもので、弥生V様式系とも思われる。(331)は内彎して伸びる体部からそのまま口縁部に至るもので、口縁部外面下位に1条の凹線を巡らす。(332)は口縁部・体部ともに内彎し、体部下位は内面ヘラケズリによって器壁が薄く仕上げられるものと思われる。(333)は台付き鉢の脚台であろう。

土器以外にクサビ形のサヌカイトの剥片が2点(334・335)出土した。

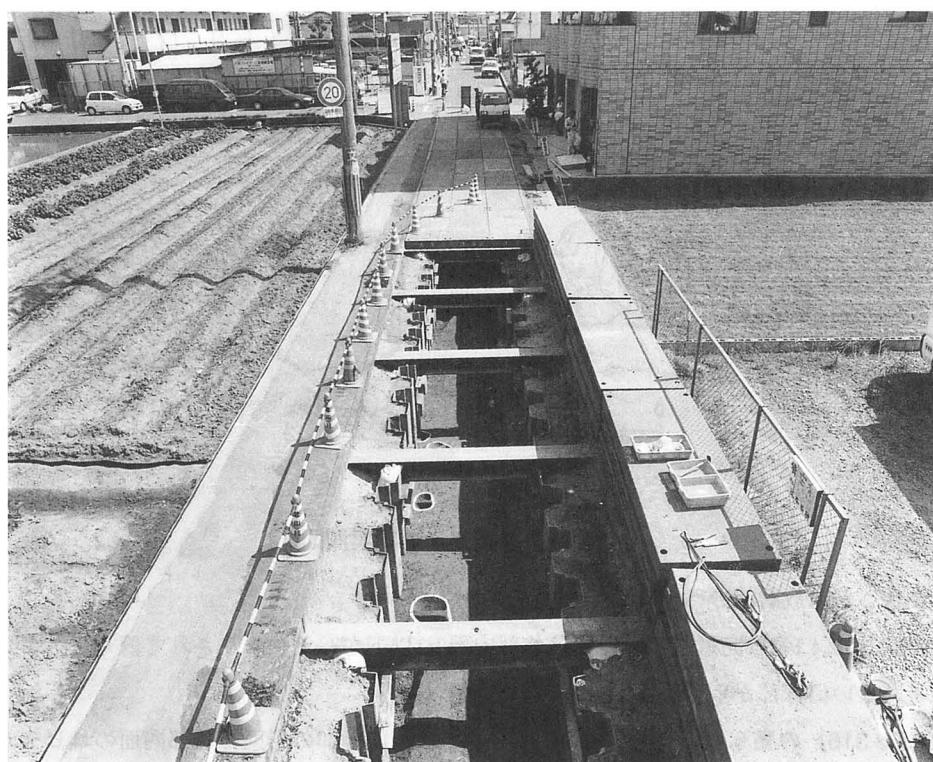


写真5 調査地近景（北から）

第3節 出土遺物觀察表

※胎土=量／粒度長は最大長 (mm) / 賦物=石: 石英、長: 長石、雲: 雲母、角: 角閃石、チ: チャート、赤: 赤色斑紋、砂粒

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調整・手法	色調 外面 内面	胎土 量／粒度長／賦物	焼成	遺存度	備考
188 二〇	高杯 (土師器) SE-001	— 底径 11.6	外面: ユビオサエ、ヨコナデ 内面: ヘラナデ、ヨコナデ	淡茶褐色	多／3／石、長、 雲、赤	良好	脚底部 1/3	内外面に黒斑
189 二〇	甕 (土師器) SD-201	12.8 —	外面: ヨコナデ、ハケナデ (6本/cm) 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	灰褐色	多／2／石、長、 雲、角	良好	口縁部 1/2	外面に煤
190 二〇	甕 (土師器) SP-201	15.8 —	外面: 磨滅の為調整不明 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	乳褐色	多／1／長、雲、 チ、赤	良好	口縁部 ～肩部 1/8	
191 二〇	小型丸底甕 (土師器) SO-301	8.4 6.9 体部最大径 8.1	外面: ヘラミガキ、ヘラケズリ 内面: ヨコナデ、ヘラナデ、ユビオサエ	灰褐色	少／0.5／長、雲、 角	良好	4/5	
192 二〇	同 上	10.0 — 体部最大径 9.7	内外面ともにヘラミガキ	赤褐色 褐灰色	僅／0.5／石、長、 雲、角、赤	良好	1/4	
193 二〇	同 上	9.6 7.6 体部最大径 9.2	外面: ヘラミガキ、ヘラケズリ 内面: ヨコナデ、ヘラナデ	明褐色	少／0.5／石、長、 雲、赤	良好	3/5	
194 二〇	同 上	10.6 7.5 体部最大径 9.4	同 上	明褐色	少／1／長、雲、 赤	良好	ほぼ完 形	外面に黒斑
195 二〇	同 上	9.7 8.9 体部最大径 9.8	外面: ヘラナデ、ヘラミガキ 内面: ヘラナデ	淡黄灰色	少／1／長、雲、 赤	良好	3/5	外面に黒斑
196 二〇	同 上	10.6 9.1 体部最大径 9.8	外面: ヨコナデ、ヘラミガキ、一部ハケ ナデ 内面: ヨコナデ、ナデ	褐灰色	少／1／石、長、 雲、角	良好	1/2	外面に煤
197 二〇	同 上	10.6 9.0 体部最大径 10.7	外面: ユビオサエ、ヨコナデ、ヘラミガ キ、ヘラナデ、接合痕1条 内面: ヘラミガキ、ナデ	淡灰茶色	僅／1／長、雲、 チ	良好	4/5	
198 二〇	同 上	7.6 8.6 体部最大径 8.8	外面: ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラミガ キ、ヘラナデ、接合痕1条 内面: ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ、ヘ ラナデ、接合痕1条	褐灰色	多／4／石、長、 雲、角、赤	良好	口縁部 一部欠 損	
199 二一	同 上	10.9 — 体部最大径 8.5	外面: ヨコナデ、ナデ、ハケナデ 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	淡褐色 淡茶灰色	少／1／石、長、 雲、角、チ、赤	良好	底部欠 損	山陰系
200 二一	小型甕 (土師器) SO-301	9.3 11.2 体部最大径 12.2	外面: ヨコナデ、ハケナデ (7本/cm)、 底部穿孔 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	乳褐色	少／1／長、雲、 角、赤	良好	4/5	外面に黒斑
201 二一	同 上	4.7 12.2 体部最大径 11.5	外面: ヘラナデ、ヘラケズリ、接合痕1 条 内面: ヘラナデ、ナデ、ユビオサエ	乳灰色	少／0.5／石、長、 雲、角、チ	良好	4/5	外面に黒斑
202 二一	同 上	11.7 11.3 体部最大径 13.0	外面: ヘラミガキ、一部ハケナデ(肩部)、 接合痕2条 内面: ヘラミガキ、ヘラナデ、ユビオサ エ、接合痕1条	淡灰褐色	僅／2／石、長、 雲、チ、赤	良好	3/5	
203 二一	同 上	12.4 12.3 体部最大径 13.4	外面: ヨコナデ、ハケナデ (8本/cm) 内面: ハケナデ、ヘラケズリ、ナデ	茶灰色	多／3／石、長、 雲、角、赤	良好	1/2	
204 二一	同 上	16.8 —	外面: ヨコナデ、ハケナデ (13本/cm)、 接合痕1条 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ、接合痕1条	暗茶灰色	多／2／石、長、 雲、角	良好	4/5	外面に煤
205 二一	複合口縁甕 (土師器) SO-301	16.7 —	外面: 波状文 (13~15条)、ヘラミガキ、 ヘラナデ 内面: 波状文 (8~10条)、ヨコナデ	乳褐色	多／4／石、長、 角、チ、赤	良好	口縁部 ～頸部 1/2	

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調整・手法	色調 外面 内面	胎土 量／粒度長／鉱物	焼成	遺存度	備考
206 二一	複合口縁壺 (土師器) SO-301	16.7 — —	外面：波状文、ヘラミナデ、竹管文 内面：ハケナデ、ヘラミガキ、ユビオサエ	乳褐色	少／1／石、長、雲、赤	良好	口縁部 1/2～肩部 (完)	外面に煤
207 二二	同上	— — 頸径 6.2 体部最大径 16.1	外面：ヘラミガキ、接合痕1条 内面：ヘラミガキ、ユビオサエ、ハケナデ(12本/cm)、ナデ、接合痕1条	明褐色	少／1／長、雲、赤	良好	頸部～ 体部 ほぼ完	
208 二二	同上	11.0 —	外外面ともにヨコナデ(口縁部～頸部)、 ハケナデ(頸部の一部)	灰褐色	多／3／石、長、雲、赤	良好	口縁部～ 頸部 ほぼ完	
209 二二	同上	16.5 16.7 体部最大径 15.2	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、ナデ、ハケナデ(9 本/cm)、接合痕1条	淡黄灰色	僅／1／長、雲、角、赤	良好	4/5	
210	大型複合口縁壺 (土師器) SO-301	32.0 —	外面：ヘラナデ 内面：ヨコナデ、ユビオサエ後ハケナ デ(8本/cm)	褐色	少／3／石、長、雲、角、赤	良好	口縁部 1/6	
211 二二	直口壺 (土師器) SO-301	14.5 —	外面：ハケナデ(6本/cm)、タタキ(5 本/cm) 内面：ハケナデ(8本/cm)、ナデ	乳褐色 明褐色	多／2／石、長、雲、角、赤	良好	口縁部 1/3	外面に煤
212 二二	同上	18.2 —	外面：ヘラナデ、タタキ(3本/cm) 内面：口縁部はヘラナデ、肩部は磨滅 の為調整不明	淡乳褐色	多／5／長、チ、赤	良好	口縁部～ 肩部 1/3	外面に煤
213	同上	10.0	外外面ともにハケナデ後ヘラミガキ	淡茶褐色	少／0.5／雲、角	良好	口縁部 のみ	
214 二二	同上	— — 体部最大径 12.0	外面：ハケナデ後ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、接合痕1条	乳褐色 淡黄灰色	僅／0.5／長、雲、角	良好	体部のみ	
215 二二	同上	11.9 —	外面：ハケナデ後ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、ユビオサエ	淡茶褐色	僅／0.5／石、長、雲、赤	良好	口縁部 のみ	外面に黒斑
216 二二	同上	13.0 —	外外面ともにヘラミガキ	明褐色 淡茶褐色	僅／0.5／長、雲、赤	良好	口縁部 4/5	外面に黒斑
217 二三	同上	13.6 —	外面：ハケナデ(10本/cm)、ヘラミガ キ 内面：ハケナデ(8本/cm)後ヘラミガ キ、ナデ、接合痕3条	黃褐色	僅／1／長、雲、赤	良好	口縁部 (ほぼ完) ～肩部 2/3	外面に黒斑
218 二三	同上	12.9 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	茶灰色	多／1／石、長、雲、角、赤	良好	口縁部 のみ	外面に黒斑
219	同上	14.0 —	外面：ユビオサエ、ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ヘラナデ	淡褐色	少／1／石、長、雲、角	良好	口縁部 1/3	
220 二三	同上	16.4 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ(6本/cm)、 接合痕3条 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラケ ズリ	淡褐色	多／1／長、雲、角	良好	口縁部 (完)～ 肩部 1/3	外面に黒斑
221 二三	同上	15.5 30.5 体部最大径 25.6	外面：ヨコナデ、ハケナデ、上位タタキ (3本/cm)後ハケナデ(7本/cm)、下 位ハケナデ(7本/cm)、接合痕1条 内面：ヨコナデ、ハケナデ(4本/cm)、ユビオサ エ	淡灰褐色	多／2／石、長、雲、角、チ、赤	良好	口縁部 1/2欠損	外面に黒斑
222 二三	同上	16.5 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ 内面：ヨコナデ、ユビナデ、ユビナデ 後ヘラケズリ	淡灰茶色	多／2／石、長、チ、赤	良好	上半部 のみ	
223 二三	同上	16.6 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ(12本/cm) 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	淡茶褐色	多／3／石、長、雲、角、チ、赤	良好	口縁部～ 肩部 1/3	
224 二三	同上	14.3 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ(7本/cm) 内面：ヨコナデ、ユビオサエ後一部ハ ケナデ	淡茶灰色	多／3／石、長、雲、角、赤	良好	上半部 のみ	
225 二三	同上	14.7 33.9 体部最大径 24.8	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、タタキ 後ハケナデ、接合痕2条 内面：ハケナデ、ユビオサエ、ナデ、 ヘラナデ	淡黄灰色	少／2／石、長、角、チ、赤	良好	ほぼ完形	

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調整・手法	色調 外面 内面	胎土 量/粒度長/鉱物	焼成	遺存度	備考
226 二四	壺 (土師器) S O - 301	— 底径 3.8	外面: ハケナデ、ユビオサエ 内面: ヘラナデ	赤褐色	多/2/石、長、雲	良好	底部のみ	
227 二四	同上	— 底径 4.2	外面: ヘラミガキ、ヘラナデ、接合痕1条 内面: ヘラナデ、ユビオサエ	茶灰色	多/3/石、長、雲、角	良好	底部のみ	外外面に黒斑
228	同上	— 底径 4.7	外外面ともにハケナデ(7本/cm)、外 面-接合痕1条、内面-接合痕2条	茶褐色	多/3/石、長、雲、角、赤	良好	体部~ 底部 1/4	外外面に黒斑
229 二四	壺 (土師器) S O - 301	11.4 —	外面: ヨコナデ、タタキ(7本/cm)後一 部ハケナデ 内面: ヨコナデ、一部ハケナデ、ヘラケ ズリ、接合痕1条	灰茶色	多/1/長、雲、角、赤	良好	口縁部~ 肩部 1/3	外外面に煤
230 —	同上	13.8 —	外面: ヨコナデ、タタキ(5本/cm) 内面: ハケナデ、ヘラケズリ	暗茶灰色	多/1/石、長、 雲、角	良好	口縁部 1/2	
231 —	同上	15.8 —	外面: 磨滅の為調整不明 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	乳褐色	少/1/長、雲、 チ、赤	良好	口縁部 1/8	
232 —	同上	16.8 —	外面: ヨコナデ、タタキ後ハケナデ 内面: ハケナデ(8本/cm)、ヘラケズリ	褐色	多/3/長、雲、 角	良好	口縁部 のみ	
233 二四	同上	17.6 —	外面: ヨコナデ、ユビオサエ、タタキ (6本/cm)後一部ハケナデ 内面: ハケナデ(6本/cm)、ヘラケズリ	茶灰色	多/2/長、雲、 角	良好	口縁部~ 肩部 1/3	
234 二四	同上	15.3 —	外面: ヨコナデ、タタキ後ハケナデ 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	暗茶灰色	少/3/石、長、 雲、角	良好	口縁部~ 肩部 1/4	
235 二四	同上	16.8 —	外面: ヨコナデ、タタキ後ハケナデ(8 本/cm) 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	暗茶褐色	僅/1/石、長、 雲、角、赤	良好	口縁部~ 肩部 1/3	
236 二四	同上	15.8 — 体部最大径 20.5	外面: ヨコナデ、肩部-タタキ(6本/cm) 後ハケナデ(8本/cm)、体部-ハ ケナデ(8本/cm) 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	暗茶褐色	多/1/石、長、 雲、赤、角	良好	1/3	
237 二四	同上	17.6 —	外面: ヨコナデ、タタキ(5本/cm) 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	暗茶灰色 灰茶色	多/1/石、長、 雲、赤	良好	口縁部~ 肩部 1/3	
238 二四	同上	15.3 — 体部最大径 19.3	外面: ヨコナデ、上半-タタキ(5本/cm) 後一部ハケナデ、下半-ハケナデ (8~9本/cm) 内面: ハケナデ、ヘラケズリ	茶褐色	少/1/長、雲、 角	良好	口縁部~ 肩部 1/3	外外面に煤
239 二四	同上	14.4 — 体部最大径 16.3	外面: ヨコナデ、上半-タタキ(5本/cm) 後一部ハケナデ、下半-ハケナデ (8~9本/cm)、接合痕1条 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	茶灰色	少/2/石、長、 雲、角	良好	1/3	
240 二四	同上	15.0 19.2 — 体部最大径 18.2	外面: ヨコナデ、タタキ(5本/cm)後一 部ハケナデ、下位-ハケナデ(8 本/cm) 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	茶灰色	多/0.5/長、 雲、角	良好	3/5	外外面に煤
241 —	同上	12.8 —	外面: ヨコナデ、ハケナデ 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ、接合痕1 条	茶灰色	多/1/石、長、 雲、角	良好	口縁部~ 肩部 1/3	外外面に煤
242 二五	同上	14.6 —	外面: ヨコナデ、ハケナデ(6本/cm) 内面: ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラケズ リ	赤褐色 淡茶褐色	多/3/石、長、 雲、赤	良好	口縁部~ 肩部 1/3	
243 二五	同上	12.5 15.5 — 体部最大径	外面: ヨコナデ、ハケナデ(8本/cm) 内面: ヨコナデ、ハケナデ(8本/cm)、 ユビオサエ	淡茶褐色	少/3/石、長、 角、チ	良好	4/5	外外面に黒斑
244 二五	同上	13.0 17.0 — 体部最大径 16.3	外面: ヨコナデ、ハケナデ(7本/cm) 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	暗茶褐色	多/2/長、雲、 角、赤	良好	ほぼ完形	外外面に煤
245 二五	同上	11.5 15.5 — 体部最大径 15.3	外面: ヨコナデ、ハケナデ(5本/cm)、 接合痕2条 内面: ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ、ヘ ラケズリ	淡褐色	多/1/雲、チ、 赤	良好	3/5	

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調整・手法	色調 外面 内面	胎土 量／粒度長／鉱物	焼成	遺存度	備考
246	甕 (土師器) S O - 301	14.6 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラケズ リ	淡茶灰色	多／1／石、長、 雲、角	良好	口縁部～ 肩部 1/3	
247	同上	13.7 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ(6本/cm) 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	淡灰褐色	少／1／石、長、 角、チ、赤	良好	口縁部～ 肩部 1/3	
二五								
248	同上	14.0 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ 内面：ヨコナデ、ハケナデ後ユビナデ	淡乳灰色	僅／1／石、長、 雲	良好	口縁部～ 肩部 1/7	
249	同上	18.7 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	淡褐色	少／2／長、雲、 角	良好	口縁部のみ	
二五								
250	同上	12.8 — 体部最大径 18.3	外面：ヨコナデ、ハケナデ(8本/cm) 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	茶灰色	少／2／石、長、 雲、角、チ、赤	良好	1/2	
二五								
251	同上	15.2 —	外面：ヨコナデ、タタキ後ハケナデ(6 本/cm) 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	灰茶色	少／2／石、長、 角、チ、赤	良好	口縁部～ 肩部 1/4	
二五								
252	同上	15.0 — 体部最大径 21.2	外面：ヨコナデ、ハケナデ(8本/cm) 内面：口縁部～ヨコナデ後ハケナデ(7 本/cm)、体部上半～ユビオサエ後 ハケナデ(7本/cm)、体部下半～ ヘラケズリ	淡褐色	多／2／石、長、 雲、角、チ	良好	1/3	
二五								
253	同上	12.3 —	外面：櫛描直線文、ヨコナデ、ハケナデ 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	淡乳褐色	少／1／長、雲、 角	良好	口縁部～ 肩部 1/3	吉備産
二六								
254	同上	14.8 —	外面：櫛描直線文、肩部は磨滅の為調整 不明 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	淡褐色	少／1／石、長、 雲、角、赤	良好	口縁部～ 肩部 1/6	吉備産
二六								
255	同上	14.9 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ(11本/cm) 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	暗茶灰色	僅／1／石、長、 雲、角、赤	良好	1/3	山陰産
二六								
256	同上	16.2 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ(6本/cm) 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラケズリ	淡黃灰色	多／1／石、長、 雲、角	良好	口縁部～ 肩部 1/5	外面に黒斑 阿波産
二六								
257	同上	15.8 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ(13～15本 /cm) 内面：ヨコナデ、ハケナデ(5本/cm)、 ヘラケズリ、接合痕1条	茶褐色	多／2／石、長、 雲、角、赤	良好	上半部	阿波産
二六								
258	同上	16.3 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ 内面：ヨコナデ、ユビナデ	淡茶灰色	僅／2／石、長、 赤	良好	口縁部～ 肩部 1/6	讃岐産
二六								
259	同上	15.6 —	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、ハケナデ 内面：ヨコナデ、ユビナデ	灰褐色	僅／2／石、長、 角、赤	良好	口縁部～ 肩部 1/3	讃岐産
二六								
260	高杯 (土師器) S O - 301	14.4 —	内外面ともにヘラミガキ	暗褐色	少／0.5／石、長、 雲、角	良好	杯部のみ	内外面に煤
二六								
261	同上	14.9 12.6 底径 11.2	外面：ヘラミガキ、ヘラケズリ、ハケナ デ(8本/cm) 内面：ハケナデ(11本/cm)、ヘラミガキ、 シボリ目、ユビナデ	赤褐色	少／1／石、長、 雲、赤	良好	3/5	外面に黒斑
二六								
262	同上	17.3 —	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ 内面：ヨコナデ、ナデ	明褐色	僅／1／長、赤	良好	杯部 1/2	外面に黒斑
二六								
263	同上	21.0 —	内外面ともにヘラミガキ	乳褐色	僅／1／石、長、 雲、角、チ、赤	良好	杯部のみ	内外面に黒斑
二六								
264	同上	— — 底径 14.0	外面：ヘラミガキ後ハケナデ(12本/cm)、 四方孔を穿つ 内面：シボリ目、ユビナデ後ハケナデ (12本/cm)、接合痕1条	明褐色	少／1／石、長、 角、赤	良好	脚底部のみ	外面に黒斑
二六								
265	同上	— — 15.6	外面：ヘラナデ、ハケナデ(9本/cm)、 四方孔を穿つ、接合痕2条 内面：シボリ目、ユビナデ、ハケナデ (7本/cm)	明褐色	僅／1／長、角、 チ、赤	良好	脚底部のみ	外面に黒斑
二六								
266	同上	13.3 —	内外面ともにヘラミガキ	明褐色	僅／0.5／長、雲、 角、赤	良好	杯部のみ	
二六								

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調整・手法	色調 外面 内面	胎土 量／粒度長／鉱物	焼成	遺存度	備考
267 二七	高杯 (土師器) S O - 301	12.0 —	杯部内外面ともにヘラミガキ。柱状部外 面一ハケナデ、内面シボリ目、ナデ	赤褐色	僅／0.5／長、赤	良好	杯部(完) のみ	
268	同上	13.3 —	外面：ヘラミガキ、ヘラケズリ後ヘラミ ガキ 内面：ヘラミガキ	茶灰色	少／1／長、雲、 角、赤	良好	杯部 1/3	外面に黒斑
269 二七	同上	— — 底径 17.5	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ、四方孔を 穿つ 内面：シボリ目、ユビオサエ、ハケナデ	茶褐色	少／0.5／長、雲、 角	良好	脚底部 2/3	
270	器台 (土師器) S O - 301	9.3 —	外面：ヨコナデ、ヘラナデ 内面：ヨコナデ、ナデ	赤褐色	多／1／長、雲、 赤	良好	杯部 5/6	
271 二七	同上	9.3 —	外面：ヨコナデ、ヘラナデ 内面：ヨコナデ、ナデ	赤褐色	少／1／長、雲、 赤	良好	杯部のみ	
272 二七	同上	9.4 7.8 底径 12.8	外面：ヘラミガキ、ヘラケズリ、四方孔 を穿つ 内面：ヘラミガキ、ハケナデ (11本/cm)	淡黄灰色	多／2／石、長、 雲、角、チ	良好	3/5	
273 二七	同上	12.4 8.6 底径 10.0	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ、ハケナデ (10本/cm)、三方孔を穿つ 内面：ヨコナデ、ヘラミガキ、ナデ、ヘ ラケズリ	淡茶褐色	僅／0.5／石、雲、 角、チ、赤	良好	3/5	
274 二七	同上	10.2 9.0 底径 12.6	外面：ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、脚 部に三方孔を穿つ 内面：ヘラミガキ、シボリ目、ハケナデ	淡黄灰色	少／1／石、長、 雲、チ、赤	良好	4/5	
275 二七	同上	10.2 —	外面：ヘラミガキ、穿孔を有す 内面：ヘラミガキ、ハケナデ	淡乳灰色	多／1／長、雲、 赤	良好	裾部欠損	
276 二七	同上	— — 底径 11.6	内外面共にヘラミガキ、外面に接合痕1 条	淡黄灰色	少／0.5／長、雲、 赤	良好	脚底部のみ	
277	同上	— — 底径 16.0	外面：ヨコナデ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	淡黄灰色	多／2／石、長、 角、チ、赤	良好	脚底部 1/3	山陰系
278 二七	同上	— — 底径 13.4	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ、ハケナデ (8本/cm)	乳灰色 灰褐色	少／1／石、長、 雲、角、赤	良好	脚底部 1/3	
279 二八	手焙形土器 (土師器) S O - 301	— 17.4	外面：ハケナデ (8本/cm) 内面：ユビナデ後ハケナデ (6本/cm)	淡黄灰色 淡黄褐色	少／2／石、長、 雲、赤	良好	3/5	
280	小型鉢 (土師器) S O - 301	9.8 6.4	外面：ヨコナデ、ハケナデ (8本/cm) 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	暗茶灰色	少／0.5／石、長、 雲、角	良好	1/4	
281	同上	11.4 6.3	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ 内面：ヨコナデ、ナデ	淡褐色	少／2／長、雲、 赤	良好	3/5	
282 二七	同上	11.4 6.9	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ 内面：ヨコナデ、ヘラナデ	淡褐色	僅／2／石、長、 雲、チ、赤	良好	1/2	
283 二七	同上	12.2 —	外面：磨減の為調整不明 内面：ヨコナデ、ナデ	明褐色	少／2／石、長、 雲、チ	良好	口縁部～ 体部1/4	
284 二八	同上	16.9 —	外面：ヘラミガキ、ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ	明褐色	少／2／長、雲、 赤	良好	1/3	
285 二八	同上	17.2 6.9	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、ハケナデ (11本/cm)	淡褐色 淡茶褐色	少／1／石、長、 雲、角、チ、赤	良好	1/4	内外面に黒斑
286 二八	同上	11.9 8.2 底径 3.6	外面：ユビオサエ後ハケナデ (6本/cm) 内面：ナデ	淡乳灰色	少／1／石、長、 雲、赤	良好	1/2 (底部完)	
287 二八	同上	— — 底径 4.3	外面：タキ (3本/cm)、ユビオサエ 内面：ヘラナデ	赤褐色	多／3／石、長、 雲、チ、赤	良好	底部のみ	
288 二八	同上	— — 底径 4.8	外面：タキ (3本/cm)、ユビオサエ 内面：ナデ	淡乳灰色	多／1／長、雲、 チ、赤	良好	底部のみ	
289 二八	大型鉢 (土師器) S O - 301	30.6 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ後ヘラミガキ 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	淡乳褐色	多／1／石、長、 雲、角、赤	良好	口縁部～ 肩部1/4	

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調整・手法	色調 外面 内面	胎土 量／粒度長／鉱物	焼成	遺存度	備考
290 二八	大型鉢 (土師器) S O -301	40.2 —	外面：ハケナデ (6~9本/cm)、接合痕1条 内面：ハケナデ (8~12本/cm) 後ヘラナデ、接合痕1条	淡乳褐色	多／3／石、長、雲、角、チ、赤	良好	口縁部～肩部1/4	
301 二八	小型壺 (土師器) 第4層	12.4 — 体部最大径 11.0	外面：ユビオサエ後ハケナデ (8本/cm)、接合痕1条 内面：ハケナデ (8本/cm)、ユビオサエ後ヘラケズリ、接合痕1条	茶灰色	少／2／石、長、雲、角	良好	口縁部～体部1/3	
302 —	直口壺 (土師器) 第4層	10.6 —	外面：ヨコナデ、ハケナデ 内面：ヨコナデ、ユビオサエ後ヘラケズリ、接合痕1条	茶褐色 乳灰色	多／1／石、長、雲、赤	良好	口縁部～肩部1/8	
303 —	複合口縁壺 (土師器) 第4層	19.4 —	外面：四線文4条 内面：ヨコナデ	褐灰色	多／2／石、長、雲、赤	良好	口縁部1/6	内面に煤
304 —	同 上	18.0 —	外面：四線文2条、ヨコナデ、接合痕1条 内面：ヨコナデ、ハケナデ (6本/cm)、接合痕1条	乳褐色	少／3／長、雲、赤	良好	口縁部1/3	外面に黒斑
305 二九	同 上	14.5 —	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、ナデ	褐灰色	少／1／長、雲、角、赤	良好	口縁部～頭部のみ	
306 —	同 上	23.4 —	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヘラミガキ	暗褐色	僅／2／長、雲、赤	良好	口縁部1/8	外面に煤
307 二九	広口壺 (土師器) 第4層	16.0 24.7 体部最大径 20.1	外面：ハケナデ後ヘラミガキ 内面：ハケナデ後ヘラミガキ、ユビナデ、ヘラケズリ、接合痕2条	茶灰色	多／2／長、雲、角	良好	3/5	外面に黒斑 内面に煤
308 二九	壺 (土師器) 第4層	— 底径 4.2	外面：ヘラミガキ、ユビオサエ 内面：ヘラミガキ	明褐色	少／1／石、長、チ	良好	底部のみ	
309 二九	同 上	— — 底径 3.8	内外面共にヘラナデ	赤褐色	少／2／石、長、雲、角	良好	底部のみ	煤
310 二九	同 上	— — 底径 5.3	外面：ヘラナデ、ユビオサエ 内面：ハケナデ (8本/cm)	明褐色	少／4／石、長、雲、角、赤	良好	底部のみ	内外面に黒斑
311 —	甕 (土師器) 第4層	19.4 —	外面：ヨコナデ、タタキ、接合痕1条 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラナデ、接合痕1条	淡灰褐色	多／3／石、長、雲、角、赤	良好	口縁部1/6	内面に黒斑
312 —	同 上	13.7 —	外面：ヨコナデ、ヘラナデ 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	乳褐色	僅／2／長、雲、角、チ、赤	良好	口縁部1/8	内面に黒斑
313 二九	同 上	16.0 —	外面：ヨコナデ、タタキ (7本/cm) 内面：ヨコナデ、ハケナデ、ユビオサエ、ヘラケズリ	茶褐色	多／2／石、長、雲、角	良好	口縁部1/5	
314 二九	同 上	17.0 —	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、タタキ (6本/cm) 後ハケナデ (8本/cm) 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	茶灰色	多／3／長、雲、角	良好	口縁部1/5	
315 —	同 上	19.6 —	外面：ユビオサエ、ヨコナデ、タタキ (3本/cm) 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	明褐色	少／2／石、長、角、チ	良好	口縁部1/8	
316 三〇	同 上	13.0 16.7 体部最大径 16.2	外面：ヨコナデ、タタキ後ハケナデ (調整不明瞭) 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	暗茶褐色	多／3／石、長、雲、角	良好	3/5	外面に黒斑
317 —	同 上	14.1 —	外面：ヨコナデ、ヘラナデ 内面：ヨコナデ、ユビオサエ	明褐色	少／1／石、長、雲、角	良好	口縁部1/8	讃岐産
318 三〇	同 上	15.0 — 体部最大径 22.2	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ (不明瞭) 内面：ヨコナデ、ユビオサエ後下半部へラケズリ	茶褐色	多／1／長、雲、角、赤	良好	1/4	讃岐産
319 三〇	同 上	— — 底径 4.0	外面：タタキ、ユビオサエ、中央に穿孔 内面：ヘラナデ	茶灰色	多／4／石、長、雲、チ、赤	良好	底部のみ	
320 三〇	同 上	— — 底径 4.2	外面：タタキ 内面：ヘラナデ、ユビオサエ	茶褐色	多／2／長、雲、角	良好	底部のみ	内面に煤

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量	口径 器高	調整・手法	色調 外面 内面	胎土 量／粒度長／鉢物	焼成	遺存度	備考
321 三〇	甕 (土師器) 第4層	— 底径	— 4.6	外面：タタキ 内面：ヘラナデ	淡茶灰色 暗灰色	多／2／石、長、 雲、角	良好	底部 2/3	
322 三〇	同上	— 底径	— 4.4	外面：ユビオサエ、タタキ 内面：ヘラナデ	灰白色	多／2／石、長、 角、チ	良好	底部のみ	外面に黒斑
323 三〇	同上	— 底径	— 3.2	外面：タタキ 内面：ヘラナデ	乳灰色	少／1／長、雲、 角、チ、赤	良好	底部のみ	外面に黒斑
324 三〇	器台 (土師器) 第4層	9.7 —	—	内外面共にヘラミガキ	明褐色	多／1／長、雲、 チ、赤	良好	杯部のみ	
325 —	高杯 (土師器) 第4層	19.6 —	—	内外面共にヨコナデ、ナデ	乳白色	多／3／長、雲、 チ	良好	口縁部 1/6	
326 —	同上	22.7 —	—	外面：磨滅の為調整不明瞭(杯底部はユ ビナデ) 内面：ヘラミガキ	茶褐色	少／2／石、長、 雲、角	良好	口縁部 1/5	
327 —	同上	— 底径	— 15.3	外面：ヘラミガキ、四方孔を穿つ 内面：ユビオサエ、ハケナデ(6本/cm)	明褐色	少／1／長、雲、 角、赤	良好	脚底部 1/2	
328 三〇	小型鉢 (土師器) 第4層	9.1 5.0	—	内外面共にユビオサエ後ハケナデ	暗茶褐色	多／3／石、長、 赤	良好	ほぼ完形	
329 三〇	同上	12.3 —	—	外面：ヨコナデ、ヘラナデ、ユビオサエ 内面：ヨコナデ、ヘラナデ	褐灰色	少／0.5／長、雲	良好	1/6	
330 三〇	同上	— 底径	— 2.5	外面：ナデ(不明瞭) 内面：ヘラナデ	乳白色 暗灰色	多／3／長、角	良好	体部～底 3/5	外面に黒斑
331 三〇	同上	14.7 —	—	外面：凹線文(1条)、ナデ 内面：ヨコナデ、ヘラミガキ	赤褐色	多／2／石、長、 チ	良好	3/5	
332 —	大型鉢 (土師器) 第4層	31.6 —	—	外面：ヨコナデ、一部ハケナデ(6本/ cm) 内面：ヨコナデ、一部ハケナデ、ヘラケ ズリ	茶褐色	多／4／長、雲、 角	良好	口縁部 1/8	
333 三〇	脚台 (土師器) 第4層	— 底径	— 9.5	内外面共にハケナデ(7本/cm)、外面 に接合痕1条	乳灰色	多／2／石、長、 チ	良好	脚台部 4/5	

第4節 小結

本調査区では、古墳時代前期・奈良時代・中世の概ね3時期に亘る遺構面を検出した。古墳時代前期については、北部の第14次調査で検出した集落の続きを示すものであるが、遺構・遺物の希薄さと周辺の既往の調査から本調査区は集落の縁辺地であったと思われる。しかしながら、落ち込み状遺構(SO-301)内から出土した壺・甕等多器種におよぶ土器群は、当該期の地域間交流をはじめ生活様相の一端を知る上で好資料と言える。奈良時代の小範囲ながらも居住域の存在を明示する遺構の検出は、調査地の北西部で市教委の遺構確認調査で見つかっている該期の井戸とあわせて、今後周辺における調査に注意を促すものである。中世の生産域を実証する水田遺構は、当地が最近におけるまで農耕を基盤とした土地柄であったことを物語るものであり、今後の調査も含め条里復元の一助となろう。

第5章 まとめ

中田遺跡は既往の調査結果から、時代別ではとくに古墳時代前期の遺構・遺物が隨所にみられることが周知されており、くわえて吉備・山陰・四国といった他地域産の土器の出土も河内のなかの遺跡では群を抜いていると言える。本調査においても制約された狭長な調査区ではあったが、当初の予想通り古墳時代前期の集落遺構および多量の遺物を検出することができた。さらに該期以外の時代においても、既往の調査結果に追証できる成果が得られた。以下、第14次調査・第25次調査で検出した弥生時代後期末・古墳時代前期・奈良時代・中世の4時代について、既往の調査と対応させながら概観し、まとめとしたい。なお、本文中における既往の調査地点①～⑩については第1表—I、IIを参照されたい。

＜弥生時代後期末＞

該期については生活面を確認するすることはできなかったが、第14次調査地で検出した古墳時代初頭の遺構であるSW-301とSP-301～SP-306の遺構内に、弥生第VI様式の遺物が混在しているのが看取できた。これは該期の遺構が存在していたことを暗示するものであり、古墳時代に入り、集落形成に伴って削平・整地された可能性が高いと言える。既往の調査で本調査地に近接するところでは、北部にあたる②で弥生時代後期の河川を検出している以外、近隣では該期の生活面は確認されていない。また、当遺跡南部全体をみても③・⑩・⑪の3箇所で河川遺構は確認されているが、②-1の土器集積を除くと人為的に顕著な遺構面はまだ見つかっていない。しかし、南側に隣接する東弓削遺跡北部の⑬～⑯では弥生時代中期～後期の集落や墓域に関連した遺構が検出されており、中田遺跡南部と東弓削遺跡北部間のつながりに興味がもたれる。

＜古墳時代前期＞

両調査区の遺構の分布状況を対比させた場合、第14次調査地での集落を構成する遺構の豊富さに対して、第25次は落ち込み1箇所と小穴7個という希薄な状況である。そこで第25次調査で検出した落ち込み(SO-301)を「ゴミ捨て場」的性格をもつものとし、この遺構が北部の第14次調査地を中心とした集落域の南部縁辺の地を意味するものと想定して周辺の既往の調査をみたい。まず西側からみていくと、第14次調査地の西約70mの⑩では、本調査地より一時期古い古墳時代初頭(庄内式期新相)と、本調査地とほぼ同時期になる古墳時代前期(布留式期古相)の2時期に亘る生活面が検出されている。本調査地では初頭にあたる遺構として第14次調査のSW-301とSP-301～SP-306があり、前期の遺構および遺物包含層内に庄内式期の所産とみられる遺物も若干混在しているところから、本調査地にも⑩で検出された

生活面が広がっていると捉えても大過ないであろう。次に⑩から北西約50mの④-2では、弥生時代中期ないし後期から古墳時代前期まで流れていた自然流路が確認されており、本流路が⑩で検出された集落と有機的な関係にあったことが推察される。さらに④-2の南北線上に伸びる⑯・⑭の楠根川河川改修工事に伴う一連の調査でも、庄内式古相～布留式古相を主とした該期の集落遺構が検出されている。しかし、遺構の分布状況をみると⑭では北半部に比べて南半部が希薄であり、東に並行する今回の第25次調査と共に性格をもつかのようにみられる。「もつかのようにみられる。」としたのは、⑭の南半部では古墳時代前期でも後にあたる古墳が検出されており、一時期前にあたる北半部と同時期の集落遺構が古墳造営の際に消滅した可能性もありうるわけで、実証するには⑭の南半部と第25次調査地間の面的解明が必要であることは言うまでもない。第14次調査地の北側では⑩-1・⑪の2箇所で該期の遺物包含層が確認されている。次に本調査地の南東部にあたる⑤では、庄内式新相～布留式古相に比定される多量の遺物と共に溝状遺構が検出されている。その東方の⑦・⑫の2箇所では、いずれも同時期とみられる遺構あるいは遺物包含層が確認されている。この⑦・⑫の2箇所については、本調査地との距離間やその南側の東弓削遺跡内で検出されている該期の遺構との位置関係からみて、東弓削遺跡北部の集落遺構に付随するものではないかと思われる。以上周辺に近接する調査結果から要約すると、現段階では今回の第14次調査地とその西側の⑩付近が集落の中心であり、第25次調査地の南半部以南はその僻地にあたると想定される。いずれにせよ調査されている箇所は中田遺跡南部全体からみればほんの一部であり、しかも面的には点と線のつながりにおいてのみなので憶測の域を出るものではない。くわえて南に位置する東弓削遺跡北部における調査の累積を待って再度検討したい。

今回の調査で特筆すべき遺構に、第14次調査で検出したS E-201の丸太の剝抜き材を使用した井戸がある。木組み井戸は弥生時代中期初頭に奈良県唐古遺跡(註7)においてその初源をみるが、木組み井戸が主流を成すのは奈良時代以降からであり、古墳時代はまだ素掘り井戸が主体である。また、そういった古墳時代の数少ない木組み井戸のなかでも多大な労力をかけたであろう丸太材の一木剝抜きはさらに検出例が少なく、後の時代に多くなる分割した丸太を剝抜いて組み合わせる井戸の先駆的な形態と言える。最近では、大阪府の和泉市と泉大津市にまたがる池上曾根遺跡で、クスノキを剝抜いた内法径約2mの井戸側をもつ弥生時代中期後半とされる井戸が発見された。この井戸は最古にして最大である以外に、神殿または宮室と評価される「大型高床式建物」と石器および石材の「埋納遺構」とともに祭祀空間を構成する遺構で、井戸水は神聖なものとして王権儀礼に使用された可能性が高いと考えられている(註8)。本調査で検出した井戸は類例の少ない丸太剝抜き井戸として共通する以外は、時期・規模とともに異なる。しかし、使用目的については生活用水を得るためだけのものではなく、その特異性をも

つ形態からもう1基のS E-302にみられるような素掘りの井戸とは、ある種離脱したものであったと思われる。宇野隆夫氏の論考^(註9)によれば、「木組み井戸は弥生時代後期になると形態では北九州地方は中期以来の素掘り井戸、瀬戸内地方は縦板組み円形井戸、畿内地方は丸太刳抜き井戸、東海地方は縦板組方形・同横桟どめ井戸といった一定の地域差が生まれ、やがて次の古墳時代を迎えて木組み井戸が変化していく中で、先の地域色が不明確になっていく反面、丸太刳抜き井戸が素掘り井戸や縦板組み井戸より格式の高い型式として用いられるようになる[黒崎1976]」^(註10)と考察されている。先述の池上曾根遺跡のような神聖かつ祭祀用としての役割をもった井戸であったか否かは別として、氏の指摘と今回の丸太刳抜き井戸の検出を考えあわせると、本井戸を検出した地点すなわち集落の中心となる場所であったと言えよう。さらに興味深いことに、井戸内の投棄された土器の中には、破片を含め4個体分の吉備産の甕が含まれていた。当遺跡内では、既往の調査から古墳時代初頭～前期に及んで多量の他地域産の土器が搬入されていることは周知されているが、そのなかでも吉備地方のものが多い。特に顕著な調査例では③があり、ここでは古墳時代初頭（庄内式期）に比定される甕・高杯・鉢等が土坑内から一括性の高い状態で検出され、数量的には他地域系のものが河内産のものを凌駕し、大部分は吉備系のものと報告されている。また、②-1では弥生時代後期～古墳時代初頭（庄内式期）に比定される土器集積内から高安山の山麓付近で製作された3点の大型器台が出土している。この大型器台はその調整・形態から円筒埴輪に類似するものであり、円筒埴輪の起源が吉備地方の「特殊器台」に求められる^(註11)ことから勘案するとその影響が窺われる。今回、丸太の刳抜き井戸内に投棄された吉備産の土器も、吉備地方からの集団の移動を背景にした集落構造に一考をうながす資料と言えよう。

<奈良時代>

第25次調査の北部で集落域の一端を検出した。調査区全域からみれば小範囲であるが、柱根が残存する柱穴や建物を区画するとみられる溝、そして土坑といった居住域を明示する顕著な遺構である。基本層序模式図をみてもわかるように、第14次調査地では中世期の耕地化によって生活面が削平されたとみられ、その耕作溝内に中世の土器片とともに該期の土器片が僅少ながら混在している。第25次調査地については、遺構を検出した北部以外は中世期における河川の氾濫あるいは中世期の水田形成の際に削平を受けたことが考えられる。周辺における調査では南東約200mの⑫で遺物包含層、また地図には掲載していないが、最近では本調査地から北西約100m地点において市教委が実施した遺構確認調査によって井戸が検出されている。周辺以外でみると北東350mあたりの⑭-1・⑯-1では居住域を示唆する溝や小穴が検出されており、この2地点については有機的関連が窺える。このように現在までの調査では、当遺跡南部全体をみても該期の生活面はかなり僅少であり、その要因としてはやはり先述したように

洪水または中世期以降の耕地化による消滅が挙げられよう。

ここで発掘調査以外で当地の歴史的様相をみると、本調査地から南西へ約200m地点には由義神社があり、その境内には『由義宮旧址』と刻まれた碑が建てられている。『由義宮』は、弓削道鏡が称徳天皇の信任を得、その郷里に設けられた行宮で、後ここに『西の京』が造営される計画であったが、宝亀元年（770年）に天皇が崩御され、その計画も中止されることとなった。『由義宮』については足利健亮氏註12)が、「短い期間ではあるが、この宮が『西京』と称され、また『尔詩乃美夜古（にしのみやこ）』と歌われた史料上の事実に基づいている。」という氏自信の見解から『由義京』として疆域を推考されている。そのなかで「由義宮」域については由義神社とそれより南へ約1590m（3里）地点の弓削神社を結んだ線を宮の西端とし、〔東西2里×南北3里〕とする案とそれよりさらに東側へ広げた〔3里四方域〕とする二つの試案を挙げられている。いずれにせよ、由義神社付近が『由義宮』域の北西隅にあたる地点になるわけで、由義神社が古く牛頭天王で除疫神であったという伝承から、それが宮城四隅の疫神に起源するものと考えればひじょうに興味深いところである。考古学的には関連するとみられる遺構は現在までのところ確認されておらず、それは都の造営が計画されて僅か十ヵ月で廃止されたことから、整地の段階までで宮殿の建築着手には及んでいなかったとするのが一般的な解釈となっている。しかし、周辺における市教委の遺構確認調査も含め、既往の調査では該期の遺物包含層が確認されており、『西の京』造営に関連した遺構・遺物の存在もまだまだ皆無とは言えず、今後の面的な調査に期待がかかる。

<中世>

第14次調査地では、調査区北端部で自然河道1条と部分的に耕作に伴うとみられる鋤溝跡数条を検出、第25次調査地内では南端部で辛うじて水田畦畔を検出するに至った。自然河道については南肩（岸）を検出したが、㉚-1の調査では該期の土器片を含む比較的安定した堆積層が確認されており、ここに本河道の北岸あるいは洪水層によって埋没した遺構面が存在するとみられる。他に周辺の調査をみると㉛・㉜では、やはり洪水層によって埋没したと考えられる水田跡が検出されている。したがって第25次調査地の南端部で検出された水田遺構についてもその拡がりの一部として捉えられよう。第14次調査地で検出した数条の鋤溝についても畠地における畝溝というよりは、収穫前に排水を目的として掘られた「水抜き溝」であった可能性が高い。さらに北部に位置する㉖では、それを裏付けるかのように洪水層にパックされた鎌倉時代の水田に伴う畦畔や溝が検出されている。当地は条里でいうと若江郡に位置し、八尾市二俣で分流した玉串川と長瀬川に挟まれた低湿な地域であり、水量も豊富なことから水田を形成するには好条件の土地であった。しかしその反面、大雨ごとに川が氾濫し、幾度も洪水にみまわれ、人々は人工河川や堰を築いて防御した。今回の調査は言うに及ばず他の調査区

からも土層の堆積状況や決壊した堰の残骸とみられる木杭等の出土から、当時の自然条件の厳しさと共に生きる人々の知恵を窺い知ることができる。条里については、最近の耕地区画整理によってほとんど破壊され遺存していないと思われるがちであるが皆無ではなく、たとえ小規模な調査区であっても発掘によって畦畔や溝・ヒトの足跡から水田区画が発見されることがある。この累積資料から点と線を繋いで条里復元を試みることは可能であろう。

以上、今回の調査から得た見解に既往の調査結果を対応させて、4時代を概観した。その中でも、検出した遺構・遺物の内容から結果的に古墳時代前期について主眼を置くものとなってしまった。これは該期が他の時期に比べて河川の氾濫等にみられる自然災害が少なく、生活面を形成するうえで安定した土地基盤であったことを物語るものと言えよう。また、時代は前後するが、当遺跡では既往の調査結果から弥生時代後期までは集落も散発的であり、遺構・遺物から人口増大の兆しが窺えるのは弥生時代後期末から古墳時代前期初頭（庄内式期）である。それは該期にみられる他地域からの多量の土器の搬入を背景とする集団の移動に起因するものであり、さらにその中には古墳造営に関わる人々が多分に含まれていたことが推察される。次の奈良時代の遺構・遺物の希薄さについては、『日本書紀』・『続日本紀』などの正史から8～9世紀に大和川・淀川の決壊を起因として河内平野全域にわたって洪水が多発したことによる因を求める。しかし、ここで注意しなければならないのは今回だけでなく既往の調査においても僅少とはいへ発見されている該期の遺構・遺物の存在である。これらは『由義宮』および『西の京』の実態を究明するうえで貴重な資料であり、とくに由義神社に近接した当地周辺において発掘するには細心の心構えが必要である。中世に至っては条里制区画の復元があるが、奈良時代の生活面と層位レベル的にかなり近接したところにあるうえに、現地盤（ここでは現代の区画整備された道路上ではなく、現代の耕作土上面をいう）からも非常に浅いところに存在するもので、奈良時代と同様にやはり慎重な発掘を要しよう。

(註)

(註7) 第14次調査 (註4) 参照

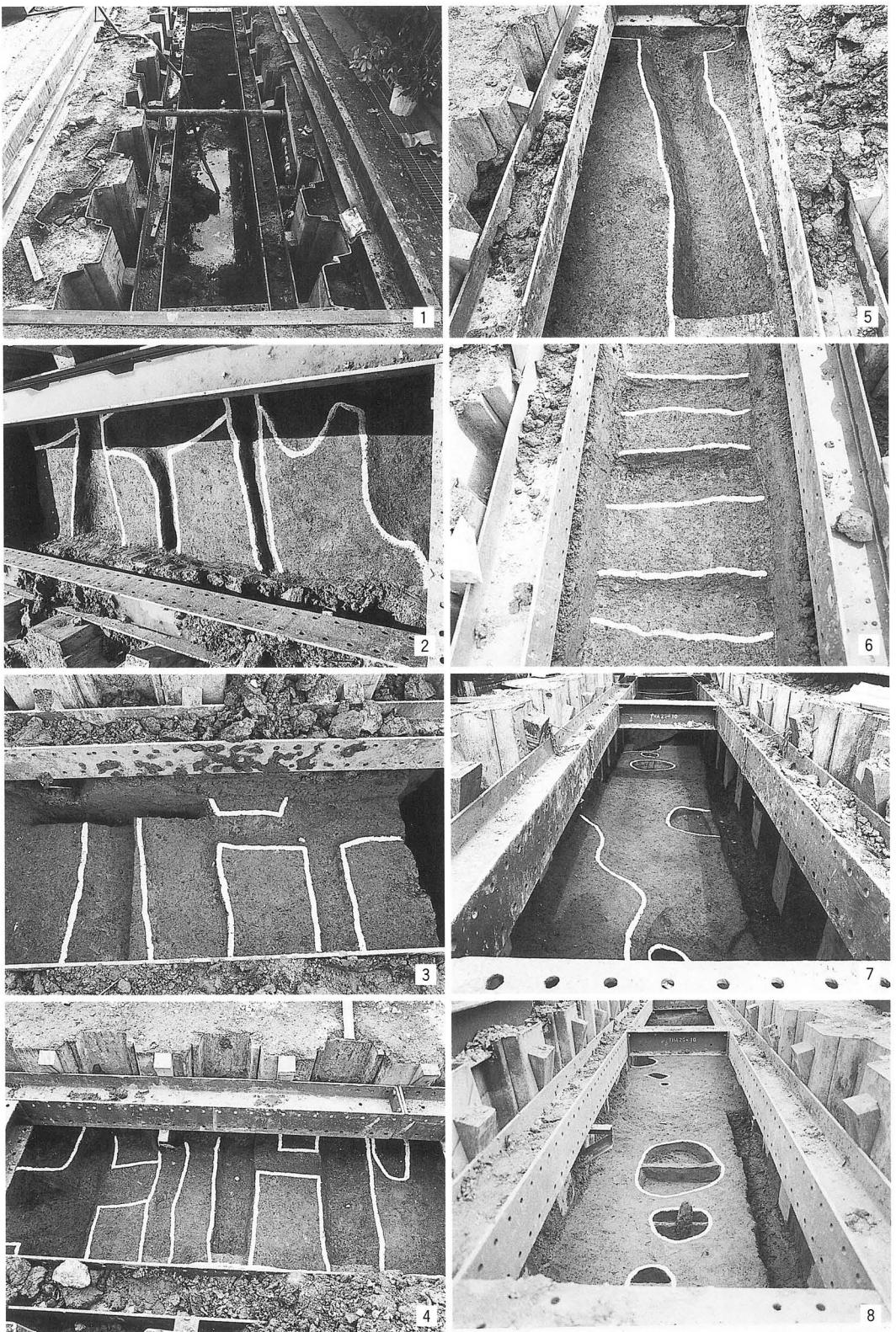
(註8) 乾哲也1996.2「2. 史跡池上曾根遺跡の発掘調査－平成6年度調査を中心に－」『大阪府下埋蔵文化財研究会 (第33回) 資料』

(註9) 宇野隆夫1986.1「3 井戸」『弥生文化の研究 7 弥生集落』<編集>金闇恕／佐原眞 雄山閣出版株式会社

(註10) 黒崎直1976「平城宮の井戸」『月刊文化財』4月号

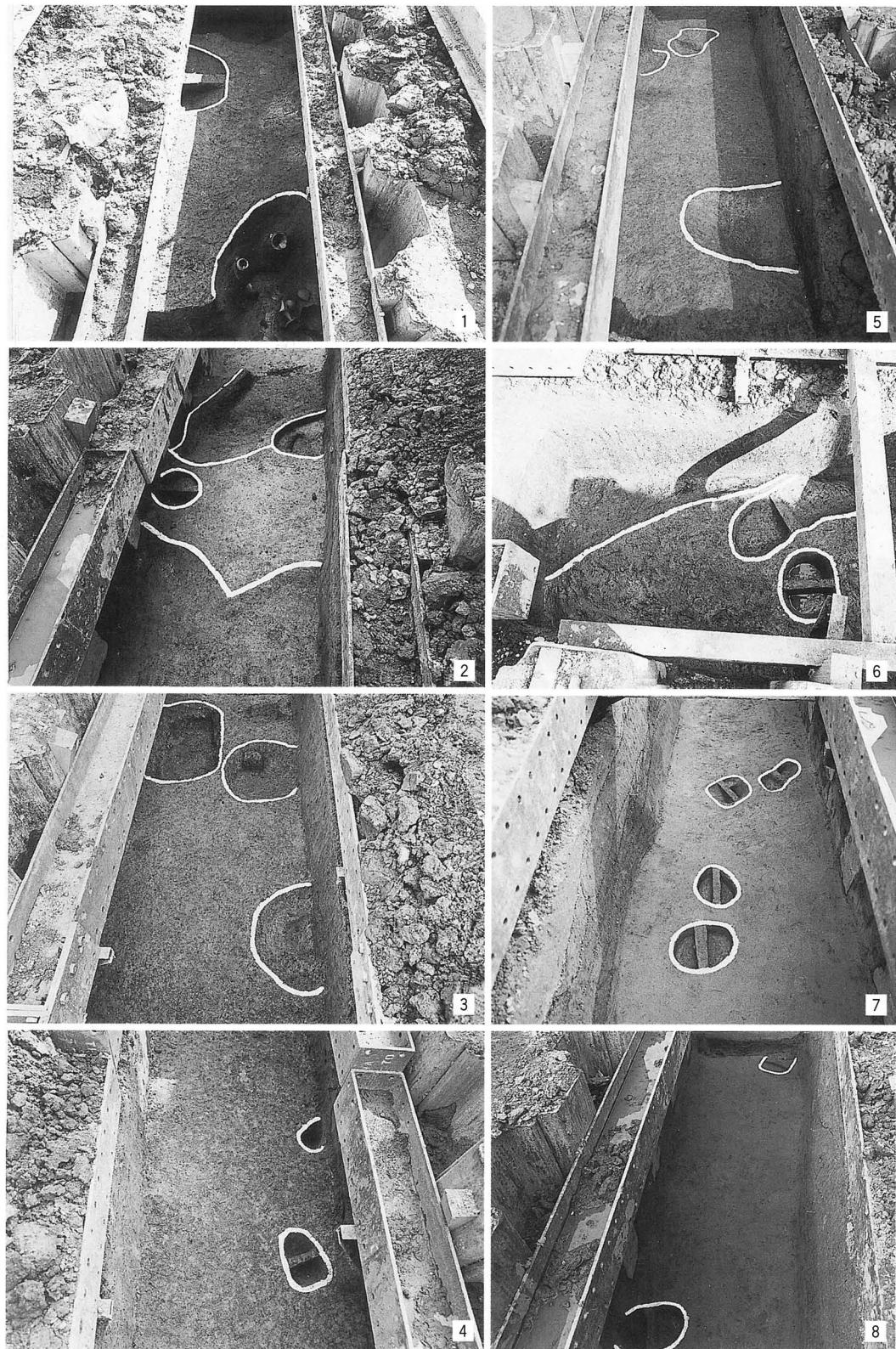
(註11) 足利健亮1986.6「由義京の宮域および京城考」『長岡京古文化論叢』－中山修一先生古稀記念事業会－ 株式会社 同朋出版

図 版



1.第1遺構面 NR-101 (北から)
2.同 上 I区 (北から)
3.同 上 L区 (西から)
4.同 上 M区 (東から)

5.第1遺構面 SD-116 (南から)
6.同 上 N区 (北から)
7.第2遺構面 E区 (南から)
8.同 上 F区 (北から)



1. 第2遺構面 H区北部 (北から)
2. 同 上 I区 (南から)
3. 同 上 K区 (南から)
4. 同 上 M・N区 (北から)

5. 第2遺構面 N区 (南から)
6. 同 上 O区 (西から)
7. 第3遺構面 I区 (北から)
8. 同 上 J区 (北から)



SE-201井戸側上部（北東から）



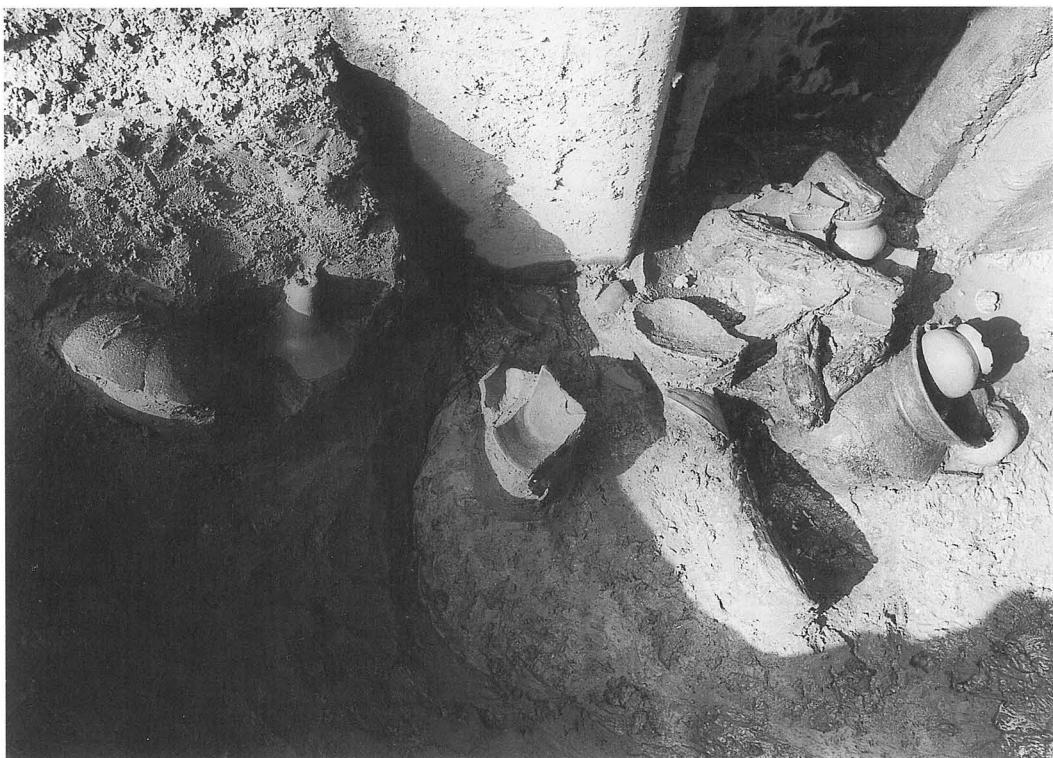
SE-201井戸側下部（北東から）



SE-201井戸側内遺物出土状況（東から）



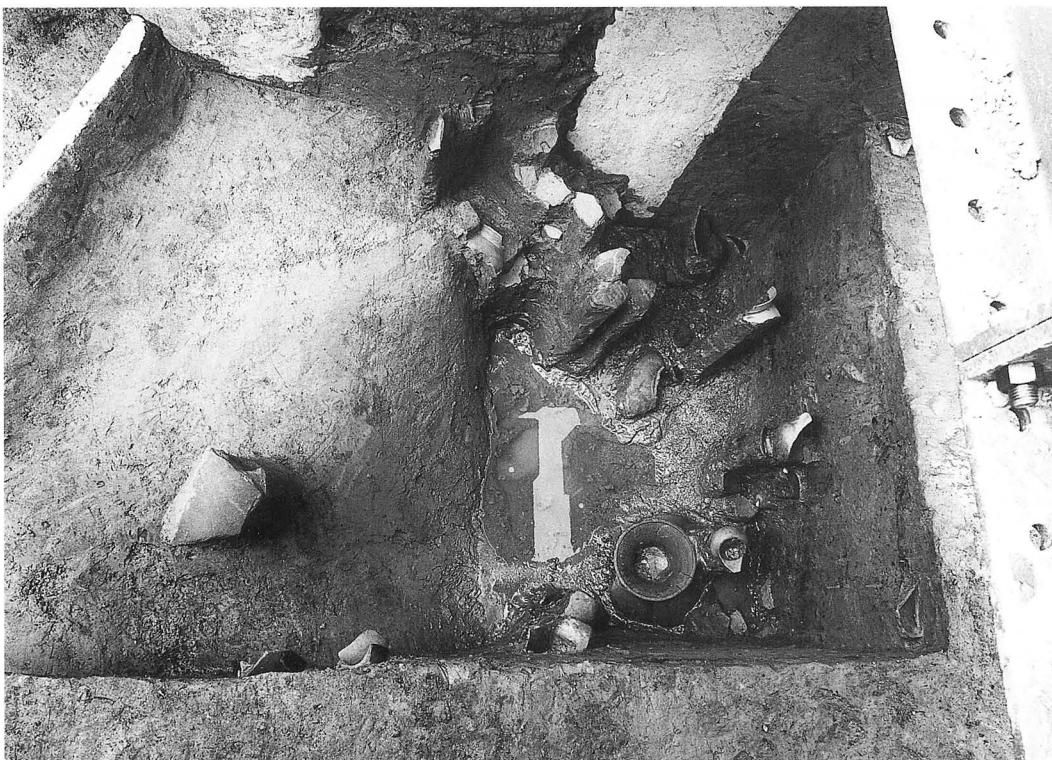
SE-202上層Ⅰ（東から）



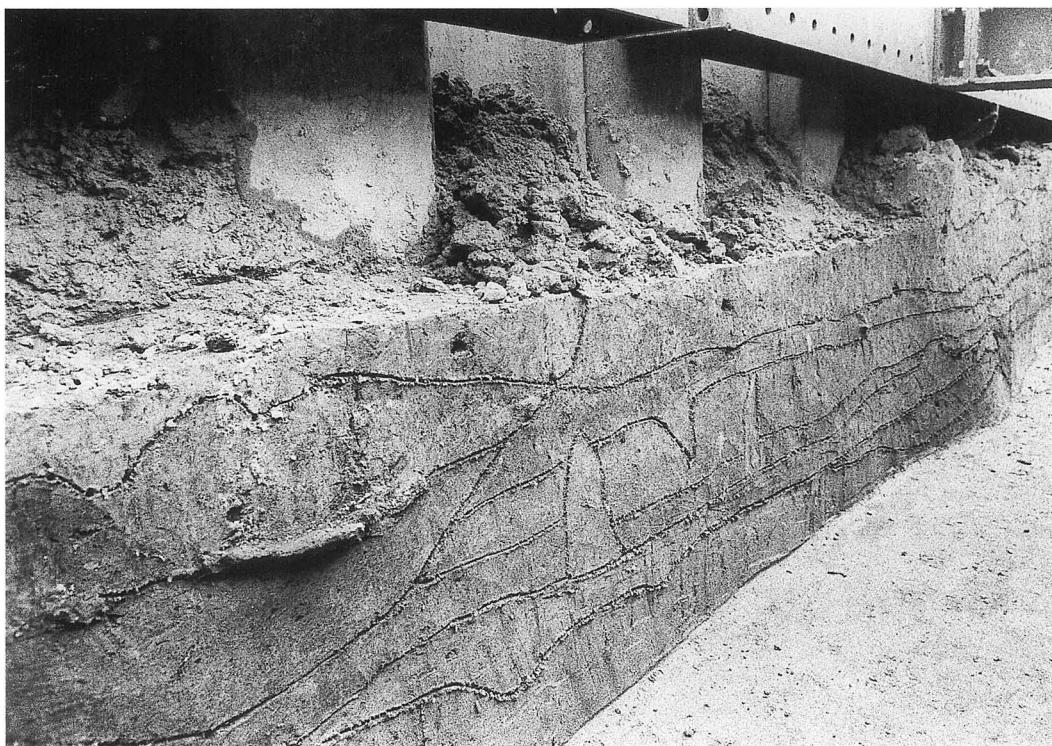
SE-202上層Ⅱ（東から）



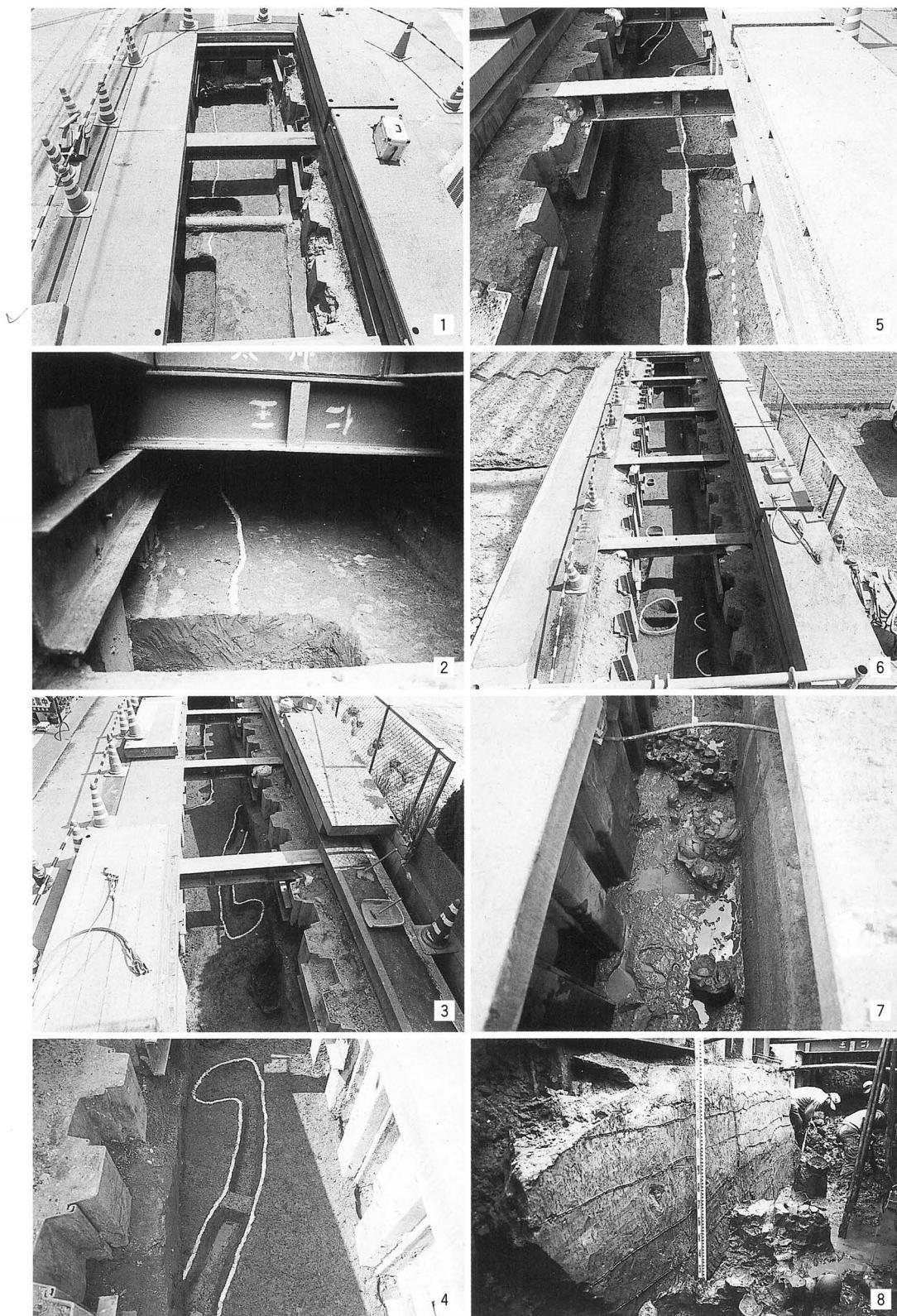
SE-202下層（東から）



SK-201 (東から)



H区～J区東壁面 (北西から)



1.第1遺構面 水田畦畔(北から) ✓	✓5.第2遺構面 SD-202(南から)
2.同 上 ✓	✓6.第3遺構面 小穴・土坑(北から)
3.第2遺構面(北から) ✓	✓7.SO-301(北から)
4.同 上 SD-201(南から) ✓	✓8.SO-301西壁面(南東から)



SO-301<北部>遺物出土状況（西から）

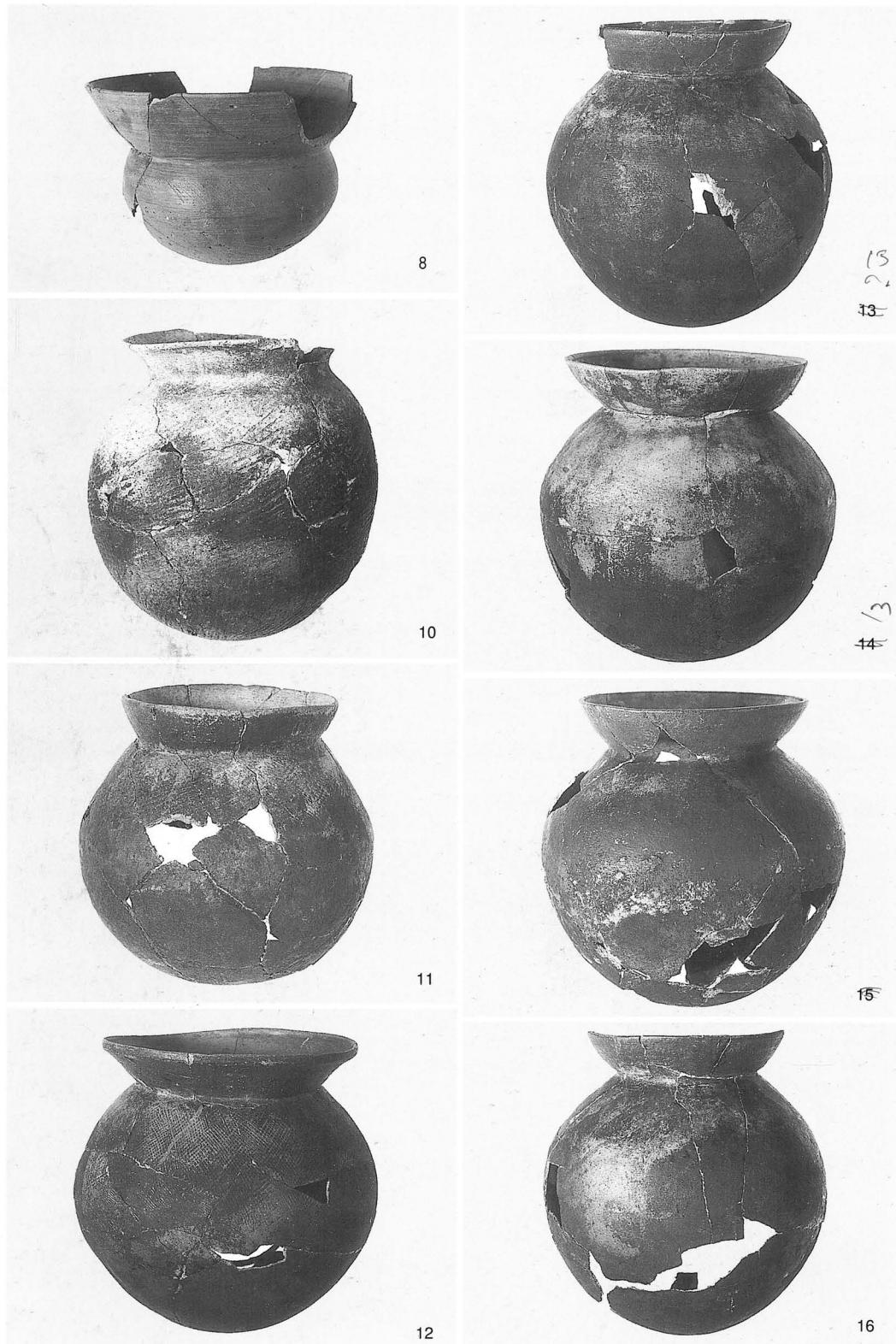


SO-301<南部>遺物出土状況（西から）

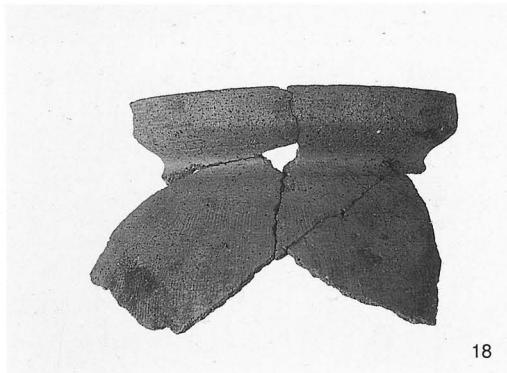


✓ 1 .SE-001 井戸側<上部>検出状況(東から)
 ✓ 2 .同 上 井戸側<下部>検出状況(東から)
 ▽ 3 .SP-302および遺物出土状況(南東から)
 4 .SP-302掘方断面(東から)
 ✓ 5 .SO-301遺物検出状況(北から)

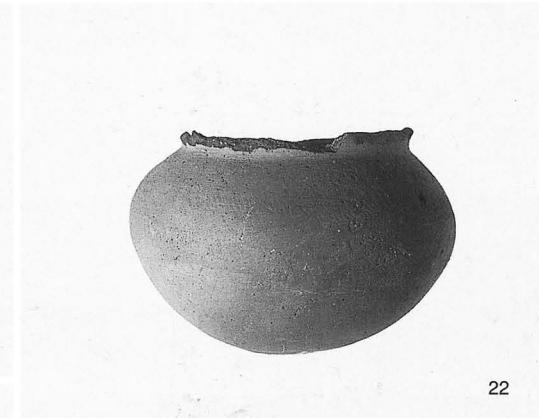
圖版一〇 第14次出土遺物



圖版一一 第14次出土遺物



18



22



19



28
23-



20



24



21



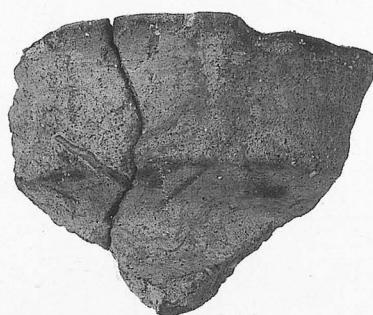
25

SE-201 (18~20)、SE-202 (21~25)

圖版一二 第14次出土遺物



23
26



31



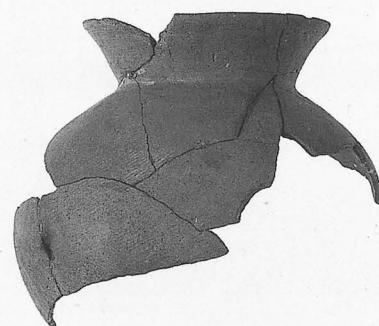
27



33



28



34

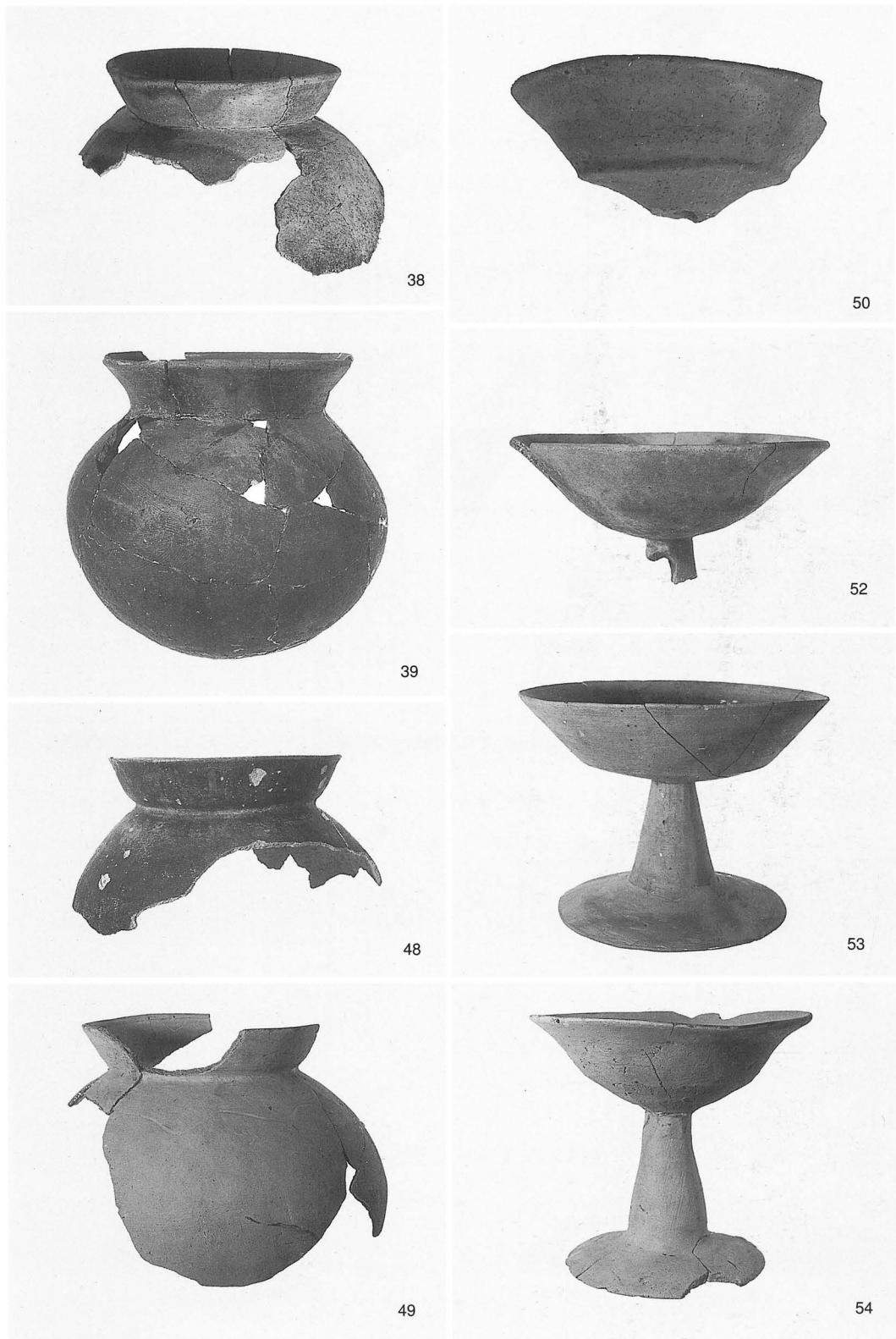


30

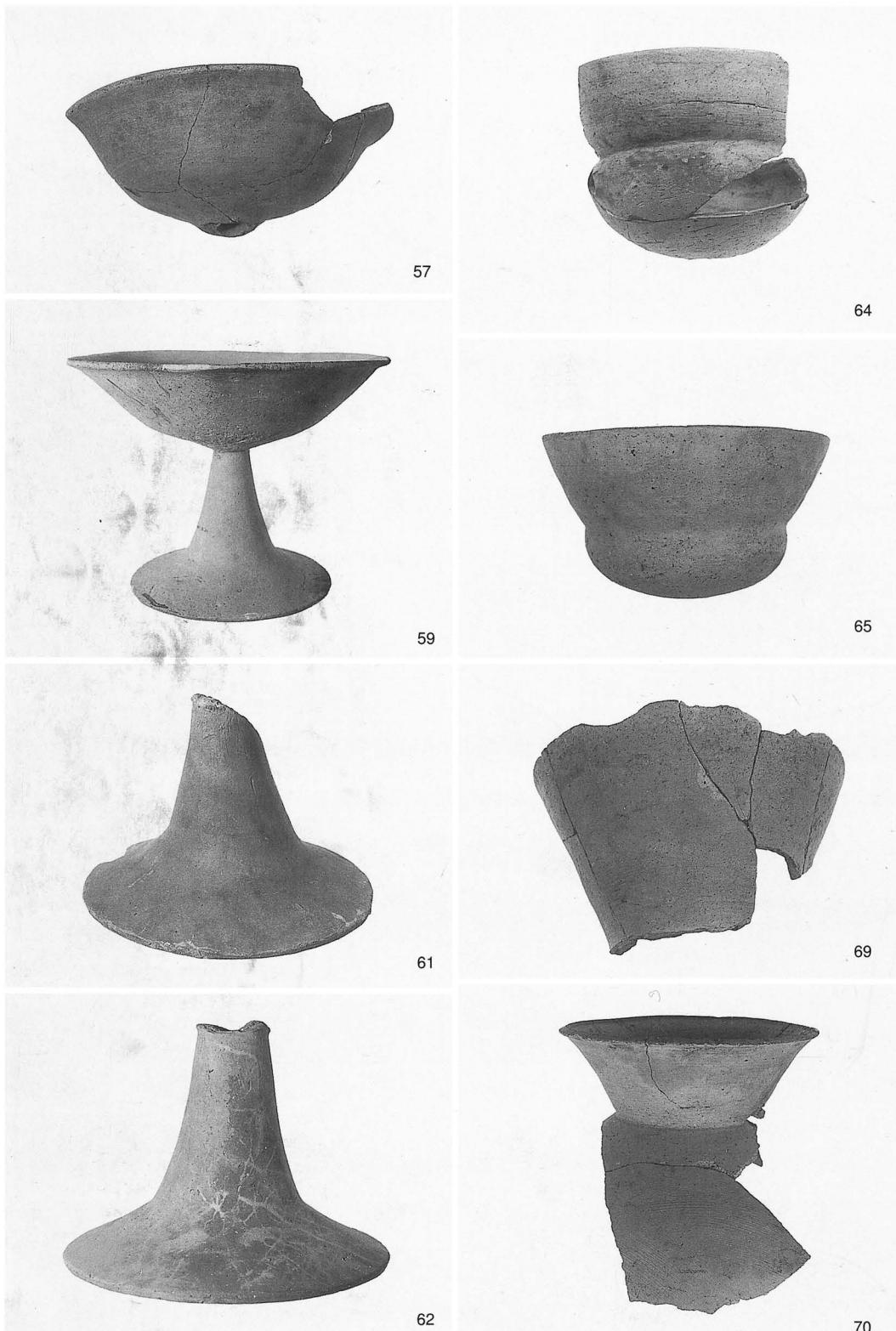


35

図版一三 第14次出土遺物

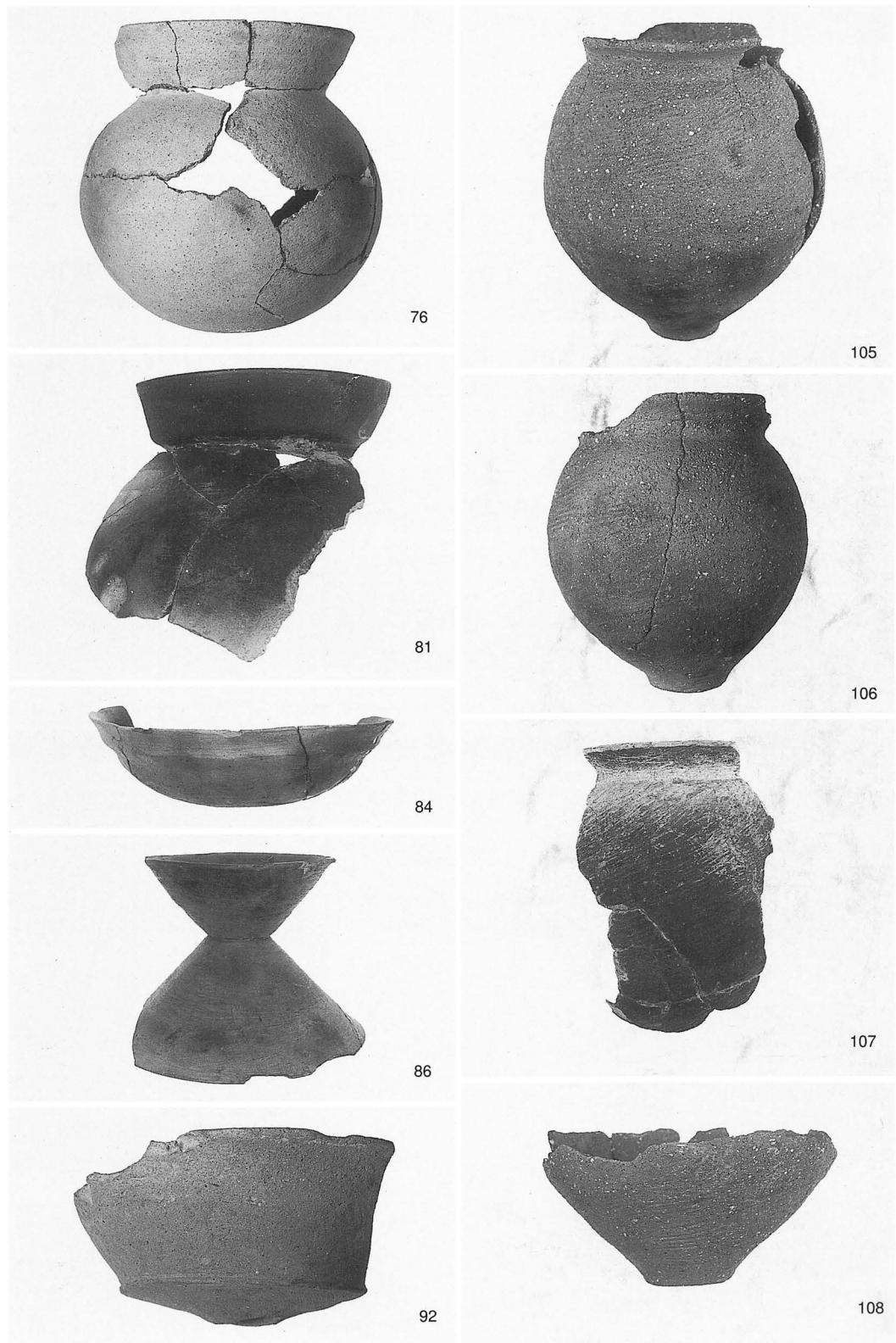


圖版一四
第14次出土遺物



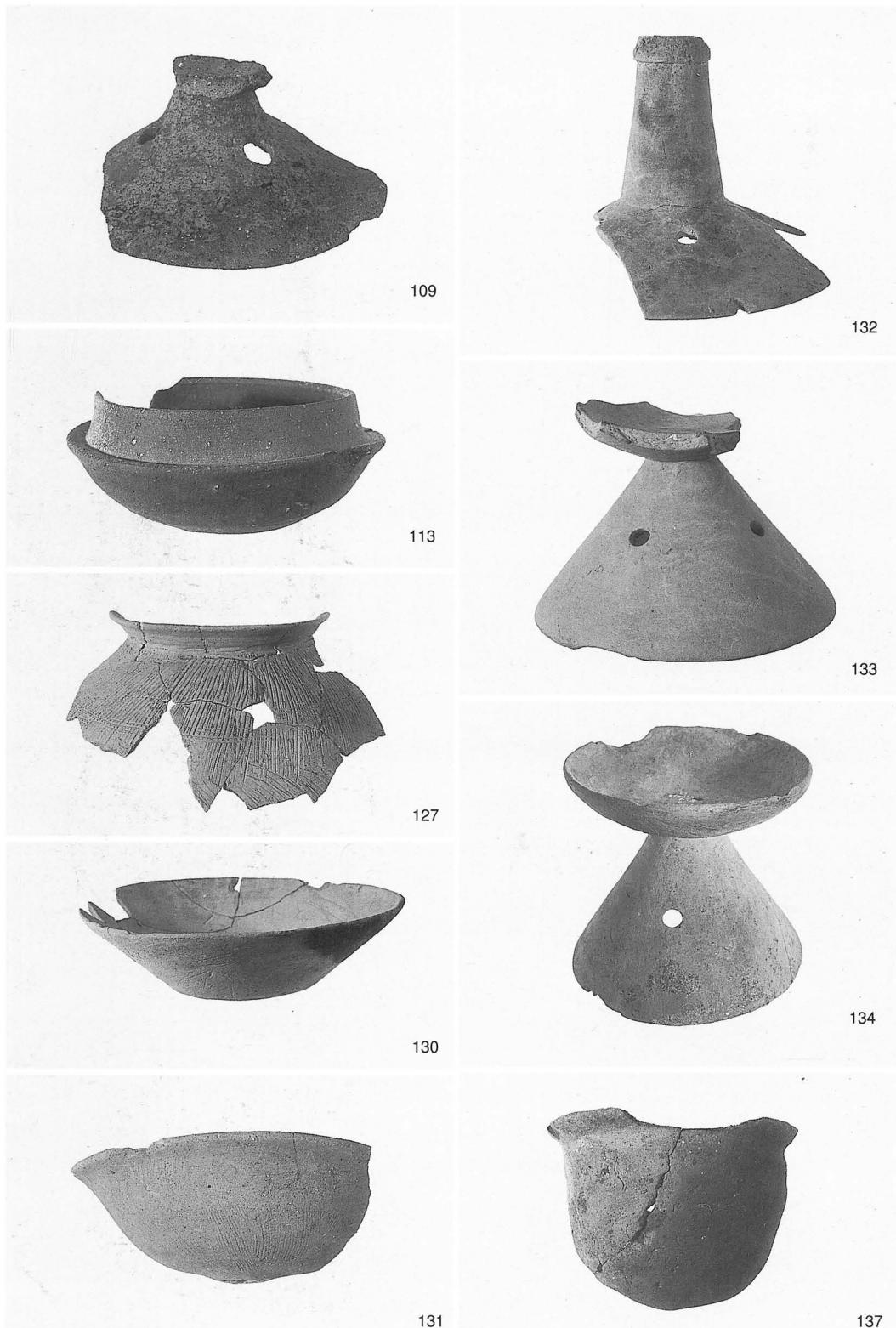
SE-202 (57·59·61·62)、SK-201 (64·65·69·70)

図版一五 第14次出土遺物



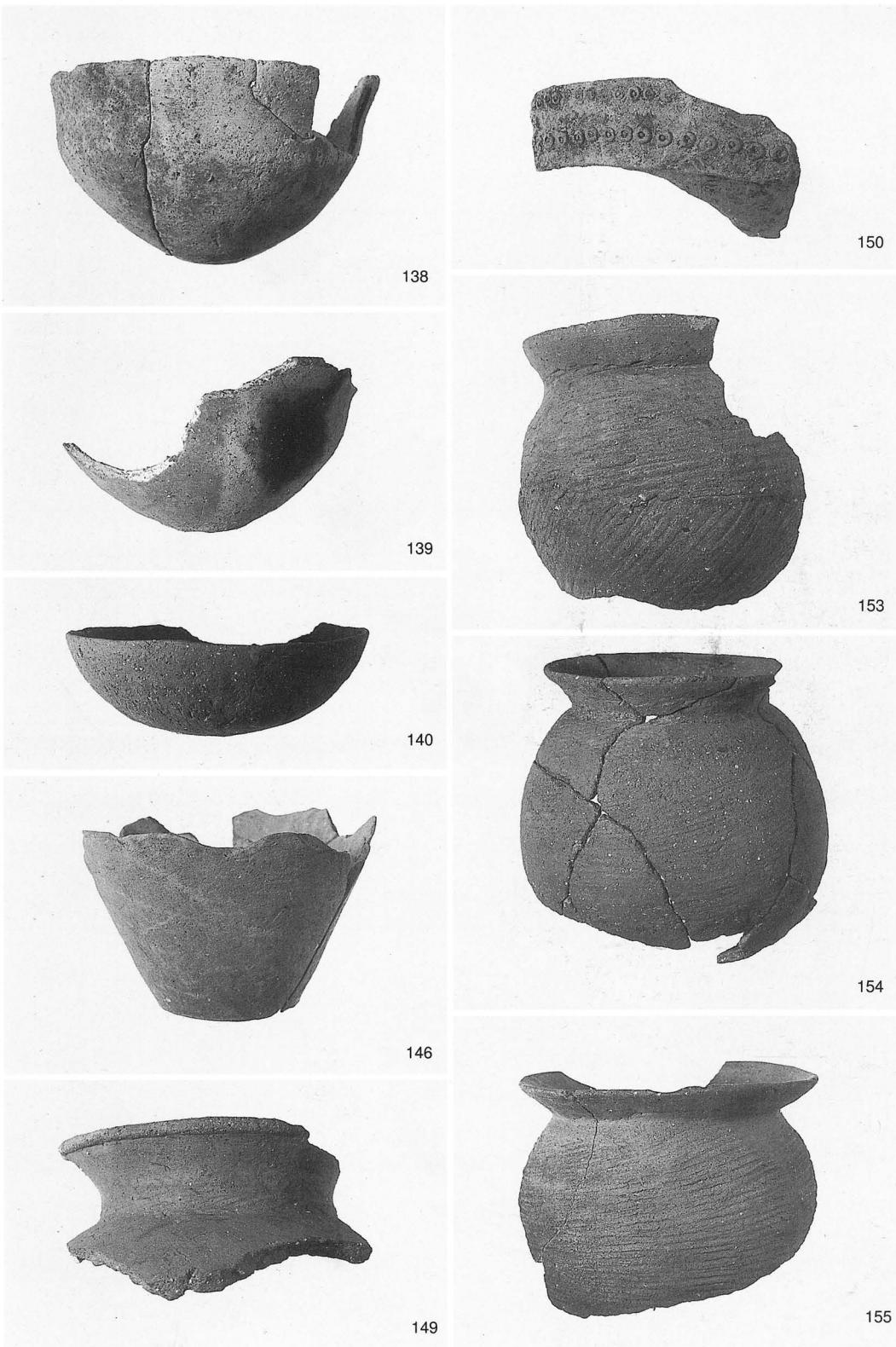
SK-201 (76・81・84・86)、SK-204 (92)、SW-301 (105~108)

圖版一六
第14次出土遺物



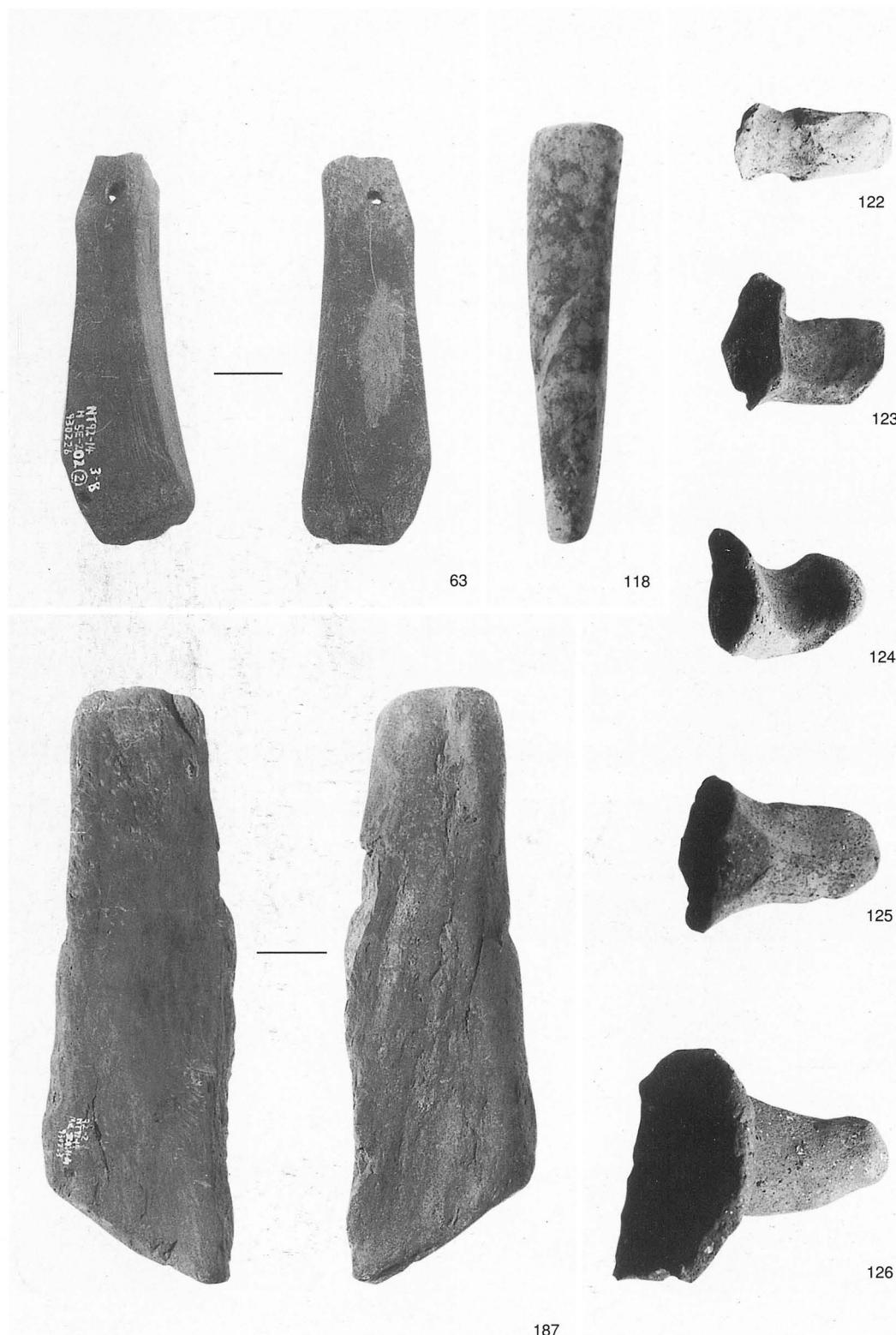
SW-301 (109)、第3層 (113)、第4層 (127・130~134・137)

圖版一七 第14次出土遺物

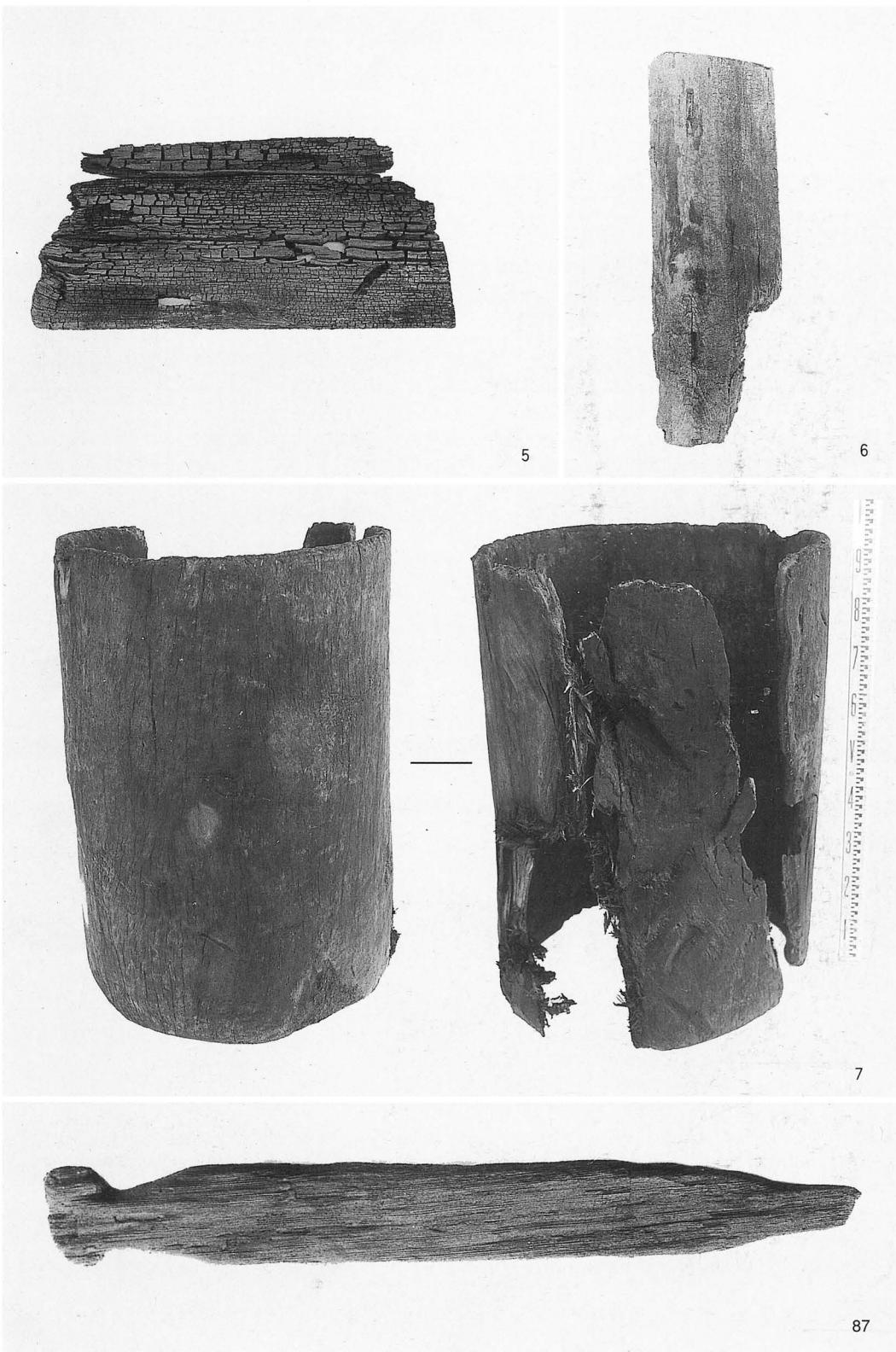


第4層（138～140）、第5層（146・149・150・153～155）

図版一八 第14次出土遺物

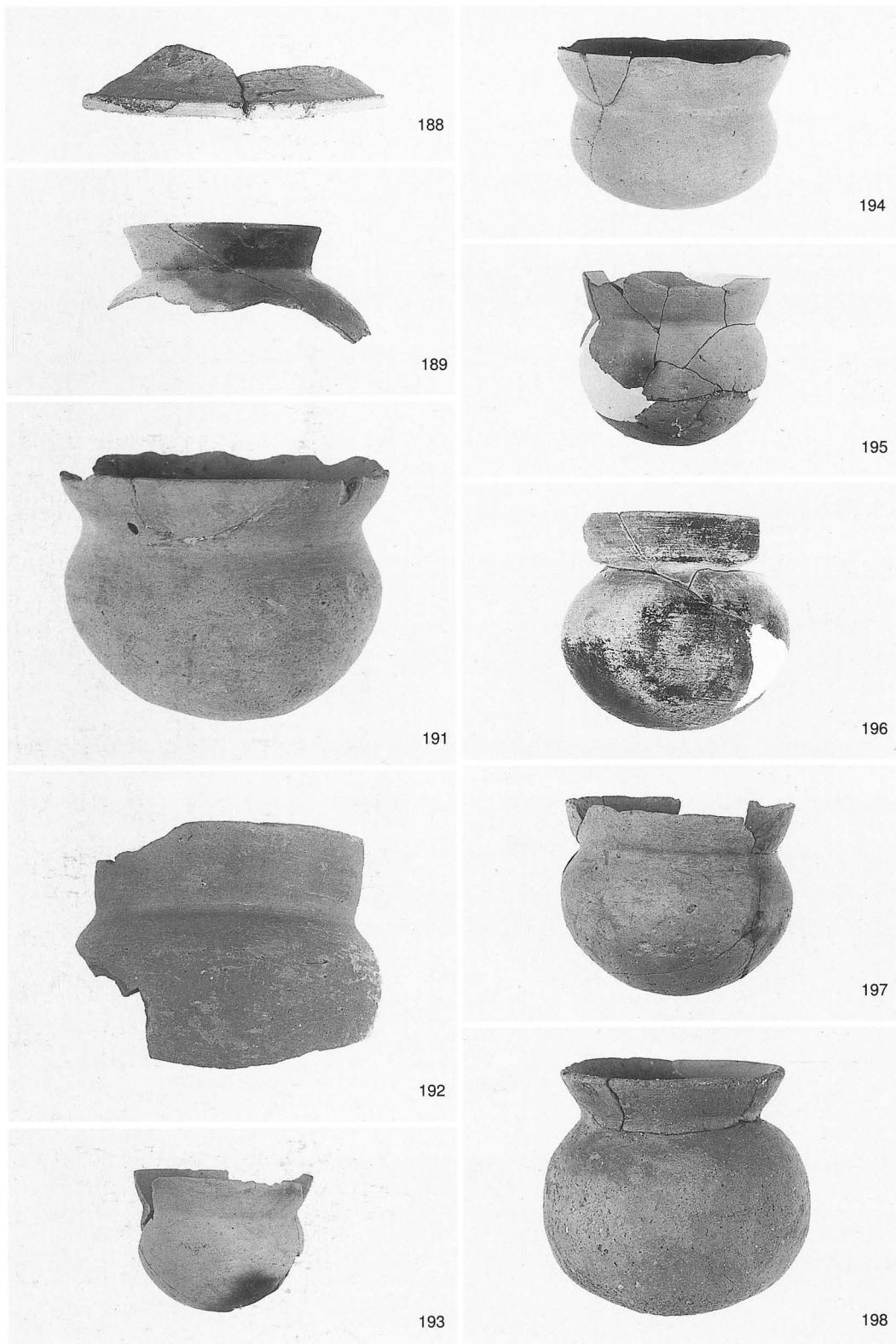


SE-202 (63)、第3層 (118・122~126)、第5層 (187)



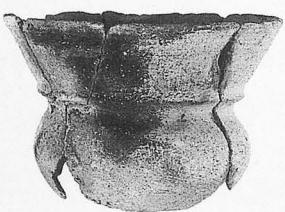
SE-201 井戸側横板（5）、同 井戸側付設部材（6）
同 丸太割抜き井戸側（7）、SK-201 出土「布巻具」（87）

圖版二〇
第25次出土遺物



SE-001 (188)、SD-201 (189)、SO-301 (191~198)

図版二 第25次出土遺物



199



203



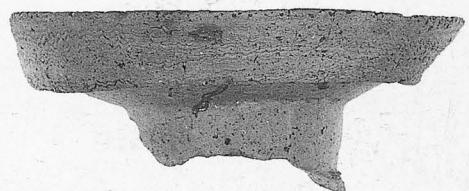
200



204



201



205



202

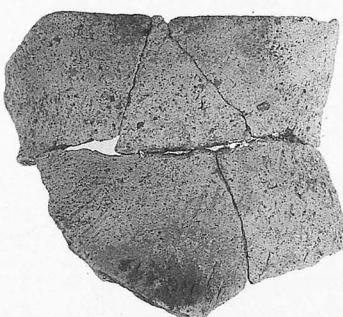


206

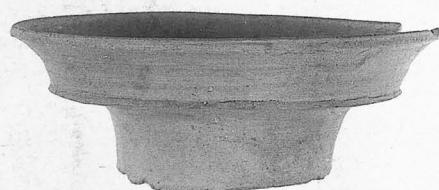
圖版二三 第25次出土遺物



207



212



208



213



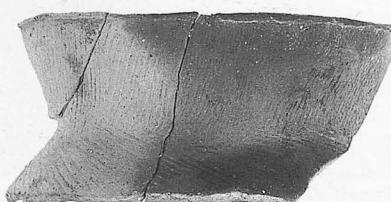
214



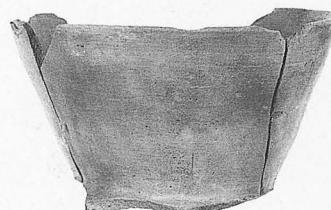
209



215

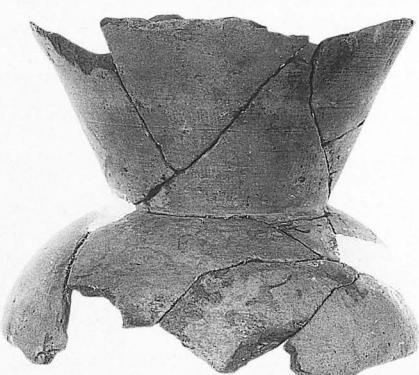


211

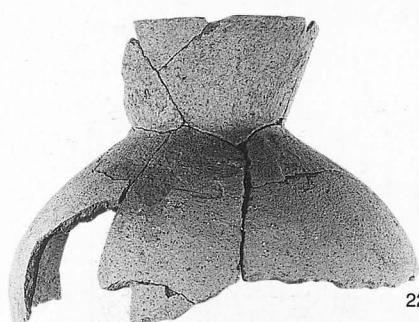


216

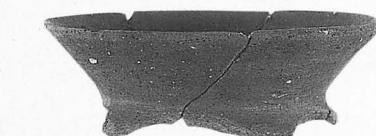
圖版二三 第25次出土遺物



217



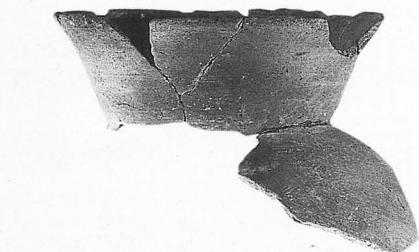
222



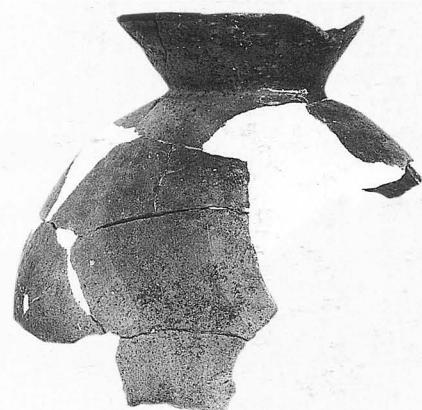
218



223



220



224



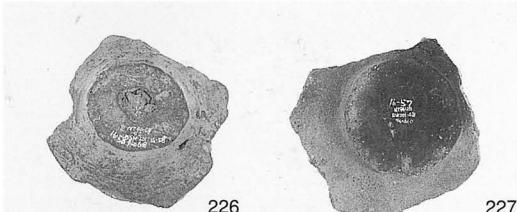
221



225

SO-301

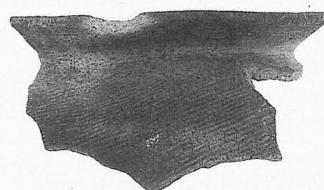
圖版二四
第25次出土遺物



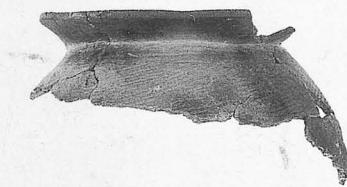
226



227



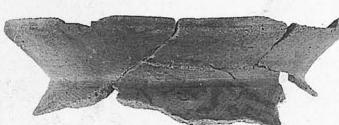
237



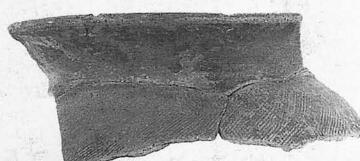
229



238



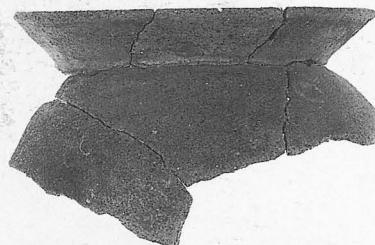
232
233



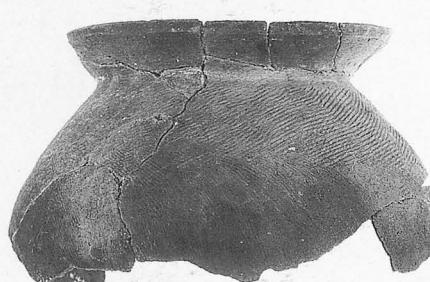
233
234



239



235

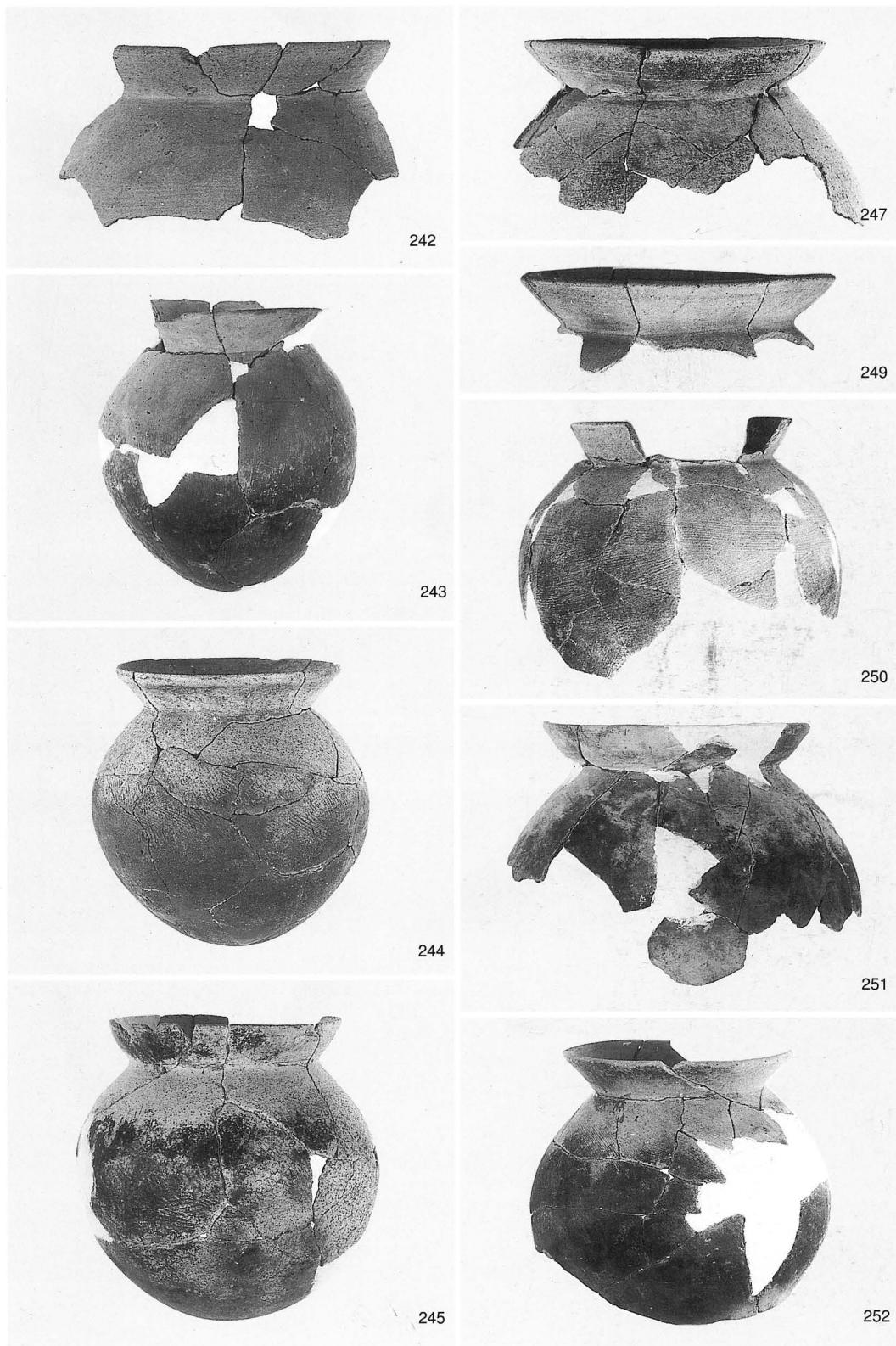


236



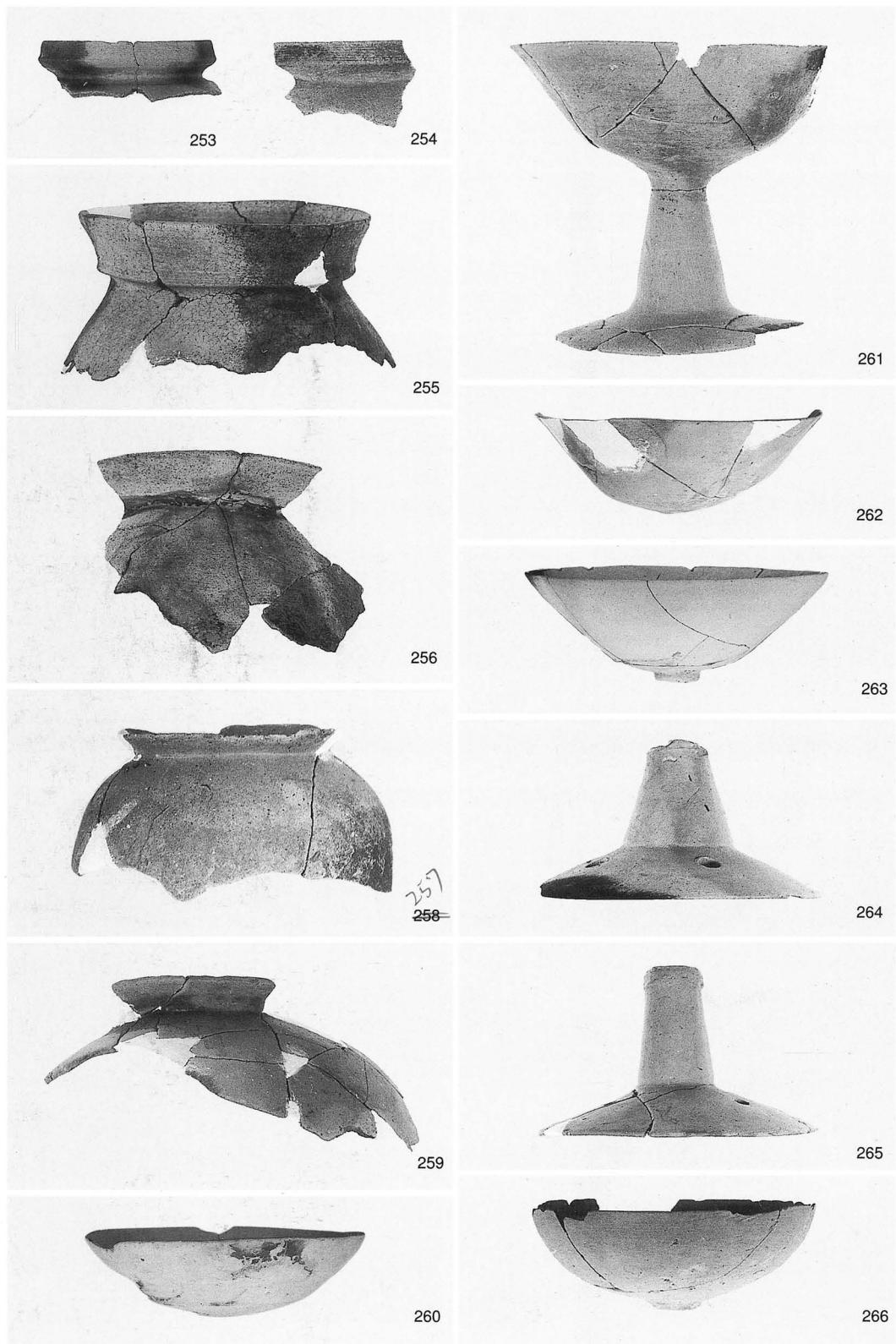
240

圖版二五 第25次出土遺物

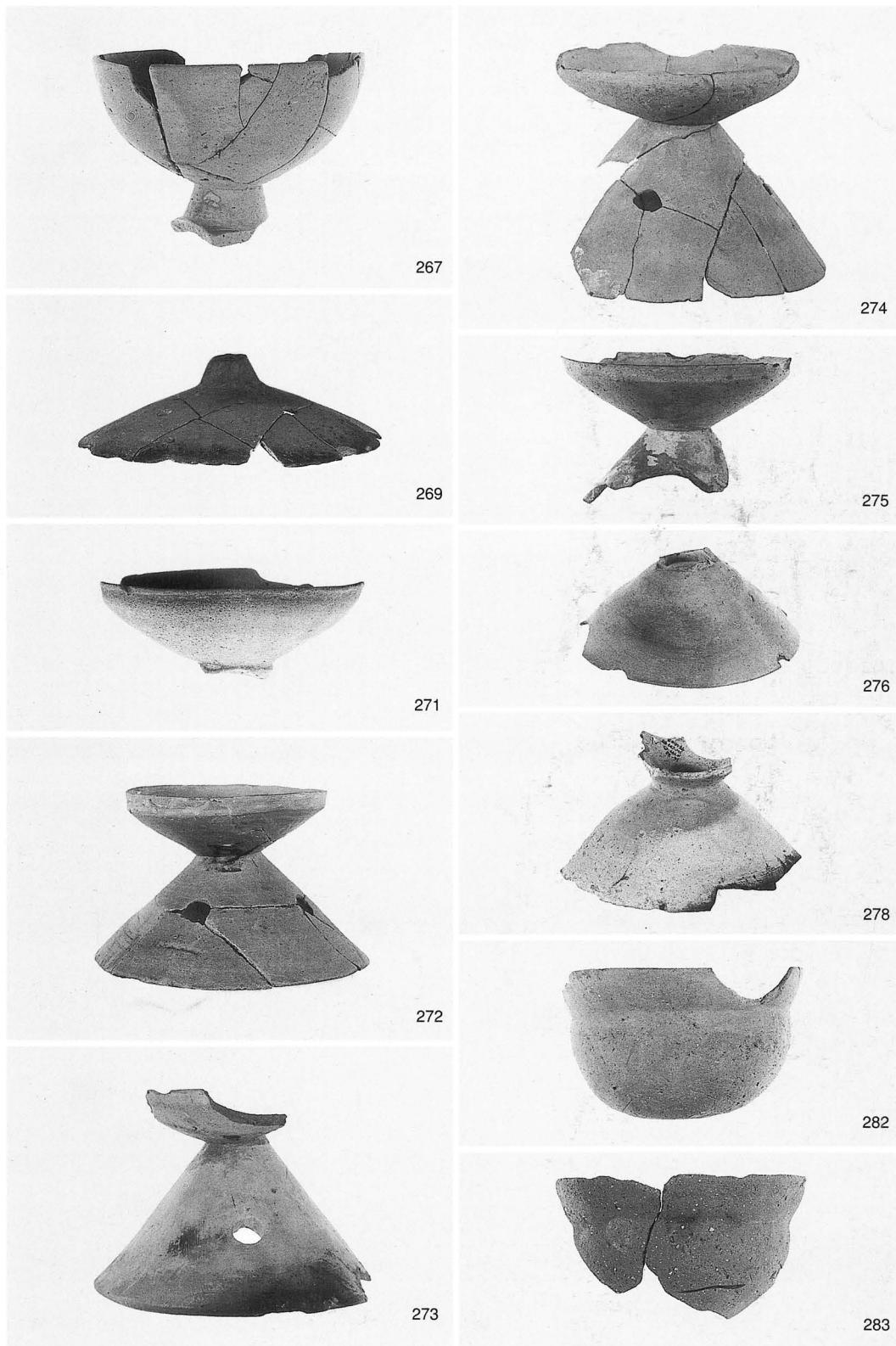


SO-301

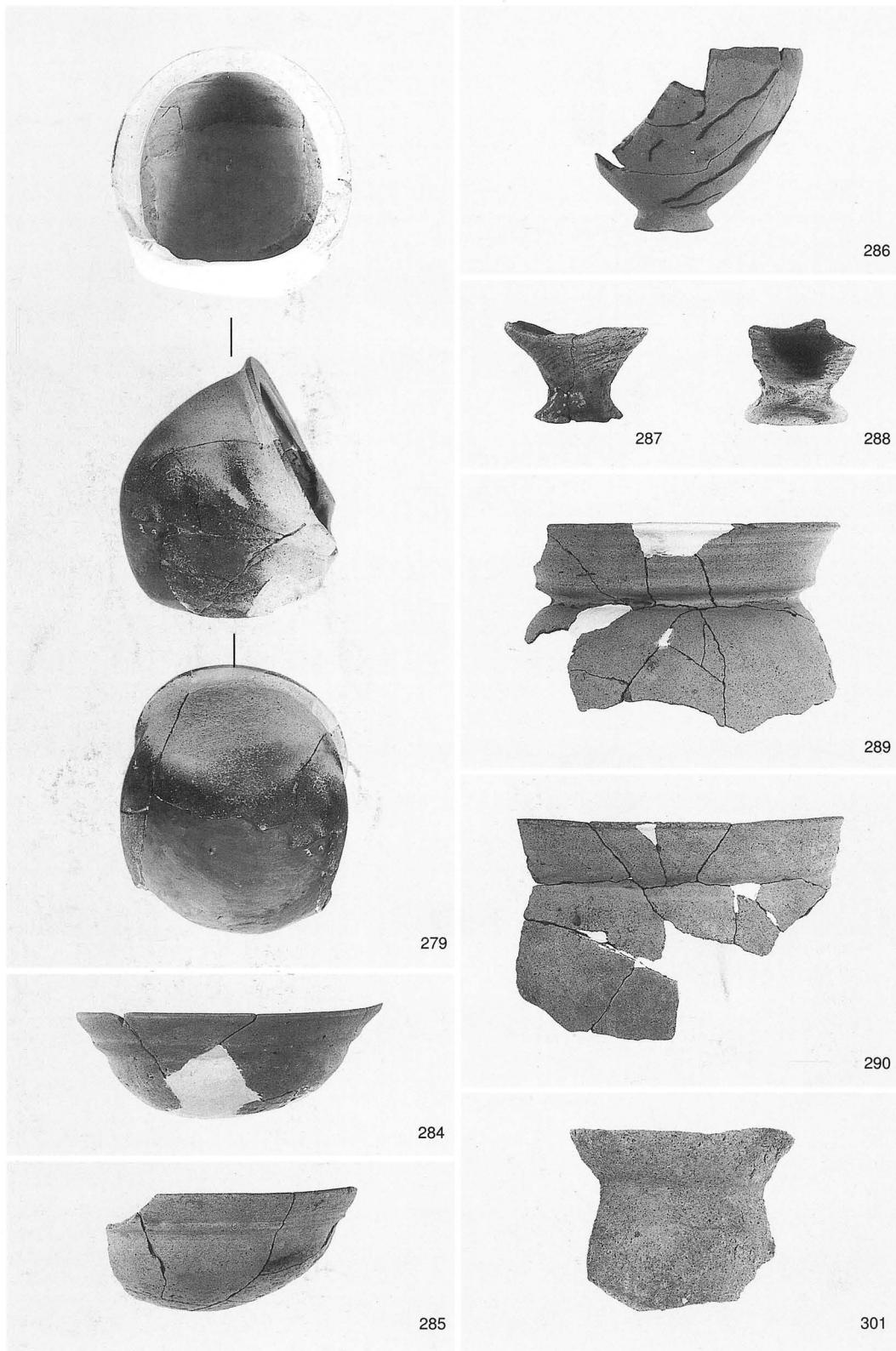
圖版二六
第25次出土遺物



図版二七 第25次出土遺物

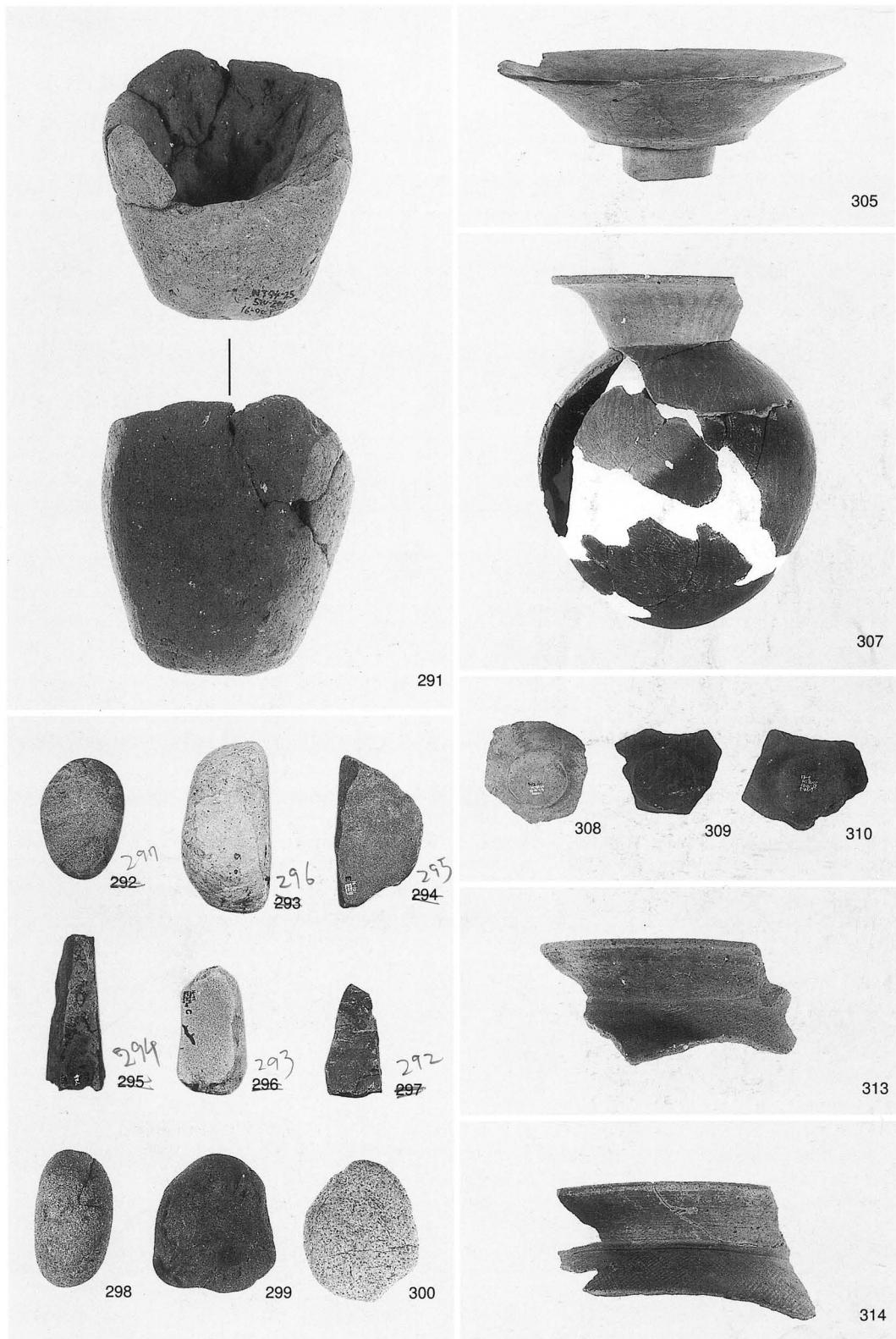


SO-301



SO-301 (279・284~290)、第4層 (301)

圖版二九 第25次出土遺物



SO—301 (291~300)、第4層 (305・307~310・313・314)

図版三〇 第25次出土遺物



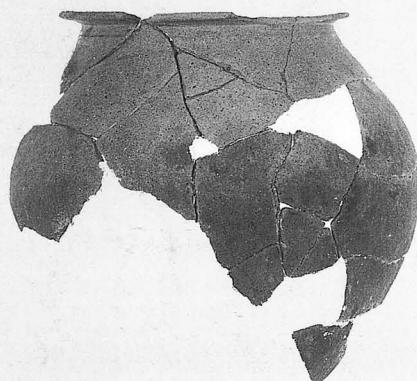
316



328



330



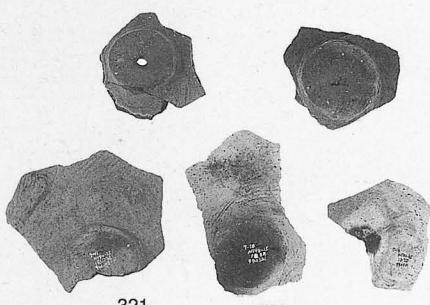
318



331



333



321

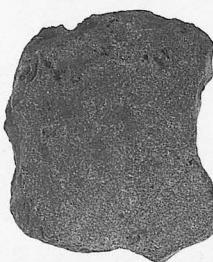
322

323

324



334



335

報告書抄録

ふりがな 書名	なかたいせき ざいだんほうじんやおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく56
副書名	I 中田遺跡（第15次調査） II 中田遺跡（第14・25次調査）
卷次	
シリーズ名	財団法人八尾市文化財調査研究会
シリーズ番号	56
編集者名	I 西村公助・II 岡田清一
編集機関	財団法人八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581 大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2
発行年月日	1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コ ード 市町村	遺跡番号	北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積 (m ²)	調査原因
中田遺跡 (第14次調査)	やおしょおぎきた 八尾市八尾木北6丁目地内	27212		34度 36分 36秒	135度 37分 9秒	19930130～ 19930304	170	公共下水道 工事に伴う 発掘調査
中田遺跡 (第15次調査)	やおしおさかべ 八尾市刑部3丁目地内	27212		34度 36分 43秒	135度 37分 17秒	19930308～ 19930415	35	公共下水道 工事に伴う 発掘調査
中田遺跡 (第25次調査)	やおしょおぎきた 八尾市八尾木北6丁目地内	27212		34度 36分 57秒	135度 36分 51秒	19940530～ 19940622	90	公共下水道 工事に伴う 発掘調査

所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	物 記 事 項
中田遺跡 第14次調査	集落	古墳時代初頭	小穴6	庄内式土器	
		前期	井戸2・小穴21・ 井戸6・溝3・落 込み4・土器集積 1	木製品（削抜き井戸枠・ 布巻具）	
		鎌倉時代	河川1・溝2	瓦器・瓦	
第15次調査	集落	弥生時代後期 前半	土坑2・小穴3・ 溝3	弥生土器（V様式）	
第25次調査	集落	古墳時代前期	土器集積1・小穴 6	布留式土器	
		奈良時代	土坑1・溝2・小 穴1	土師器・須恵器	
		鎌倉時代後期	水田遺構	瓦器	

中田遺跡
財団法人八尾市文化財調査研究会報告 56

- I 中田遺跡（第15次調査）
II 中田遺跡（第14・25次調査）

発行 1997年3月31日
編集 財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581 大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2
TEL・FAX (0729) 94-4700
印 刷 (株)近畿印刷センター
表紙 レザック66 <70Kg>
本文 書籍用紙 <70Kg>
図版 マットアート<135Kg>

029